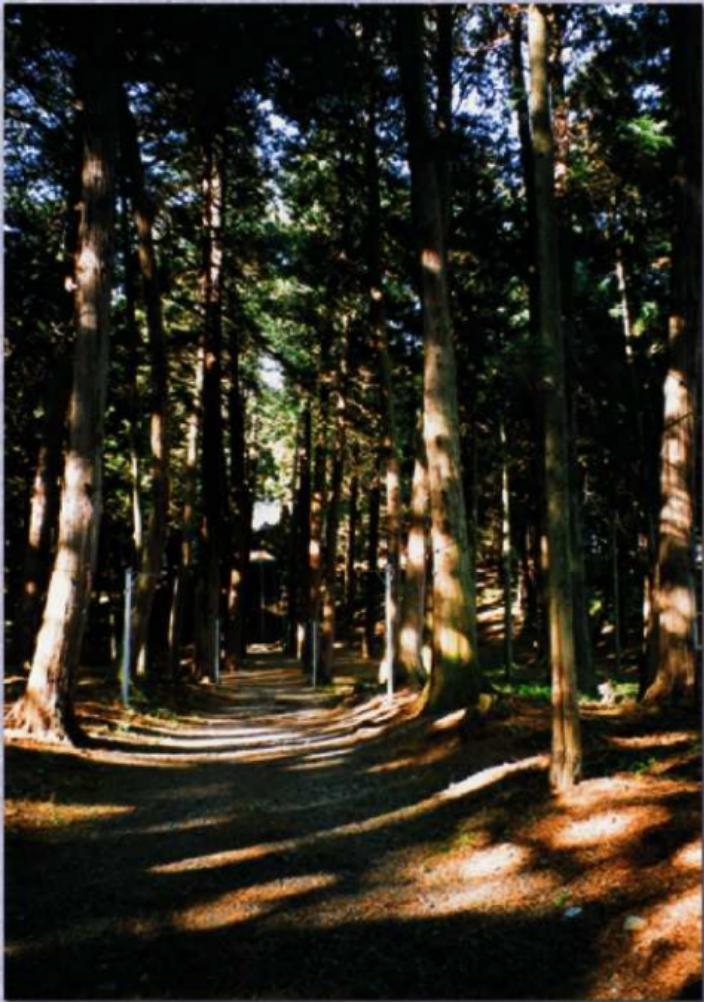


南箕輪の史跡の話



南箕輪の史跡の話

南箕輪村教育委員会

序

この冊子『南箕輪の史跡の話』の前身『南箕輪の史跡』が昭和五四年に刊行され、四十年が経とうとてあります。『南箕輪の史跡』は、『南箕輪村誌編纂中』歴史遺産のみをまとめて冊子にしたもので「郷土を知り・郷土を見直すには、身近な村の史跡についてその由来や価値を知ることが重要」としてまとめられ、大事な資料として地域・村外の方々に広く活用されてきました。

『南箕輪の史跡の話』は、その改訂版で『南箕輪の史跡』編纂の考え方を引き継ぐとともに、新たに発見された資料、取材範囲を広げて得た資料を加味し「私達の村が今に至る足跡、先人達の思いや営み等を明らかにしよう」とまとめられました。

情報化社会の急激な進展の中にある今であるからこそ、『南箕輪の史跡の話』をガイドブックとして村内を巡り村の歴史を理解するとともに、村をつくり上げてきた人々の気持ちや考えに触れることを、期待するものであります。

調査編纂刊行にあたつては、文化財専門委員を中心に、村内各地域の有識者・関係者の皆様方の多大なるお力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

南箕輪村教育委員会

教育長 清水 開成

例　言

一、この冊子は、昭和五四年に刊行された『南箕輪の史跡』を改訂したものです。教育委員会より「村制一五〇周年を迎えるにあたつてすべき事」の諮問を受け、現在利用の多い『南箕輪の史跡』を、より利用しやすいものにしたいということで、文化財専門委員会が取り組んで作ったものです。

二、改訂の要点は次の通りです。

(一)利用する人々を更に広げるために、表現も内容も易しく分かりやすいものにする。

(二)四〇年経過した中で、補充したこと・変化したことなども加味する。

三、改訂に当たって、留意したことは次の通りです。

(一)扱い易くするために、B5版・二〇〇ページ前後のものにする。

(二)親しみ易く、読み易くするために

1. 写真はカラーワ 写真にし、できるだけ多く取り入れる。

2. 文体は「です・ます」にし、中学生も平易に読めるようとする。

3. 読みが難しいと思われる言葉にはルビをつける。

(三)『南箕輪の史跡』には、説明の根拠となる「注」が多く入り、それが漢文等で書かれていて難解と思われる所以で、内容を出来るだけ本文の中へ簡明に取り入れ、「注」は少なくする。

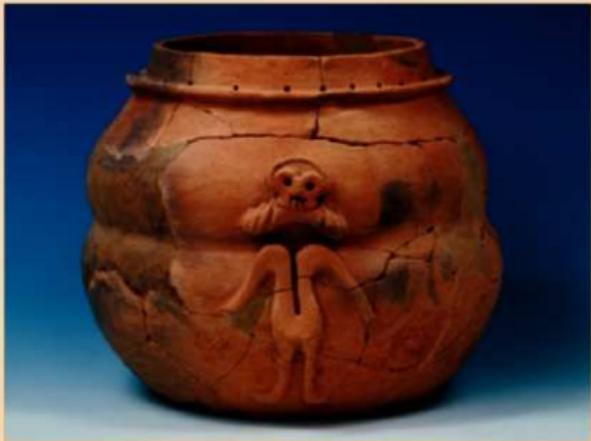
(四)『南箕輪の史跡』にはない「道路」・「公共施設」・「用水」などのことも「史跡」の一つと考え取り上げる。

(五)写真・図版などで、古いもので入手困難なものは『南箕輪の史跡』・『南箕輪村誌』他からも転用する。



神子柴遺跡出土「神子柴型石器」(国重要文化財) 66点のうちの一部

平成30年度 県宝指定 繩文土器



人体文付有孔鉢付土器（久保「上ノ平遺跡」出土）



鉤手土器（大泉「北高根遺跡」出土）



浅鉢（久保「上ノ平遺跡」出土）



村指定文化財「新四国靈場」(北殿)



村指定文化財 勝光寺の「十一面觀音像」(大泉)



村指定無形文化財「大和泉神社鹿踊り」



村指定無形文化財 民謡「御嶽山」(大泉)



村指定天然記念物「エドヒガン桜」(北殿)



村指定天然記念物「恩徳寺の大銀杏」(沢尻)

村指定文化財「大宗館文庫」(村郷土館)
南殿 有賀家より寄贈された書画・図書・古文書類



郷土館に展示されている書画



文庫の中にある浮世絵の一枚

村指定文化財「大和泉神社本殿」の立川流小口直四郎の彫刻



村指定文化財の「御射山社」碑（神子柴）



西原(南原の西)の碑

開拓

南箕輪12区のうち、北原・大芝・南原地区は山林原野の開拓によってできました。



左：開墾鍬　右：普通の鍬

厚く大きな鍬で開墾した(郷土館蔵)

水を求めて

水が少ない西部地区へ水をといで、水を求めて村人は苦闘してきました。

(昭和に入るまで)



西天竜水路に付設した円筒分水槽



芋ノ田の横井戸(神子柴—信大玄関南)

目 次

第一

全村

一 南箕輪村の由來 三

二 交通 六

春日街道 八

伊那街道 七

権兵衛街道 七

中央道・大型農道等 八

飯田線（電車） 九

天竜川通船 一〇

橋と渡し舟 一

入会山野の分割と飛び地 二

飛び地の概略 二

御射山分割記念碑 二

造林記念碑 二

河川・用水 二

天竜川 二

大泉川・大清水川・戸谷（鳥谷）川 三

西天竜幹線水路 三

湧水と横井戸 四

上下水道 五

第二

久保

内 排水・揚水 一

一 久保の由來 三

二 神社 三

神明宮 三

境内社他 三

山の神社跡 三

惣滝現・日光滝現跡 三

白山神社碑 三

寺堂 三

西念寺跡 三

境内堂仏 三

久保寺跡 三

久保学校 三

古跡名勝 三

箕輪遺跡 三

棚木城跡 三

上ノ平遺跡 三

丸山古墳 三

伊那街道跡

一 南箕輪村の由來 三

二 交通 六

春日街道 八

伊那街道 七

権兵衛街道 七

中央道・大型農道等 八

飯田線（電車） 九

天竜川通船 一〇

橋と渡し舟 一

入会山野の分割と飛び地 二

飛び地の概略 二

御射山分割記念碑 二

造林記念碑 二

河川・用水 二

天竜川 二

大泉川・大清水川・戸谷（鳥谷）川 三

西天竜幹線水路 三

湧水と横井戸 四

上下水道 五

(内) 天王

六 碑

- (一) 利澤千秋碑
(二) 桐亭良亮筆塚
(三) 一貫句碑(日ぐらし塚)
(四) 馬場水師夫妻句碑
(五) 庚申塚
(内) 旧西念寺入口の碑・像
(七) 水神
(八) 道祖神

五 遺跡・旧跡

- (一) 古宮跡
(二) 塚畠
(三) 富士塚跡
(四) 上人塚
(内) 蚕玉様
(五) 郷藏
(六) 猿田彦命の土棟机
(七) 翁塚
(八) 開田記念碑

第三 塩ノ井

一 明治一年(一八六八)の塩ノ井絵図

二 塩ノ井の由来

三 塩ノ井神社と境内社

(一) 塩ノ井神社

(二) 境内社

四 西光寺

四 四 四 四 四 四 元 毛 老 天 天 天 天 天 天 天 天 天 天 天 天 天 天

(内) 所蔵の文化財

五 遺跡・旧跡

- (一) 古宮跡
(二) 塚畠
(三) 富士塚跡
(四) 上人塚
(内) 蚕玉様
(五) 郷藏
(六) 猿田彦命の土棟机
(七) 翁塚
(八) 開田記念碑

六 句碑・顕彰碑など

(一) 鍾水の碑

(二) 征矢吉兵衛歌碑

(三) 征矢貫通歌碑

(四) 征矢眞白翁碑(筆塚)

(五) 征矢政十郎君碑

(六) 道祖神

(七) 寒念供養碑(道標を兼ねてある)
庚申塚

四 四 四 四 四 四 元 毛 老 天 天 天 天 天 天 天 天 天 天 天 天 天 天

四 四 四 四 四 四 元 毛 老 天 天 天 天 天 天 天 天 天 天 天 天 天 天

七 用水	(一) 生活用水	五
	(二) 水車場利用	五
	(三) 水田用水	五
八 交通	(一) 伊那街道(後の三州街道)	五
	(二) 居村の里道	五
第四 北殿		五
一 北殿の由来		五
二 神社		五
(一) 北殿神社		五
(二) 天満宮(天神様)		五
(三) 里宮神社跡		五
(四) 駒形大明神跡		五
(五) 山の神神社跡		五
三 松林寺		五
四 新四国霊場(お四国様)		五
(一) 有賀嘉吉のこと		五
(二) 霊場建立の趣旨と経過		五
(三) 諸国神社仏閣塔		五
(四) 信仰と保存		五
五 遺跡・古跡・名木		五
六 句碑・筆塚・歌碑・顕彰碑等		六
(一) 芭蕉句碑(おきな塚)		六
(二) 矢部鷺堂筆塚		六
(三) 伊藤翁筆塚		六
(四) 倉田寛幹歌碑		六
(五) 倉田翁頌徳碑		六
(六) 南箕輪中学校校歌碑		六
(七) 「若竹」の像		六
(八) 「人には自らは」の碑		六
七 信仰碑		六
(一) 庚申塚・甲子塔		六
(二) 道祖神		六
(三) 月待信仰碑		六
(四) 山岳信仰碑		六
(五) 水神碑		六
八 近代施設		六
(一) 北殿学校跡		六
(二) 南箕輪郵便局		六

(三) 南箕輪村郷土館	九 用水路
四 長田製糸工場跡	(一) 生活用水
(二) 水田用水	(二) 水田用水
五 北殿宿(大泉北殿合宿)	十 交通
六 北殿駅	(一) 北殿駅
七 北殿橋(天童橋)	(二) 北殿橋(天童橋)
八 道標	(三) 道標
九 南殿	第五 南殿
一 南殿の由来	一 南殿の由来
二 神社	二 神社
三 殿村八幡宮	三 殿村八幡宮
四 神明宮	四 神明宮
五 三峯神社	五 三峯神社
六 堂庵	六 堂庵
七 行者堂(龍麟閣)跡	七 行者堂(龍麟閣)跡
八 地藏庵(円明庵とも言われた)跡	八 地藏庵(円明庵とも言われた)跡
九 十王堂跡	九 十王堂跡
一 公共施設等	七 用水
二 横井戸	(一) 川からの引水
三 泉涌水	(二) 泉涌水
四 南殿学校跡	四 南箕輪村役場
五 遺跡・古跡	五 遺跡・古跡

(二) 南箕輪農業協同組合 三三
 (三) 村診療所 三三
 四 駐在所 三三

(三) 伊賀島井他 三三
 (四) 精進舎(屋)井 三四
 (五) 伊那土地改良組合排水路(くろ川) 三四
 (六) 揚水機場 三四

下水処理場 三四

第六 田畠 兜
 一 田畠の由来 兜
 二 社寺等 兜
 (一) 田畠神社 兜
 (二) 堂跡 兜
 三 田畠学校跡 兜
 四 古跡 兜

(一) 清水城跡 兜
 (二) 富士塚(浅間塚) 兜
 (三) 日戸氏館跡 兜
 (四) 弁天ヶ崎 兜

五 碑 兜
 (一) 芭蕉塚(尾花塚) 兜
 (二) 庚申塚 兜
 (三) 道祖神碑 兜
 (四) 水神碑 兜
 (五) 馬頭観音碑 兜
 (六) 青山塚(三郎歌碑) 二基

六 用水 一三
 六 用水 一三
 六 用水 一二
 六 用水 一二
 六 用水 一〇
 六 用水 九
 六 用水 八
 六 用水 七
 六 用水 六
 六 用水 五
 六 用水 四
 六 用水 三
 六 用水 二
 六 用水 一

(一) 半沢井 三三
 (二) 伊賀島井他 三三
 (三) 精進舎(屋)井 三四
 (四) 伊那土地改良組合排水路(くろ川) 三四
 (五) 揚水機場 三四

下水処理場 三四

七 街道 三四

(一) 伊那街道 三四

(二) 山道とかんの道 三四

(三) 新しい道 三四

(四) 明神橋 三四

(五) 田畠駅 三四

(六) 神子柴 三四

一 神子柴の由来 三四

二 神社 三四

(一) 神子柴神社 三四

(二) 境内社 三四

(三) 御射山社(御射山社鳥居跡) 三四

(四) 薬師堂 三四

(五) 金剛院 三四

(六) 役の行者の石像 三四

四 公共施設

(一) 神子柴学校跡

(二) 公民館

(三) 保育園(所)

(四) 上伊那農業高等学校第一農場(中の原農場)

(五) 信州大学農学部

五 古跡など

(一) 神子柴遺跡

(二) 古城跡

(三) 五輪塔

(四) 内城跡

(五) 高木氏館跡

(六) 天竜川通船

(七) 高木館製糸場(所)跡

六 石碑

(一) 庚申塚・甲子塔など

(二) 道祖神

(三) 駒形道の碑

(四) 川原の碑

(五) 芋ノ田の碑

(六) 神子柴水道水神碑

(七) 伊奈誠一郎慰靈碑

四 宮ヶ崎の碑

(一) 用水

(二) 生活用水(神子柴水道)

(三) 半沢井

(四) 川原井

八 橋

(一) 大清水橋跡

(二) 神子柴橋

(三) 伊那街道筋

(四) 東西の道

(五) 国道一五三号線(伊那バイパス)

第九 沢尻の由来

一 沢尻の由来

二 神社

(一) 日光社月光社

(二) 伊稚媛天大神宮

(三) 諏訪社

三 恩徳寺

(一) 本尊 不動明王

(二) 本尊以外の仏像

(三) 堂宇

(四)

四	大銀杏	一	豈	三	大泉学校	一	豈
四	沢尻学校跡	一	豈	四	古跡	一	豈
五	宮島氏館跡	一	豈	四	高根遺跡	一	豈
六	碑	一	豈	四	大泉氏の館址	一	豈
(一)	成田山開山記念碑	一	豈	(一)	一里塚	一	豈
(二)	庚申塚	一	豈	(二)	蛇塚	一	豈
(三)	水神	一	豈	(四)	立石	一	豈
(四)	供養塔	一	豈	五	道路	一	豈
(五)	「舊領主太田家分墓」碑（江戸時代真輪領主）	一	豈	(一)	道標	一	豈
(内)	丁石	一	豈	(二)	春日街道	一	豈
七	横井戸	一	豈	(三)	かない道	一	豈
(一)	月見横井	一	豈	六	碑	一	豈
八	学校関係	一	豈	(一)	庚申塚など	一	豈
(一)	長野県上伊那農業高等学校	一	豈	(二)	道祖神	一	豈
(二)	長野県上伊那高等学校 中の原農場（上農寮）	一	豈	(三)	その他の碑	一	豈
第九	大泉	一	豈	(四)	開墾の碑	一	豈
一	大泉の由来	一	豈	(一)	下井	一	豈
二	神社・仏閣	一	豈	(二)	上井	一	豈
(一)	大和泉神社	一	豈	(三)	新井	一	豈
(二)	境内社	一	豈	(四)	横井戸	一	豈
(三)	高根社・山の神	一	豈				
(四)	大泉山勝光寺	一	豈				

第十

南原の由来

二 神社

- (一) 二宮神社 三
 (二) 天満宮 石碑 三

三 遺跡

- (一) 南原遺跡 二
 (二) 曾利目遺跡 二

- (三) その他の遺跡 二
 (四) 碑 二

- (一) 南原「拓魂」の碑 二
 (二) 西原「拓魂」の碑 二
 (三) 水神碑 二

- (四) 道標 二
 (五) その他 二

五 公共施設

- (一) 南部小学校（学校の位置は沢尻地区です） 二
 (二) 長野県南信工科短期大学校 二

第十一 大芝

一 大芝の由来

- (一) 大芝神社 一
 (二) 神社 一
 (三) 大芝神社 一

二 天満宮

三 遺跡

- (一) 大芝原遺跡 二
 (二) 大芝東遺跡 二

四 碑

- (一) 開拓記念碑 二
 (二) 西天童大泉川南再圃場整備完成記念碑 二

- (三) 句・歌碑 二
 (四) 寒念仏 碑 二

- (五) 道標 二
 (六) 馬頭観世音 碑 二
 (七) 庚申碑 二

- (八) 畜魂 碑 二
 (九) 社会福祉関係 二

- (一) 大芝公園施設 二
 (二) 大芝の由来 二

第十二 北原

一 北原の由来

- (一) 諏訪神社 二
 (二) 権理塚 二

四 庚申塚	一 茅	(八) 薬師信仰	二八
五 用水	二 茅	(九) 十二神将	二八
(一) 竪て井戸	一 茅	(十) 十王信仰	二八
(二) 水道創設	一 茅	(十一) 甲子信仰	二八
(三) 農業用水	一 茅	(十二) 山岳信仰	二八
六 公民館	一 茅	(十四) 筆塚	二九
第十三 中込	一 茅	(十五) 園社寺建築用語	二九
一 中込の由来	一 茅	五 南箕輪遺跡一覧表	三三
二 中込城跡	一 茅	六 南箕輪小学校沿革概表	三四
三 中込公民館	一 茅	七 南箕輪村にあつた横井戸一覧表	三四
第十四 資料	一 茅	あとがき	二五
一 『長野県町村誌』について	二一		
二 田中城址	二一		
三 上農寮跡と村上明彦先生と信州大学農学部	二三		
四 碑や社寺等を見学するための参考	二四		
(一) 山の神	二四		
(二) 水神	二四		
(三) 庚申信仰	二四		
(四) 日待・月待信仰	二四		
(五) 道祖神	二四		
(六) 観音信仰	二四		
(七) 地藏信仰	二七		

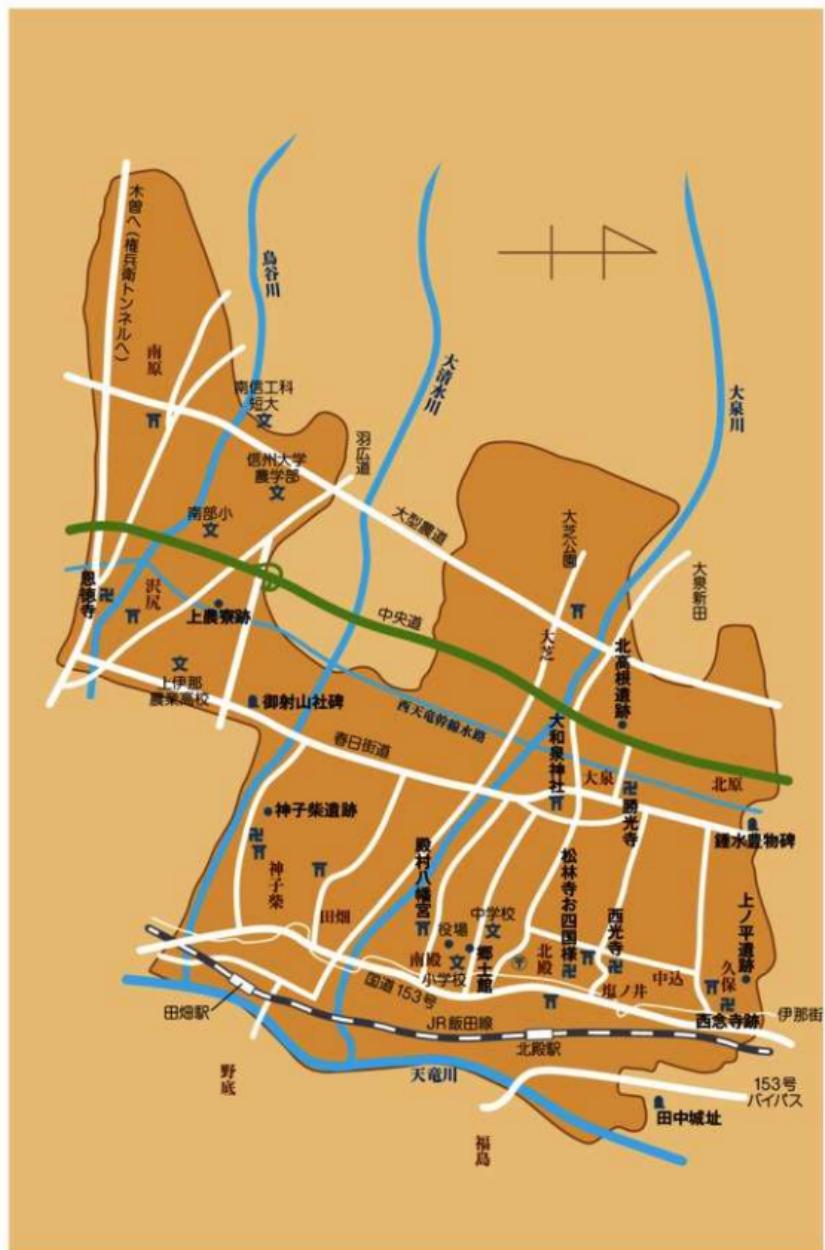
表紙の写真は殿村八幡宮の参道

あ	とがき		
七	南箕輪村にあつた横井戸一覧表	三四	
六	南箕輪小学校沿革概表	三四	
五	南箕輪遺跡一覧表	三三	
四			
三			
二			
一			

第一全 村



空から南箕輪村を見る



一 南箕輪村の由來

南箕輪村が誕生したのは、明治八年（一八七五）二月一八日のことでした。

この地域に人が住むようになつたのは、いつの頃からかははつきりしませんが、南箕輪村の遺跡として最も古いのは「神子柴遺跡」で、一万一千年前の旧石器時代から新石器時代へと移り変わる頃の遺跡です。（異説もあります）

縄文時代に入ると、村内にもたくさんの遺跡があり、その遺物が出土していて、久保の「上ノ平遺跡」から出土した「人体文付有孔鍔付土器」などのように、考古学界から注目を集めめた土器も出土しています。（遺跡については、巻末の「遺跡一覧表」及び各地区の遺跡説明を参照のこと）

次の弥生時代や古墳時代の遺跡・遺物も村内各所から出土しています。これらのことから、この村にも大昔から経ヶ岳山塊の扇状地末端の湧水が出るあたりや、西山からの川のほとりに入々が生活していたことがわかります。

日本の国に社会組織ができるようになって、この辺は科野の国と言わっていましたが、和銅六年（七一三）からは信濃国と呼ばれるようになりました。一時期（七二一年から一〇年間）諏訪國になりましたが、明治（一八六八）の初めの頃

まで信濃國に属していました。

平安時代に入り、各地に荘園(注①)ができるようになると、この辺は「信濃國伊那郡路原莊箕輪郷」と言われていました。この頃の遺跡もいくつか村内にあります。

中世末（一五〇〇年代）になって、村内のこと事が文献に出で来ます。城館(注②)として棚木城・中込城・倉田城・有賀の城・古城・内城・日戸氏館・大泉上総館・宮島氏館など、神社として御射山社・御尺地社・八幡宮など、また、大泉上総・倉田將監・高木氏などのように戦で活躍した人々の話などです。しかし、詳しいことは分かりません。

江戸時代に入ると、行政単位としての「村」がはつきりして来て、慶長六年（一六〇一）に実施された検地帳(注③)（北殿の千桐屋文書）によると、箕輪郷の中に久保村・殿村・田畠村・神子柴村・沢尻村・大泉村の名前が見えます。江戸時代の南箕輪村関係の領主は、飯田城主小笠原秀政が一六年間、飯田城主脇坂淡路守が五六六年間、寛文二年（一六七二）からは幕府領（天領という言い方もあります）となり、代官の支配を受けました。天和二年（一六八二）から板倉領（私領）となり、元禄二年（一六九九）からは、今の南箕輪の範囲が二つに分かれて統治されるようになりました。久保（塙ノ井・沢尻地区を含む）・北殿の一部・南殿の大部分は、太田隱岐守（旗本）の私領となり、大泉・北殿の大部分・南

殿の一部・田畠・神子柴の地区は幕府領になりました。その後、明治時代に入るまで、この時私領に入つた地区は、幕府領になつたり私領になつたりしました。江戸時代の人口は、多少の変動はありましたが、一二五〇余年の間、今の南箕輪村の範囲で一六〇〇人から一七〇〇人くらいであったようです。農業中心の生活で、江戸時代後期になり商工業も少しずつ発展していったようです。換金作物を作つたり、衣・食の加工品を作つたりして金銭を得て、生活の足しにしていました。す。

明治時代（一八六八）に入り、行政の仕組みがどんどん変わっていく中で、南箕輪村は初め四年間は伊那県に属し、明治五年からは筑摩県に、明治九年からは長野県に所属するようになつて今日に至っています。

明治八年に、久保村（塩ノ井地区）と沢尻地区は当時久保村に含まれていました・大泉村・北殿村・南殿村・田畠村・神子柴村の六ヶ村が合併して南箕輪村をつくりました。（地区間のつながり、役所までの距離などの課題を乗り越えて）そして、塩ノ井地区と沢尻地区が独立し、八耕地となりました。その後分村などの動きもありましたが、明治二三年（一八八九）の町村制施行の合併の嵐の中でも八耕地を維持していました。そして、大正三年（一九一四）耕地から区といふ呼び名に変わり今日まで続いています。



村落合併願書（神子柴大和手文書より）

南箕輪村に住む人々は、昔から農業によって生計をたててきました。南箕輪村は経ヶ岳扇状地上にあり、水は扇状地を伏流して末端の所へ出て来ます。そのため、広大な西部地区に水がなく、村人たちはここに水があつたら豊かな作物が実るのにという思いで長い間過ごしてきました。そして、水を

得るために、井戸・横井戸の掘削、川からの引水、西天竜用水路による引水などにより、山林・原野を切り拓き、多くの田畠を造りあげて来ました。また、収入を上げ、生活を豊かにするために養蚕・果樹栽培などの工夫もしてきました。

しかし、昭和三〇年代（一九五五）以降世界・日本の激しい社会変動の中で、南箕輪村も農業は徐々に衰退し、商業が盛んになってきています。そして、田畠がいっぱい広がっていた風景も大きく変わりつつあります。

南箕輪村には広い山林があります。これらの多くはかつては入会地（注④）だった所で、明治以後（一八六八）の入会地分割の時、村の先覚者たちの努力によって得た山林です。この山林に植林し、育った木材を売って村財政の補助にしてきました。しかし、昭和四〇年代（一九六五）になると、木材価格が低迷するようになり、林業も衰退していきました。

太芝公園は、かつて植林をした跡地です。

昭和三〇年代（一九五五）後半からの村の変貌は大きいものです。

人口は、村が誕生した時は二千人余、昭和三〇年には六千人余、現在は一

万五千人余となつて増えています。村内各地に広がつていた田園風景が消えて行き、会社・工場・商店・住宅がいっぱいになつてきました。

村内には、保育園五、小学校一、中学校一、高等学校一、短期大学校一、大学一があり、教育環境も整つてきていました。

（巻末資料「南箕輪小学校沿革概表」も参照のこと）

注① 荘園とは、奈良・平安時代から室町時代頃まで見られた私有地（公家・社寺・有力者などの所有地）です。「伊那志略」等の書物に出て来ます。

注② 檢地とは、領主が自分の所有地をはつきりさせるためと、国農民の保有する田畠・屋敷地の面積とその石高（収穫高）を調査したことを言います。それによつて税を決めました。

注③ 左表は明治以降の南箕輪村の移り変わり（村誌より）

● 6か村合併 南箕輪村誕生(明治8.2.18)									
神 田 南 北 大 沢 塩 久 保 村 子 煙 殿 殿 衆 戶 井 村 柴 耕 地 耕 地 耕 地 耕 地 区 区 区 区 区 区 区 区 区 区									
南箕輪村									
(419戸 2,333人)									
↓									
● 8耕地となる(明治8.2.18)									
神 田 南 北 大 沢 塩 久 保 耕 地 子 煙 殿 耕 地 耕 地 耕 地 耕 地 柴 耕 地 耕 地 耕 地 耕 地 耕 地 区 区 区 区 区 区 区 区 区 区									
南箕輪村									
(419戸 2,333人)									
↓									
● 8区となる(大正3年)									
神 田 南 北 大 沢 塩 久 保 区 子 煙 殿 殿 衆 戸 井 区 柴 耕 地 耕 地 耕 地 耕 地 区 区 区 区 区 区 区 区 区 区									
南箕輪村									
大正5年(680戸 4,333人)									
↓									
● 11区となる(昭和21年)									
南 大 北 神 田 南 北 大 沢 塩 久 原 芝 原 子 煙 殿 殿 衆 戸 井 区 区 区 区 区 区 区 区 区 区 南箕輪村									
昭和22年(1,105戸 6,150人)									
↓									
● 12区となる(昭和50年)									
中 南 大 北 神 田 南 北 大 沢 塩 久 込 原 芝 原 子 煙 殿 殿 衆 戸 井 区 区 区 区 区 区 区 区 区 区 南箕輪村									
(2,048戸 7,676人)									
↓									
平成30年 5,977世帯 人口15,391人									

南箕輪村の成立と発展

注④ 入会地とは、その土地の近辺に住んでいた人々が共同の利用権を持つ土地のこと。多くは山林原野でした。刈畠(肥料にするための草木)・薪(家畜の飼料としての草木)・萱(屋根を葺く草)・柴(燃料にする枯れ枝落ち葉)、用材(家の補修に使う木材)等を得ていました。明治以降所有者をはつきりさせるため、町村割・地区割等に分割されていきました。

一 交通

東西に大きな山脈をいたでいる伊那谷の交通は、南北の交通が中心で、古くは東山道。(注①) 中世以降は天竜川西に春日街道・伊那街道、天竜川東に宗良親王や武田信玄が通った戦いの道・秋葉街道などの道が開かれました。

近世になり、物資の流通や人々の交流が盛んになって来るべく松本・諏訪・飯田・高遠などの物資の集散地、政治や文化の中心地である城下町等への交通が盛んになっていき、道路も整備されていきました。

明治以降の交通の発達は目覚ましく、荷車や馬車の輸送が

盛んになり、次いで鉄道(飯田線)の輸送が隆盛しました。自転車も普及していきました。昭和の中頃になると自動車交通がぐんぐん盛んになっていきました。交通が盛んになると従い、道路が整備されていきました。なるべく直線に、坂を避けて、舗装道路へと改良されていきました。自動車交通の隆盛は現在も続いている。

また、交

通が盛んになるにつれ新しい道路が次々に造られていきました。中央自動車道、大型農道、バイパス道路などです。また、集落内の狭い道路まで舗装道路となつていきました。



脇坂絵図「上伊那誌」歴史編より

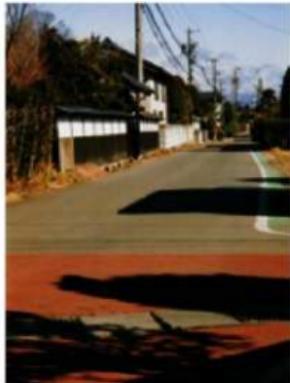
た。

東西の交通は、大きな川の天竜川、東西の大山脈に阻まれて発達しませんでしたが、永久橋が架けられ、トンネルが掘られて、木曽へ、高遠・諏訪・遠山へと短時間でいけるようになりました。

注① 東山道は、七世紀から八世紀にかけて造られた、中央政権（奈良にあった）の治世のための道路で、今の国道にあたります。南箕輪村の中も通っていたと思われますが、どこを通っていたか諸説があつてはつきりしません。南箕輪村の近くの駅として、南に宮田駅、北に深沢駅（箕輪町）が設置されたと伝わっています。

(一) 春日街道

この街道の成立には諸説がありますが、慶長六年（一六〇一）から一三年にかけて造られたと伝えられています。松本（飯田間を結ぶ軍用道路・物資の輸送道路で、速く通行できることを重視して直線的に造られたとも伝わっています。また、



春日街道（中宿から北へ）

飯田城主小笠原秀政の家臣春日淡路守が奉行として工事をしたので春日街道という呼び名がついたと言われています。大泉宿はこの時設置されました。松島宿と伊那部宿との間に宿として設置されました。大泉には街道や宿場の名残が見られます。

宿場は、旅行者や貨物がスムーズに通行出来るようにするための施設で、そこには貨物や人を受け取り、次の宿場へ確実に送り届けるための事務をする人と、貨物や人を運搬するための人馬が用意されていました。事務・一切の采配をする所が問屋でした。この制度を伝馬制度といい、公道では全国的に行われていました。

しかし、春日街道は、林や原野の中を通るので不用心、松島から伊那部への道順も良くないと言ふことで、慶安二年（一六四九）に大泉から北殿へ宿場が移されました。北殿へ出来た宿場は、大泉・北殿両地区で仕事を受け持つことになりました。

(二) 伊那街道

塩尻から善知鳥越えを越え天竜川西部を根羽まで行き、そこから三州（三河・愛知県）に入り名古屋に通じる街道で、伊那往還・伊那道・三州街道・飯田街道などいろいろな呼び方をされてきました。慶長五年（一六〇〇）、幕府は江戸を中心とする五街道を

制定し、その補助道路を脇往還としました。伊那街道は五街道の一つ中山道の脇往還として整備されました。（東山道の昔から伊那谷を南北に通じる街道はありました。中馬道（注①）とも呼ばれていました。

伊那谷の主要道路でしたので、江戸時代も交通量は多く、物資を運ぶ古文書に道路の修繕・つけ替え等の記録が残っています。明治・大正・昭和にかけて物資を運ぶ馬の往来が多かつたので

中馬道（注①）とも呼ばれていました。

治以後も改良が重ねられ、改良が困難な所は

バイパス道路を造るなどをしてきました。名称も県道（明治九年一八七六）→二級国道（昭和二十九年一九五四）→国道（昭和四〇年一九六五）と変

わつてきました。

下への崖懸の道、塩ノ井から北殿宿へ入る明和坂辺、南殿の美坂から田畠公民館への道、神子柴から御園への坂道などがあります。

かつては街道をはさみ集落が形成され、集落と集落の境界がはつきりしていましたが、現在は戸数が増え集落が東西・南北に大きく広がり、集落の境界がはつきりしなくなつて来ています。

注①中馬とは、農閑期に馬で荷物を運び、駄賃稼ぎをしたのを言います。

農家が現金収入を得るために副業として始まりましたが、やがて主職業とする者が増えて行きました。飯田へは一日千頭の馬が入るというように盛んになつていきました。



馬追いの姿

村内に江戸時代の伊那街道の面影が残る場所としては、久保木



北殿 明和坂 (右上の坂道が旧伊那街道)

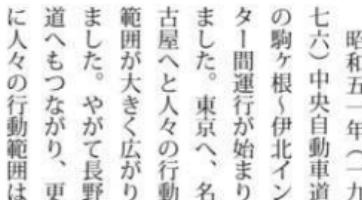
(三) 権兵衛街道

木曾と伊那は、昔から木曽の木製品・伊那の米を中心とした産物の流通はあったのですが、元禄九年（一六九六）木曾日義村の権兵衛が中心となつて、峠を上り下りする険しい山道を馬の通れる道に改修し、木曾と伊那の行き来が楽になりました。



権衛トンネル

江戸時代には、人や物資の往来がにぎやかだったこの道も、鉄道中央線の全面開通（明治四四年一一九一）により交通路としては衰退していきましたが、自動車時代が来ると道路の改修がなされ、昭和二七年（一九五二）に経ヶ岳林道が出来て車で木曽へ行けるようになり、昭和五〇年（一九七五）にはそれが国道三六一号線となりました。そして昭和五九年には舗装道路となりました。しかし、交通困難な道路で、もっと良い道をの願いから、平成一八年には権衛トンネルが完成しました。今では木曽福島まで四〇分くらいで行けるようになりました。



中央道（南原にて）

るようになりました。交流が繁く出来るようになりました。それで街道に権兵衛の名がついたと言われています。この道は、戦国時代には軍用道路として木曽や伊那の武士たちが通った道であり、江戸時代には助郷道として（注①）伊那の農民を泣かせた道でした。また、木曽と伊那の文化や技術の交流の道でもありました。

江戸時代には、人や物資の往来がにぎやかだったこの道も、鉄道中央線の全面開通（明治四四年一一九一）により交通路としては衰退していきましたが、自動車時代が来ると道路の改修がなされ、昭和二七年（一九五二）に経ヶ岳林道が出来て車で木曽へ行けるようになり、昭和五〇年（一九七五）にはそれが国道三六一号線となりました。そして昭和五九年には舗装道路となりました。しかし、交通困難な道路で、もっと良い道をの願いから、平成一八年には権衛トンネルが完成しました。今では木曽福島まで四〇分くらいで行けるようになりました。

四 中央道・大型農道等

昭和の中頃に入り自動車時代の到来を受けると、通行がスマートに出来るようになると旧道路の拡張・改修、新道路の開設が次から次へと行われました。

昭和五一年（一九七六年）中央自動車道の駒ヶ根～伊北インター間運行が始まりました。東京へ、名古屋へと人々の行動範囲が大きく広がりました。やがて長野道へもつながり、更に人々の行動範囲は

注①中山道は五街道の一つで公用の通行が盛んでした。その人や荷物の世話をするのが宿駅でした。宿駅には世話をする人馬が用意されていましたが、通行が多いときは世話をする人馬が不足します。そこで近辺の村々へ応援を頼み、頼まれた村々では応援に出掛けるような仕組みになっていました。その応援に出掛けることを助郷といいました。江戸時代の後半になつてくると交通が盛んになり、農繁期まで助郷に駆り出され、農民たちは苦しました。

広がっていきました。高速

道路により、より速くより

遠くまで行けるようになり

ました。



大型農道(北原へ向かって)

大型農道は昭和四九年
(一九七四) 南箕輪村部分
が開通し、昭和五六年には
辰野・飯島間が開通しまし
た。通勤に利用され、交通
混雑解消に大いに役立つて
います。

国道一五三号線は改良を重ねて来ましたがが、改良が難しい
所はバイパス道路をつけるようになりました。箕輪町から続
いているバイパス道路は、長年課題を抱えていた天竜東への
道路改良と結び付いて、平成二年北殿橋の架け替えをし、
広い道路となりました。

(五) 飯田線(電車)
明治五年(一八七二)日本に初めて汽車が走つてから二五
年後、ようやく辰野・飯田間の電車軌道敷設の許可が下りま
した。明治四〇年(一九〇七)に「伊那電車軌道株式会社」が
設立され、辰野から順次開通されていきました。南箕輪村区
間が開通し、利用が始まったのは明治四四年(一九一一年)一
月のことでした。

月三日のことでした。

やがて、大正一二年

(一九二三)「伊那電氣鐵
道株式会社」になり、昭
和一八年(一九四三)に

は「国鉄飯田線」となり
ました。その間に、カーブ
を少なくし坂を直しス
ピードを上げて走れるよ
うに線路を改良していき
ました。

太平洋戦争後(昭和二〇年以後)は、唯一の長距離輸送を
受け持つて、人や貨物の輸送に活躍し、いつもいっぱいに詰
まった状態で走っていました。だんだん車両や線路の改良が
進み、輸送能力も増していました。

しかし、やがて自動車の普及が進んで来ると、利用が減つ
ていきました。それに連れて運行数が減り、急行がなくなり、
貨物輸送も廃止されていきました。駅は停留所化し、無人駅
が増えて行きました。「伊那電車軌道株式会社」の時は村の
各区ごとに停留所が設けられましたが、大正一二年に北殿駅
と田畠駅だけに減り、今はその二駅も無人駅となってしまいました。



伊那電車軌道、南殿駅(大正3年頃撮影)
(「写真で見る南殿の歴史」より転載)

現在は民営で、「JR東海 静岡支社」の経営となっています。衰退はしてきましたが、高校生の通学にはなくてはならないものとして今も活躍しています。

(六) 天竜川通船

舟は一度に大量の物資を運ぶには都合の良いものなので、天竜川通船は昔から考えられていました。しかし、暴れ天竜であり、浅瀬あり狭い所ありで実行するとなると容易な事ではありませんでした。

上伊那で天竜川を使っての物資の輸送が始まったのは、木

材を運ぶための木材の川流しでした。江戸時代の初め頃（一六〇〇年頃）には行われていたようです。やがて、人々の川渡しや農作物を運ぶ舟が現れるようになりました。川底が荒れているので、底の浅い鵜飼舟が使われていたようです。これらは近辺を行き来していました。これでは遠くまで行かなかつたようです。

南箕輪村には、天竜川通船の先達がいます。文政年間（一八一八～一八三〇）、神子柴の加藤孫市が米三〇〇俵積



明治28年の通船広告紙(田畠油屋文書より)

みの船で、諏訪^{諏訪郡}（静岡県）間の営業を始めました。また、田畠の加藤敬亮が明治二八年（一八九五）、坂下（伊那市）別府（飯田市）間の通船業（人・貨物を運ぶ）を始めました。しかし、暴れ天竜の船路の整備、中馬業や鉄道輸送業との競争などがあり、成功はしなかつたようです。

明治の初期の南箕輪村の職業調査書を見ますと、回船業と書いてある人が何人かいます。人や物資を川渡したり、近辺へ運ぶ仕事をしていた人達がいたのです。

(七) 橋と渡し舟

交通の大きな障害となるのが川です。その川をどのように越えて行くか、方法は橋を架ける・舟で渡るのどちらかです。天竜川は大きな川ですから、これを越えるのに昔から人々は苦労してきました。

南箕輪村の地籍で、天竜川に初めて橋が架けられたのは、江戸時代であったと思われます。江戸時代の後半には北殿と田畠あたりに橋があつたことを伺わせる文書が残っています。当時の橋は、近くの山から木を伐り出し、それを材料にして、川底に太い丸太の橋脚を立て、その上に丸太を縛り付けただけのもので、丸太の上に木の枝を並べ砂利を敷いてあれば上等の橋でした。基礎もしつかりしておらず、洪水になると流れてしまうことがよくありました。鉄筋コンクリート造りの永久橋になつたのは昭和に入つてからでした。

伊那街道にもいくつか橋が架けられていました。江戸時代の古文書には、橋の修復工事に関する文書がいくつも残されています。維持のために地元の人々が苦労していました。天竜川の渡し舟は相当昔からあったようで、正保（一六四四～一六四八）の絵図に北殿から福島への渡舟の図があります。また、田畠の古老の話では、大正の末頃明神橋のあたりに渡舟があつたことを覚えていると言つていました。太い針金が張つてあり、それを伝つて行き来していました。

三 入会山野の分割と飛び地

（入会山野については、「南箕輪村の由来」注④参照のこと）

南箕輪村に関係ある入会山野として、大芝原・三本木原・中野原・上溝原・牛馬飼場・北原・藏鹿山・矢ノ南入り・御射山・北沢山・南沢山などがありました。（別図参照のこと）

明治になって、地租の関係で所有権をはつきりさせるために分割することになりました。それから昭和三〇年代（一九五五）までかかつて分割されました。入会の形態や利用の仕方も複雑で、しかも利権争いも加わって、大変な難事業でしたのが何とか終了しました。南箕輪村は、時の指導者たちが苦労してたくさんの土地を獲得しました。大芝公園も分割で

得た土地で、村有地として活用しています。また、御射山・矢ノ南入り・藏鹿山は、村の生産森林組合で管理しています。江戸時代の村々（明治に合併する以前の村）に分割された土地は、山野として残っている所もあるし、他のものに変わっている所もあります。南原・大芝・北原地区、信大・上農・南部小のある所もかつては入会地で、分割により南箕輪村になつた所です。

村の地図を見ますと、西の方に大きな飛び地が南箕輪村分として載っています。すべて山地ですが、面積は東にある人々が生活している部分と同じくらいあります。この飛び地も入会分割の結果、南箕輪村分となつた所です。

(一) 飛び地の概略

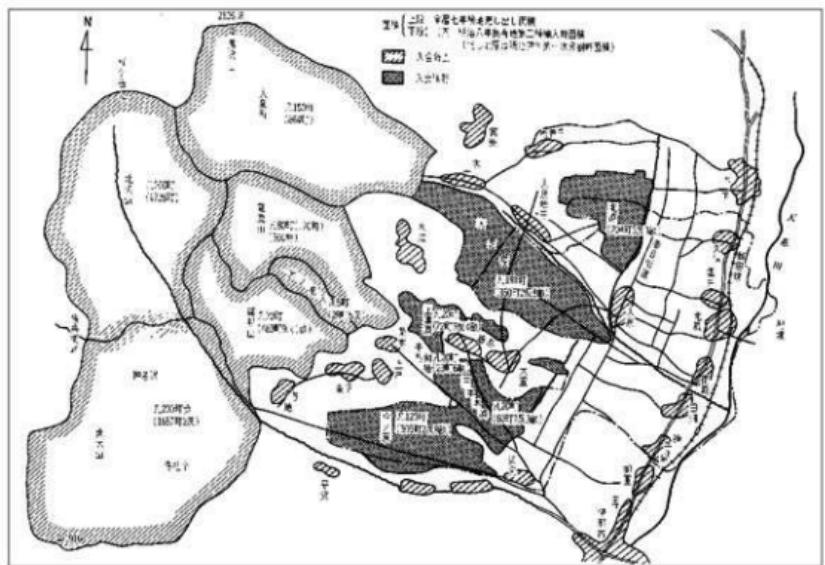
1 位置と境界

位置は、およそ東経一三七度五一分から一三七度五六分と、北緯三五度五一・五分から三五度五五分に渡つていています。

境界は、東側は伊那市の与地・中条・梨ノ木・羽広・吹上に接しています。西側は塙尻に接し、南側は伊那市の南沢に接しています。北側は辰野町・箕輪町に接しています。

2 標高

黒沢山二二二六メートル、経ヶ岳二二九六・三メートル。飛び地は、二二九六・三メートルの経ヶ岳から最低一二九六・三メートルで、高く山深



南箕輪に關係のある入会山野略図

い谷のある所は二度くらいの急坂で、最もなだらかと思われる所でも一六度くらいの森林山岳地帯です。

二二二・六七段(地図より算定したもの)

3 面積

4 沢

主峰経ヶ岳から大きな沢が二つ出ており、北側は大泉川、南側は北沢川→小沢川となつて天竜川に注いでいます。大泉川には、上流に砂防・灌漑用のダムが出来ています。

(二) 御射山分割記念碑

難航した御

射山分割の記

念碑が、西箕

輪字御射山の

林道脇に建て

られました。

その碑文の概略は次のようです。

碑面 御射山分割記念 昭和三十二年四月十八日

長野県知事 林 虎雄書



御射山分割記念碑
与地の西、林道端に
建っている。

碑陰

所在地 伊那市大字西箕輪字御射山

実測面積 二百七十二町一反二畝

南箕輪 七十八町六反五畝

伊那 二十三町五反九畝

(以下 関係役職者の氏名は略す)

(三) 造林記念碑

分割に力を注いだ南箕輪村では、取得した山に植林し、造林にも力を注ぎました。その記念碑が北沢にあります。碑文の概略は次のようです。

碑面 藏鹿山・御射山造林記念碑

南箕輪村長 清水 国人 書

碑陰 分割 植林記念碑 昭和四十年七月十五日 建之

(長文なので要点のみ記す。委員名も略す。)

昭和三十二年に分割が終わり、三十四年以降三十九年まで莫大な経費をかけて植林しました。合わせて百九十一町五反一畝に植林しました。



造林記念碑

羽広荘西、林道の分岐している所の右側の道を登って行った先にある。

四 河川・用水

(一) 天竜川

村境を南北に流れる天竜川は伊那谷第一の大川で、昔から村人の生活に大きくかかわってきました。

一つは渡川で、橋掛け・渡舟に苦労を重ねてきましたが、

昭和に入り永久橋が完成し、ようやく気軽に天竜川越えが出来るようになりました。

二つは川の氾濫です。しっかりと堤防を築けなかつた昔は、大雨が降る度に洪水が起き、川の周辺が荒らされました。田畠が流され、境界が分からなくなり度々紛争が起きました。また復旧作業も大変でした。江戸時代だけでも六七回の洪水記録が残されています。(村誌下巻 p448 参照)昭和に入り、川底手入れや堤防の改良工事が進むと、洪水も少なくなっていました。しかし現在でも洪水の心配はあります。

三つめは恵みです。川の水は田用水に利用出来ました。江戸時代の文書に天竜井(塩ノ井・北殿)、大河原井(南殿)、伊賀島井(田畠)、川原井(神子柴)などの天竜川からの用水名が出て来ます。これらは何百年かに渡つて使われて来た用水です。

もう一つの恵みは、川魚です。川魚漁は大昔から行われて

(二) 大泉川・大清水川・戸谷(鳥谷)川

南箕輪村には西山から流れ出している川が三本あります。他に集落内に流れ出している川が何本かありますが、それらは扇状地を伏流して來た水が、集落の近くで湧きだし川となつたものです。

三本の大泉川・大清水川・戸谷(鳥谷)川もスタートは西山ですが、途中から大部分の水が伏流して水量が少なくなり、下流へ來てまた水量が増えます。



かつての天竜川堤防と北殿橋

いて、食卓を豊かにするとともに、人々の重要なタンパク源となっていました。江戸時代の文書に、梁漁(木や竹などを並べて川の流れをせき止め、そこに上がつて來た魚を捕まえる)や鵜飼漁(このとが出て來ます。また、網・うけによる漁、釣りなども行われていました。

アユ、ウナギ、コイ、アカウオ、フナ、川虫など

を捕つていきました。

この中でも一番の大川が大泉川です。大泉区では昔から田畑用水・生活用水として大泉川から何本も井を引き、今日までその長い井を管理・保持して來ています。その苦労の様子は村誌に(下巻P341-)に書かれています。南殿・田畠地区でも、大泉川から取水(五力所)して水田用水として利用してきています。また、川遊び(小学生の魚つかみ会、保育園の水遊びなど)の場所として河口付近が利用されたこともありました。大芝公園でも大泉川の水が利用されています。

大泉川は昭和四〇年(一九六五)に一級河川になり、昭和四八年(一九七三)には治水のため大泉所砂防ダムができました。



水が伏流してしまいほとんど水流のない大泉川(春日街道の所)

『清寧』の碑 大泉所ダムの上の道路端にあります。

碑陰
大泉川砂防ダム施工記念

昭和四十八年十月吉日



「清寧」の碑(大泉所ダム上)

ました。約五六〇石区間でした。飛島土木が二四万九四六三円五一銭で請け負いました。完成を迎えた人々の喜びは大きなものでした。その後、水路は何回か補強・改修・改善工事をしながら現在に至っています。

この水路が出来たことにより、一八〇石の美田が出来ました。そのうち南箕輪村分は四六一石で、全体の三九石余になります。この結果、村の農業形態が畑作・養蚕を中心の農業から、稲作中心の農業へと変わっています。

昭和三六年(一九六一)非灌漑期の水を活用するために、流末の伊那市小沢に発電所が造られました。

利用の初めの頃、不備な分水路のためか水争いがよくありました。分水槽の工夫(坂板式分水槽の考案)、分水路のコンクリート化などにより解決していきました。

かつては春日街道を歩くと、東西に一面水田風景が見られましたが、稲作農業の不振、農業後継者の不足などにより、現在はその風景が年々少なくなっています。

鍾水費物碑

春日街道沿いの南箕輪村と箕輪町の境、箕輪町寄りの所に

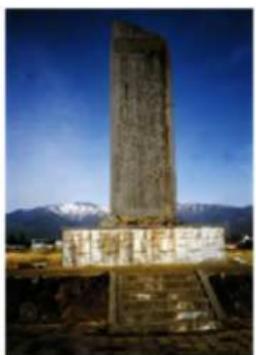
大きな石碑が建ててあります。西天竜幹線水路が完成した記念碑で「鍾水費物」と書いてあります。水を集めて物を費かにするという意味です。

碑面には、諏訪湖から水を引くために苦心した先覚者のか

南箕輪村を中心とした経ヶ岳扇状地の広大な地に、水をほしいと人々が願っていたのは昔からでした。諏訪湖から水を分けてもらおうと江戸時代から調査・計画など試みましたが、実現に行き着くことはできませんでした。しかし、明治に入り、食糧増産という問題もからんで官民手を結び、諏訪湖からの引水が実現することになりました。

明治四〇年(一九〇七)に話が決まり、大正八年(一九一九)に基本調査が終わり、耕地整理組合の設立までいきつきました。そして大正一年に工事に着手しました。岡谷市川岸から揚水して伊那市小沢川までの水路を造る計画でした。南箕輪村部分は第四期工事で昭和三年(一九二八)に竣工し

と、計画が出
来て完成する
までの作業・
金銭の苦労等
が記されてい
ます。そして、
最後に昭和一
九年（一九四四）一〇月と書いてあります。



「鍾水農物」碑
西天春日街道沿
北原と木下の境目

碑文は箕輪町出身の木下信の撰文で、字は東京高等師範学校の書道講師の田代其次です。「鍾水農物」の題額はこの碑を建てるのに尽力してくれた高遠町出身の枢密院顧問官伊沢多喜男の筆によるものです。

石材は、仙台市外の稻井村から求めたもので、長さ八・五
メートル幅二・四メートル、厚さ約〇・六㍍的巨大なものです。当時の価格で七千円したそうです。

昭和一六年（一九四一）に石は購入し、太平洋戦争中のため、伊沢多喜男の力を借りて列車で運んだそうです。台石は大泉所の自然石で、長さ四メートル、幅一・八㍍あります。

撰文は、昭和一九年（一九四四）一〇月出来ましたが、太平洋戦争中のことでもあり建立できず、建立されたのは、昭

和一五年（一九五〇）一二月のことでした。



西天竜と分水槽（大泉にて）



円筒分水槽（神子柴あじーな南）

（四）湧水と横井戸

南箕輪村は湧水の豊かな所です。経ヶ岳扇状地の上部で伏流した水は、扇状地末端の天竜川河岸段丘の端の所に湧出します。村内各地にその豊かな湧水が見られます。北の方から、北沢・南沢・滝ノ沢・柄ヶ洞沢・下の沢・中井沢・車沢・南殿の清水・不死清水・半沢・大清水・長者の井等です。この湧水の出る所に人が住み、集落がつくられ、人々はこの湧水を、生活用水に農業用水にと利用してきました。そして集落と集落を結ぶように街道が造られていきました。

豊かな湧水は、ワサビ栽培の水、ニジマス等の養魚用水、

農業用水として、南箕輪村の産業にも貢献してきています。また、水道での生活が始まると、その水源の役割も務めてきました。

水を求めて苦労して来た村人たちの足跡として、井戸・横井戸があります。昔は湧水や川の水を共同で使って生活してきた村人たちでしたが、衛生上の問題が出て来たり、水不足の時が出てきたりして、井戸があちこちに掘られるようになりました。江戸時代の終わりの頃からのことです。生活用水を求めて、住宅の近くに縦井戸が掘られ、住居の近くに水をさがせない人や農業用水をもつとほしい人は、地下水が豊かに流れている所をさがして横井戸（地下を横に掘る）が掘られました。（資料六「横井戸一覧表」参照のこと）



北殿 いせんあわら横井戸

水道生活をするようになって縦井戸はほとんど姿を消してしまいました。農業用水としての役割のあつた横井戸は、昭和の中頃まで大事にされだんだん使われなくなつてきましたが、現役で利用されている横井戸

戸が村内にいくつか残っています。横井戸が多く掘られたのは明治から昭和の初め頃でした。

（五）上下水道

南箕輪村に初めて水道が出来たのは大正一四年（一九二五）のこと、神子柴に簡易水道が村内第一号として完成しました。その後、昭和五年（一九三〇）に久保簡易水道が出来、昭和二六年（一九五二）には田畠簡易水道が出来ました。それに続いて各地区に順次簡易水道が造られていきました。これらは、各地区的豊かな湧水を水源としました。タンクなどその当時の遺構が残っている地区がいくつかあります。

村営水道として各地区的簡易水道を統合したのは、昭和四〇年（一九六五）のことでした。やがて、人口や企業の増加に伴い水道水の使用量が増え、広域水道に参加しました。平成四年からは、伊那市や箕輪町の水も利用しています。

各地区にあつた簡易水道は、役目を終えて使われなくなりましたが、神子柴水道は村営水道として現役で働いています。また生活用



簡易水道タンク跡（田畠半沢）

水として引き続き利用しているものもあります。

人家が密集てきて生活雑排水の処理が問題になつて来たのは昭和五〇年代（一九七五）からで、始め土壤浄化方式が推進されました。が、不十分で本格的な下水処理が強く望まれるようになっていきました。



大泉「いずみ苑」(旧農集排西部処理場)

そこで村では、平成三年に大泉地区へ「農集排西部処理場」を建設し、大泉・大芝・北原地区の下水処理をするよう事業を始めました。続いて平成四年に「公共下水道南箕輪処理場」を田畠地区へ建設し、大泉・大芝・北原以外の下水処理をするよう事業を始めました。

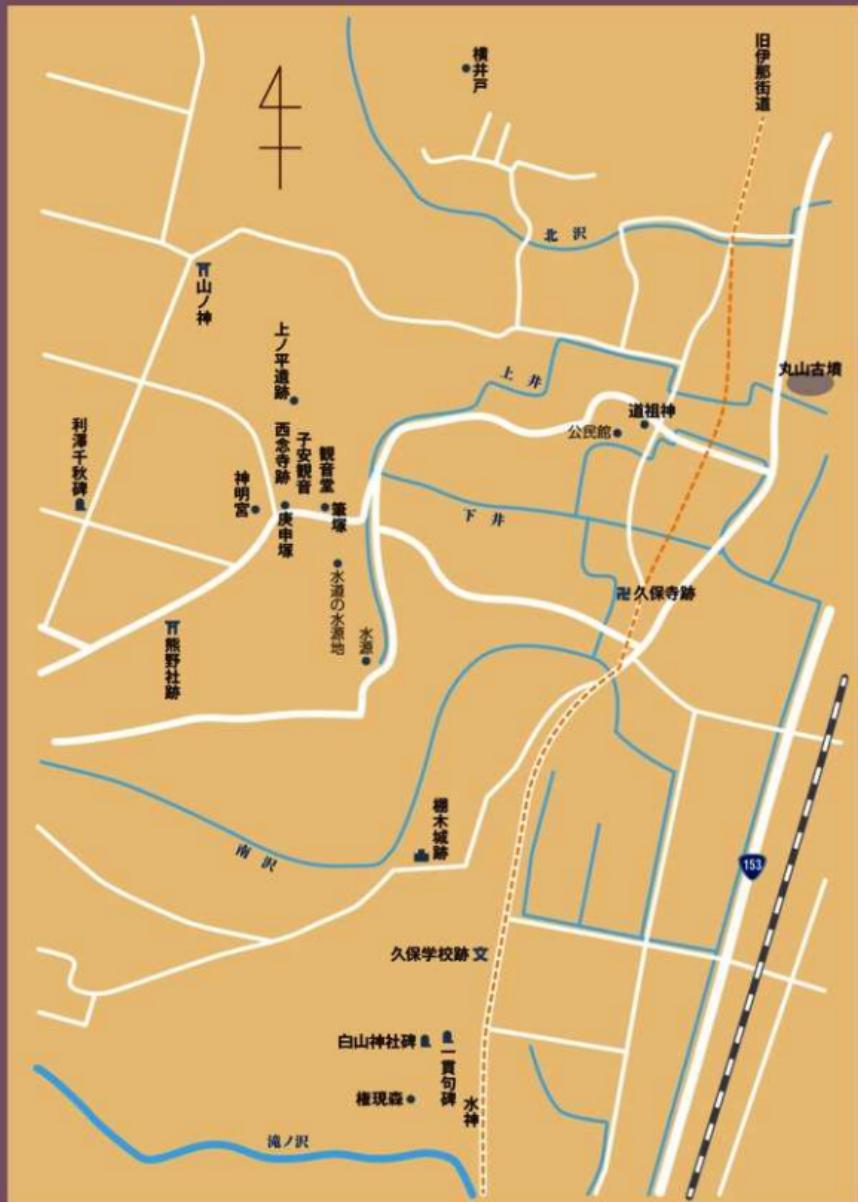
この美田地帯も米余りのため減反政策の時代が来て、商工業誘致地帯へと変わっていきました。今では会社・商店・住宅が建ち並び、舗装道路が縦横に走る地帯となりました。

下段で余った水を、西天竜幹線水路より西地区の農業用水に使いたいという要望は、西天竜幹線水路が出来る頃からありました。その要望を実現すべく、昭和四七年（一九七二）から六二年にかけて、機場（保水タンクと揚水のための機械などが備えられている）設置・送水管敷設が行われました。そして、その第一機場が田畠地区に設けられ、送水が始まりました。計画では、水田用水の補充にもという話でしたが、米の減反政策の推進により、現在は畑灌漑用水としてのみ利用されています。

(六) 排水・揚水

天竜川沿いの下段地帯は、西からの水が集まり、豊かな水を使つての水田耕作が広く昔から行わっていました。しかし、

第二久保



一 久保の由来

久保地区は、縄文時代から人々の営みがありました。河岸段丘上の上ノ平遺跡では、縄文時代の住居が十八軒発掘されています。土器類もおよそ二万点も出土しています。又弥生時代や平安時代の遺構や遺物もみられます。段丘下の天竜川右岸から国道一五三号線周辺の沖積地では、縄文時代中期から弥生時代後期の土器類が発掘されており、水田跡や農具等の木製品も出土しています。このことから古来よりこの地に住居を構え、農耕に従事していた人々がいたことがわかります。

中世においても段丘中段に棚木城や久保寺がみられ、その周辺に在郷（一般在郷の家）が集落をなしていたと考えられます。古くは「供奉」、その後「窪村」となり、宝永年間（一七〇四～一七一〇）に「久保村」に改められました。明治八年（一八七五）「久保耕地」となり、大正三年（一九一四）より久保区となつて今日に及んでいます。

区名の由来は明らかではありませんが、明治九年の『長野県町村誌』には次のように記されています。
「命を供奉し奉る地 供奉を呼びて久保となすなり」

供奉とは「行列に加わってお供する、お仕えする」という意味があります。昔この一帯で建御名方神（諏訪明神）が狩りをされたとき、行列に加わってお供をした地であるともいわれています。ケブがケボと呼ばれ「窪村」と改められました。一方ここには沢が多くあり、水と草地に恵まれていて、窪地が多いので「窪」という文字が使われたのかもしれません。のちにそれが音だけとつて「久保」と好字を用いるようになったともいわれます。

又、この地の特徴として北沢、南沢などいくつかの沢があります。この沢のある地形をくぼ地形ととらえることができ、そこから「くぼ」となつたかもしません。

久保からは塩ノ井が分村しています。分村の時期については寛保三年（一七四三）説と延享五年（一七四八）説があります。塩の井は明治時代に入つて、明治五年（一八七二）久保と合併し明治八年（一八七五）に再び分村しています。分村はしてはいたものの大正初期ころまでは久保北割、久保南割と呼ばれていました。又、沢尻も一六五〇年代に分郷し、久保沢尻村と呼ばれていました。同時期、高町（吹上村）にも分郷しています。

古来より人々の営みが続き、江戸時代後期には人口が一人でしたが、その後人口が急激に増えています。明治七年（一八七四）には戸数百戸、人口五九五人。（塩ノ井区を含



近世久保村居村の図

む、昭和二四年（一九四九）には一三〇世帯七二一人。そして平成三十年には五一〇世帯一三四八人にもなっています。

二 神社

（一）神明宮

神明宮は久保区中央西寄りの西天竜水田とほぼ同じ段丘上の東端、南箕輪村一二二九ノ二、神明宮所有の森林に囲まれた除籍地にあります。

祭神

天照皇大神、豊受大神

伊弉諾尊、伊弉那美尊

事解男命、速玉男命

由緒

神明宮と熊野社の合祀社です。熊野社はもと熊野権現社といつて神明宮の南方一〇〇坪の台地熊ノ堂にありましたが明治二十六年（一八九三）ここに移し、神明・熊野両社を同じ覆屋内に並べ合祀し、明治四十年（一九〇七）合併が許可に



神明宮

拝殿

拝殿は向拝付入母屋正面唐破風造りです。間口七・八尺、奥行八・六メートル、そのうち前方の床を十五センチメートル低くして拝殿としています。後方は覆屋で右に神明宮本殿、左に熊野社本殿と並べて置かれています。

覆屋は、拝殿と本殿の覆屋が一緒になつてある特徴のある形式をしています。この覆屋は本来草葺でしたが、昭和五〇年（一九七五）草葺のままの形を保ちながら上にカラートタ



神明宮本殿



熊野社本殿

なりました。神明宮の創建は慶安二年（一六四九）頃と考えられ、熊野社の創建は不明ですが、神明宮の造営とほぼ同じ時代と思われます。明治五年（一八七二）村社、昭和一八年（一九四三）神饌幣帛料共進社に指定されました。

ンで覆つて現在の屋根としました。神明宮の本殿は間口一・三七尺、奥行二・九尺。熊野社の本殿は間口一・九尺、奥行二・三八尺。両社とも切妻の流れ造り平入りです。両殿とも縁をめぐらし脇障子を設けています。

舞台

舞台は、石段を登りつめた左側にありました。修理が困難であったこともあり、昭和二十七年（一九五二）に取り扱われました。

水屋

水屋は、間口二・五五尺、奥行一・三五尺で、左右のヒノキの丸柱は掘立の形式になっています。



水屋



修羅

御手洗の石は大正六年（一九一七）、大泉所山から氏子総出で修羅（当時は「権」と言いました。）に乗せて引き出しました。大正七年（一九一八）の庚申の石もこの修羅で運びました。現在この修羅は同神社に保管されています。

鳥居

一の鳥居は花崗岩の円柱、二の鳥居は平成一五年木製から石製の鳥居となりました。いずれも神明造りです。

灯籠等

石灯籠一对に「明和七年寅六月」（一七七〇）と刻まれています。狛犬一对の台石に「国威宣揚」「八紘一宇」と「海軍大將塩沢幸一題」と刻まれています。この一の鳥居・石段修理・石畳・狛犬等はいずれも昭和十七年（一九四二）に久保区出身の故丸山東作氏の寄進によるものです。

（二）境内社他

1 拝殿南側に、秋葉神社・稻荷社・浅間神社・大山神社・疱瘡神その他の神社が合祀してあります。これらはいずれも久保区内に散在していたものです。これらとは別に境内に金比羅宮・天満宮・石碑の蚕玉神社・妙見様・八王子様・養蚕神・十二神社等が遷座しています。

2 石段を登りきった左側に目通し二・二尺、樹高三五尺、推定樹齢三七〇年のコウヤマキがあります。このコウヤマキは神明宮のご神木になります。また昭和初期までは、推定樹

齡二〇〇年以上のアカマツが數十本立っていました。

3 奉納額

(1) 奉額 立机披露句集

飄連

覆屋南側上部に掲げられています。文字が消えかかっている額です。文字が消えかかっていますが、約九三の句が書かれています。

(2) 御即位記念

大正四年（一九一五）一月

覆屋北側上部に掲げられています。区民の詠んだ句が約九六書かれています。



奉納額

5 白山神社碑

北部保育園西側に「白山神社」碑があります。白山は石川・岐阜の県境にあり、富士山・立山と共に日本三名山の一つで古くから信仰されています。

總本社は白山にあります。白山神社北傾斜地を少し登つた所に浅間神社（里宮）跡があります。



白山神社碑

三 寺堂

最初に西念寺が建てられたのは北沢より南側の伊那街道の

祭神

白山比咩神・伊弉諾尊、伊弉冉尊です。

神明宮の南側の道を大泉所山に通ずる道路が、西天童水田地帯の中途で大泉方面へ別れるところあたりの地籍を山の神といっています。山の神が神明宮境内に合祀される以前は、この地にあつたであろうと推測されます。

又、神明宮の北、中込線突き当り付近にも山の神社があつたという記録が残っています。

四 滝権現・日光権現跡

天保元年（一八三〇）の村明細書上帳にこれらの社が記載

一 西念寺跡

最初に西念寺が建てられたのは北沢より南側の伊那街道の

近くにあつたと推測されます。それ以降所在が丸山地籍に移り、明治四四年（一九一）以降は神明宮下にありました。

西念寺は、伝えによると文龜元年（一五〇一）に光誓説良和尚開基によって浄土宗の寺として創立されました。檀家が少なく経営困難になつていたところ、寛永一六年（一六三九）木下の法界堂に合寺され廃寺になりました。しかし正保三年（一六四六）までは堂宇と原烟が残つていました。その後、文政年間（一八一八～三〇）に至つて法界寺一二世察誉和尚の代に西念寺再興の機運

が起こり、天保二年（一八三一）四月に丸山地籍に再建され、察誉和尚が住職になりました。明治四四年（一九一九六八）火災により全焼しました。それ以来再建されず現在に至っています。



旧観音堂（左） 旧西念寺（右）

（二）境内堂仏

1 観音堂

焼失した西念寺の南側に接続して、観音堂があり馬頭観音が祀られています。上伊那諏訪八十八ヶ所靈場の第三十四番の札所として賑わつた時もありました。この堂も西念寺全焼の際、類焼しましたが直ぐ再建し、

本尊は黒焦げになつたので以来秘仏とし、新たに瀬戸團治氏（辰野町出身の彫刻家）作の観音を前立本尊としてまつています。秘仏は頭上に白馬を戴く三面八臂の忿怒相の木造です。

第三十四番札所としての御詠歌がのこつています。

うららかに黄金生むてふ清水は

やがて弘誓のうみとなるらむ



観音堂

本尊
阿弥陀如来

2 子安観音

観音堂のすぐ南に、子を抱いた石仏が高さ五〇センチメートルの台座の上に安置されています。子安観音と呼ばれ安産

子育ての観音様として区民から親しまれています。昔、お産を助け安産させることの上手な女性がいました。



子安觀音

死後彼女の徳を讃え、冥福を祈つて建てられたと伝えられ、たばこの好きな人であつたということで、ときどきたばこが供えられているのが見受けられます。

3 境内の石仏石塔

この境内には区内から集められた馬頭観音八十基、無縫塔(むほうとう)十基、その他若干の石塔があります。

(三) 久保寺跡

久保中段地南端の高台に位置していました。創立は鎌倉時代(一一九二～一三三三)といわれ、鎌倉臨済宗建長寺派渡来僧大覚禪師の開山と伝えられています。多聞山久保寺と呼び本尊は毘沙門天でした。古くは久保庵といわれ元禄年代(一六八八～一七〇〇)より久保寺と称しました。有名な大覚禪師の開山と伝えられているにもかかわらずそれを庇護する有力者も無く寺領も乏しく貧しい寺で、無住の時もありま



毘沙門天



旧久保寺

四 久保学校

久保学校は久保南部旧三州街道沿い、白山社の北寄り一段高いところにありました。

受け取り、寺所有的財産は無償にて譲渡しました。現在、岡谷の久保寺は、環境整備事業がすすみ、諏訪湖を一望できる地に堂宇がたち、寺としての風格をもち、地元のお寺として親しまれています。



毘沙門天

(一八七三)

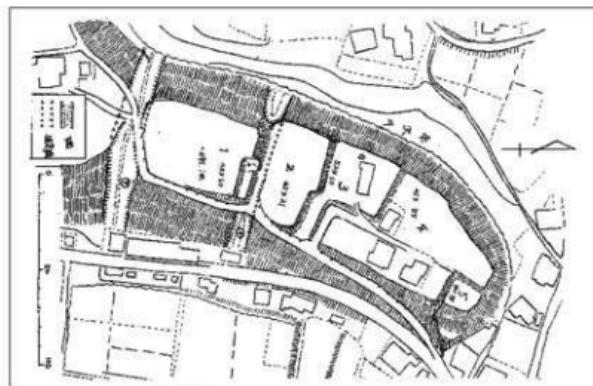
久保学校として創設され、明治七年開校の運びとなりました。初代教員は後藤杉藏でした。（高遠進徳館出身・長野県教育行政の功労者）。生徒数は一五七名でした。明治一年（一八七八）には南割と北割に分かれ、南割は南箕輪学校へ、北割は木下学校へ合併することになりました。明治十九年（一八八六）になつて、久保学校校舎は南箕輪学校久保派出所となりました。北割は、明治二六年（一八九三）南箕輪学校に統合されました。



久保学校

五 古跡名勝

棚木城跡



棚木城鳥瞰図(宮坂武男氏作図 長野県歴史館蔵)

滝の沢と南沢にはさまれた中段台地にあって、東は急斜面、西と北は南沢の急斜面となつて自然の地形が築城の好条件を整えていたようです。城は東西三八メートル余、南北五八メートル余の長方形をなし、本丸跡は烟になつてます。が南に一 条の空濛があります。天文年間（一五三二～一五五五）の初期に棚木四郎と称する人が沢尻宮島式部の姉を娶りここに住んだといいます。伊

那街道から登る道を階と
いっています。城の大手は
この面だと思われます。棚

木氏は、箕輪城に属した
郷士（農村に住んでいた武
士）と考えられます。後に
武田信玄進攻の時没落して
家名を失つたといいます。
現在この地とその周辺は棚
木という地字名になつてい
ます。



棚木城跡

（二）箕輪遺跡

箕輪遺跡は、天竜川右岸、天竜川と国道一五三号線の間に
ある沖積地でJR木下駅付近から北殿付近に至る水田、住宅、
工場、商業施設等を占める総面積一〇〇ha余に及ぶ広範囲な
大遺跡です。

昭和二六年（一九五二）、伊那土地改良区の設立により、
昭和二七年より大規模な耕地整理事業が実施されました。当
初は工事に伴う遺物の表面採取でしたが、遺物の多くは昭和
三〇年以前に出土しています。昭和五年（一九八〇）、五
六年に箕輪町教育委員会が発掘主体となつて本格的な調査が
行われました。又、南箕輪村教育委員会が発掘主体として、

平成四年塩ノ井地区の発掘調査を行っています。長野県でも
平成一三年・一四年に発掘調査を行っています。

久保区久保下からの出土物は、縄文中期から弥生後期の土
器を始め、土師、須恵、内耳土器などが出土しています。石
器は、磨製石斧、石皿等。構造物には木柵、畦畔跡、揚水跡、
道路跡がみられました。木製品として田下駄、田舟、鋤、櫛、
匙、木串、幣束板、用材。金属器のキセル、食料にしたと思
われる胡桃、栗、板、梅、桃などの実、南瓜、夕顔の実など
が発掘されました。字石原田周辺出土の土器の底部に糊の跡
のついたものもあり、住居跡としての炉跡、焚火跡、炭、動
物の骨なども確認されました。ベルシャイン西側南郷団地付



金属器



植物種子



植物種子

上ノ平遺跡は、天竜川西岸にある久保地区の河岸段丘上にあります。平成七年（一九九五）墓地公園造成に伴う緊急発掘調査で明らかになってきた遺跡です。発掘調査をした面積は約三千平方メートルです。

この遺跡は縄文時代中期・弥生時代後期・奈良平安時代、三時代の複合遺跡です。

特に縄文中期中葉の遺物では、土器片が約二万点出土しています。多くは土器捨て場からの出土になっています。

上ノ平遺跡は、天竜川西岸にある久保地区の河岸段丘上にあります。平成七年（一九九五）墓地公園造成に伴う緊急発掘調査で明らかになってきた遺跡です。発掘調査をした面積は約三千平方メートルです。

この遺跡は縄文時代中期・弥生時代後期・奈良平安時代、三時代の複合遺跡です。

特に縄文中期中葉の遺物では、土器片が約二万点出土しています。多くは土器捨て場からの出土になっています。

（三）上ノ平遺跡

上ノ平遺跡は、天竜川西岸にある久保地区の河岸段丘上にあります。平成七年（一九九五）墓地公園造成に伴う緊急発掘調査で明らかになってきた遺跡です。発掘調査をした面積は約三千平方メートルです。

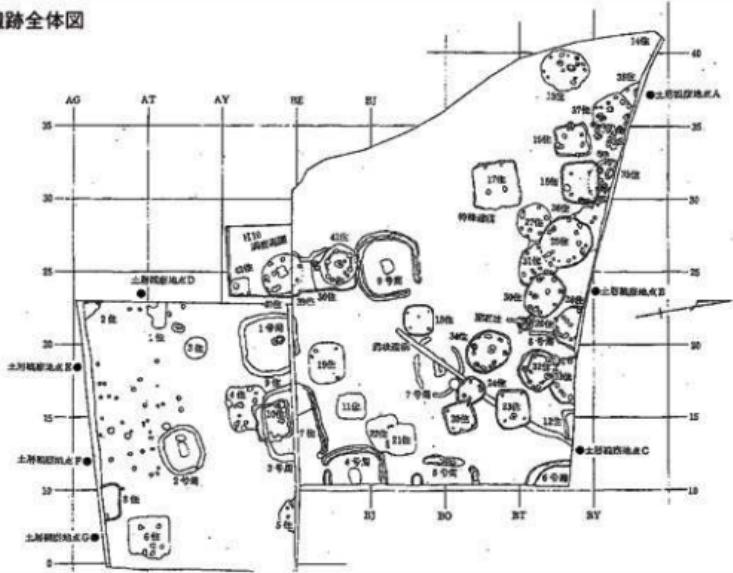
木杭の出土がおびただしく、木杭間の幅は普通五〇から七〇センチメートル位ですが、橋詰にあつたものは一四〇センチメートルの幅で並んで打ち込んでありました。木杭の材は、節のない年輪が平行な柾目（さわら）の木を使っていました。その総延長四・三七五キロメートルにもなります。低湿地遺跡のため多量の木製品の出土とともに大規模な木柵列の存在は注目に値します。



木杭の一部

近では住居跡も発掘されています。木杭の出土がおびただしく、木杭間の幅は普通五〇から七〇センチメートル位ですが、橋詰にあつたものは一四〇センチメートルの幅で並んで打ち込んでありました。木杭の材は、節のない年輪が平行な柾目（さわら）の木を使っていました。その総延長四・三七五キロメートルにもなります。低湿地遺跡のため多量の木製品の出土とともに大規模な木柵列の存在は注目に値します。

遺跡全体図



祭祀さざいが行われたと思われる遺構いこうもみられました。底そこを打ち抜いた台付淺鉢型土器が逆さまに有りその上に石がのつてゐる状態で出土、周囲には土器を二個並列にして、口を南に向けた状態にあるものが三カ所みられました。装飾絵画文浅鉢型土器（長野県宝）を中心にして円を描くように意図的に配置されており、祭祀遺構いこうと思われます。



深鉢土器



装飾絵画文浅鉢型土器



手の形をした土器

手の形をした土器ですがはつきりしたことはわかっていないません。明確に人体モチーフが現された全国的にも貴重な出土品です。弥生時代のものとみられる住居址五軒と方形周溝墓九基の遺構が発掘されました。方形周溝墓は天竜川流域では多く分布していますが、数多くまとまっている例はめずらしいことです。

縄文時代の土器製作では一般的に抽象的な表現が多いのですが、土器捨て場から出土した土器破片は人の手を写実的に表現し、五本の指には関節や爪がみられる土器もあります。縄文時代の住居址は一八軒みられましたが、住居址内からも多くの土器が出土しています。人の顔が表現されるいわゆる顔面把手土器の把手部分や住居址から出土した人体文有孔鍔付土器（長野県宝）などがあります。人体文付有孔鍔付土器

鍔付土器は、高さ約三〇センチメートル、中央にくびれがみられます。この土器の正面には人体文が付けられていて、腹部や両足が立体的に表現されており、頭部と胸部がくびれで分離されているなどの特徴があります。この有孔鍔付土器の用途は酒造器説と太鼓説の二つの説が主として考えられています。



人体文付有孔鍔付土器

奈良平安時代の住居址も十六軒発掘されました。住居址内からはたくさんのお遺物が出土しています。主なものとしては、土師器、須恵器、墨書き器、鉄製品などが見られました。（上ノ平遺跡の遺物は村郷土館に展示してあります。）

四 丸山古墳

久保の集落東北部、旧三州街道東側の一角に丸山という地籍があります。このあたりは文久二年（一八六二）に畠地や水田として開墾され、その後昭和二七年（一九五二）には伊那土地改良工事による地形変容によって原形がすっかり変わり現在は水田となっていますが、かつては東にゆるやかな傾斜地でやや小高い台地となっていました。そのほぼ中央に径約三〇メートル、高さ七メートルの大きな古墳がありました。文久二年開墾の際、副葬品の直刀一振り（村郷土館展示）と、子持勾玉（所在不明）が発見されています。他の遺物も



直刀



伊那街道跡



五 伊那街道跡

伊那街道は、三州街道とともに呼ばれています。中山道の塩尻宿から分岐して辰野、伊那、飯田と南下し、阿智、浪合、根羽の各村を経て、杣路峠をこえ、三河足助を経由し岡崎で東海道に合流します。伊那街道は中仙道の脇街道として、庶民や商人に多く利用されました。又、物資輸送の担い手として、中馬も活躍していました。（詳細は全村の章参照）

街道の面影がなくなりつゝある現在、村内では北殿、田畠、神子柴等に一部昔の街道の面影が残っています。久保区内では、伊那街道が南北に

何がしか出土していると考えられます。特に伝承はありません。古墳時代のものとして確認されています。

通っていました。箕輪坂を少し登った中途に仏像が刻まれた「右木曾・左飯田道」という道標があります。そこから南に向かって段丘中腹を進みます。途中街道東側に茶屋や錢湯があつたといわれる場所があります。大東（屋号）の東を通り昔の久保寺東から旧道にて、塩ノ井区に入ります。箕輪町木下境の箕輪坂から、久保集落に至るおよそ二三百メートル、道幅二・五メートル区間は、昔の面影が残っている貴重な街道跡です。

(六) 天王

北沢の北側中段に台地があり、その周辺が「天王」と呼ばれる地籍です。『長野県町村誌』には久保には東西約二七メートル、南北約三三メートルの封の形をした陵墓があり、「この地を天皇」というと記されています。天皇と記されますが、「天王」と「天皇」の同一音からの宛字とも考えられますが、現在ではその面影もなく正確なことはわかつていません。

六 碑

(一) 利澤千秋碑

神明宮の西、段丘上にあります。西天童耕地整理組合が昭和二年（一九二七）～昭和八年までに実施した久保地区の水

田の耕地整理事業を記念して昭和九年（一九三四）七月建立した石碑です。碑陰には当時の事業を推進した久保地区関係者の名前が刻まれています。碑面には利澤千秋という言葉が刻まれていますが、利澤とは水のめぐみ、千秋とは長い年月という意味を持ち、

西天童用水路ができて久保地区に見事な耕地ができた喜び、そしてこれから先長い年月にわたってめぐみをもたらして欲しいという願いが四文字によつて表されていると考えられます。この利澤千秋を揮毫したのは当時の西天童耕地整理組合長、穂坂申彦氏です。穂坂氏は円筒分水槽の発案者とも言われ、その分水槽は「穂坂式」といわれています。久保区内には円筒分水槽が西天童水路東側に二カ所あります。

(二) 桐亭良亮筆塚

旧公民館跡地（児童公園）にあります。桐亭良亮は、本名を木下周策、豊臣良亮といいました。久保の人。手



桐亭良亮筆塚



利澤千秋碑

習いの師匠でした。

桐亭良亮翁 筆塚

碑陰 明治三四年辛未

五月廿五日

(三) 一貫句碑 (日ぐらし塚)

北部保育園の西側

にあります。一貫

の本名は木村徳太

郎といいます。(一

八七一〇一九三八)

詩歌句庵 一貫とい

ます。箕輪町三日町に生まれ、久保に移つて、俳句会「金麗

会」の創始者となりました。

日くらしや目先にせまる夜の帷

一貫

(四) 馬場水師夫妻句碑

昭和初年、俳句仲

間「金麗会」が結成

されました。その創

立に加わり活躍し

たのが馬場武雄(水

師)です。水師夫妻

の追悼遺稿集に「白梅集」があります。馬場家の墓地に夫妻



水師夫妻句碑



一貫句碑

の句碑があります。

森の木の幾世香に立つ老鶯

水師

曉や梅の白さの寒うして

近江

(五) 庚申塚

西念寺観音堂の南側、道路に面した傍らに並んであります。

庚申塔がこの地に移転したときに移されました。

(写真右側から)

1 甲子 昭和五九年(一九八四)

2 庚申 昭和五五年(一九八〇)

3 庚申 大正九年(一九二〇)

4 庚申 安政七年(一八六〇)

5 庚申 寛政一二年(一八〇〇)

6 庚申 元文五年(一七四〇)

7 庚申塔 日月・三猿・二鶴有り。

8 甲子 大正一三年(一九二四)

9 西国坂東秩父供養

10 大乗妙典六十六部供養

11 青面金剛像

12 摂待供養

享保二年(一七二七)一猿の像

庚申塔と思われます。



庚申塚

(六) 旧西念寺入口の碑・像

二十三夜供養塔
しよのかんとう

聖観音像

(七) 水神

久保瀧ノ沢、
しよのかんのん

旧三州街道西に
あります。



聖観音

水神
碑陰

昭和十二年四月二八日

堀久雄建立

久保上の段南部、
水源地にあります。

水神
碑陰

昭和十二年四月二八日



水神

吉日建立
矢沢計十郎

堀保太郎

矢沢留次郎

山口喜十

織部源治郎



水神

(八) 久保北垣外にあります。

水神

大正末、昭和初期の頃、堀博一によつて作られました。

道祖神

公民館近く、
四辻にあります。

道祖神
碑陰

天保七年
庚申十二月建立

庚申十二月建立

天保七年
窪村

猿田彦大神
碑陰

①公民館北側三叉路にあります。

②公民館東、少し下つた所にあります。



道祖神

七 用水

(一) 上井・下井

北沢と南沢にはさまれた中段畠地に、上段地のすそから湧出する水を引く二つの井があります。一つは旧公民館南東から湧出している水を引いて上井といい、いま一つは上井より

百瀬南のところから湧出している水を引いて下井といつています。この二つの井が久保中段地の中央を流れ、水道がひかれるまでは飲料水に使われたり、水田用水となっていました。又、南沢からもこの井に水が入っていました。水田の少なかつた昔は、どんな苦労をしてまでも水を引いて田にしようと考えていました。例えば、南沢に堤を設けて南沢西斜面に井を作り、棚木地籍の水田を潤しました。別に南沢西斜面を通り久保水源地の東側の家添いの水田を潤しました。北沢から両斜面一筋ずつの井があつて家添いの水田を潤していましたが、西天竜開田により廢止され、現在では上井と下井だけとなっています。

(二) 沢(北沢・南沢・滝ノ沢)

箕輪町木下区との境に北沢、久保のなれば南寄りを流れる南沢、塩ノ井との境に滝ノ沢、三つの沢があります。どの沢も水が豊かで昔は採草地となって田の肥料に、牛馬の糞にと大切な役目を果たしていました。水量が豊富だったので水車小屋が設けられ、精米所の役割もしていました。水車小屋のない地区へ出向いて米、粟、稗、麦、そば、大豆などを預かって来て、ついて、またそれを配達したりしました。この水車小屋が北沢に三軒、南沢に二軒、滝ノ沢に四軒もありました。現在は水車小屋はなくなっています。草場は化学肥料の普及により、現在は役目を終えています。しかし冷たい豊

かな水と立地条件を生かしてわさび畑となり、滝ノ沢のわさび畑は、板ヶ洞(塩ノ井)のわさび畑と並んで優れたわさび畑になっています。

(三) 簡易水道

久保の簡易水道は、昭和四年(一九二九)七月に竣工しています。



貯水槽



わさび畑

り、家庭用雑用水として使用されています。

(四) 横井戸

1 北垣外の横井戸

字北垣外、断層下にあります。正確な掘削年は不明ですが、堀傳一、倉田準、赤羽程助の三人によつて掘削されました。穴のみられ少量の水が流れています。

2 久保の横井戸（春日道下）

高さ一・五尺、幅一・二尺、延長一八〇尺です。明治一二年（一八七九）掘削願いが提出されていますので、その後起工されたものと思われます。

3 久保西の横井戸（屋号喜多屋敷下）

高さ一・五尺、幅〇・六尺です。昭和四年（一九二九）起工です。現在は少量の水が流れています。



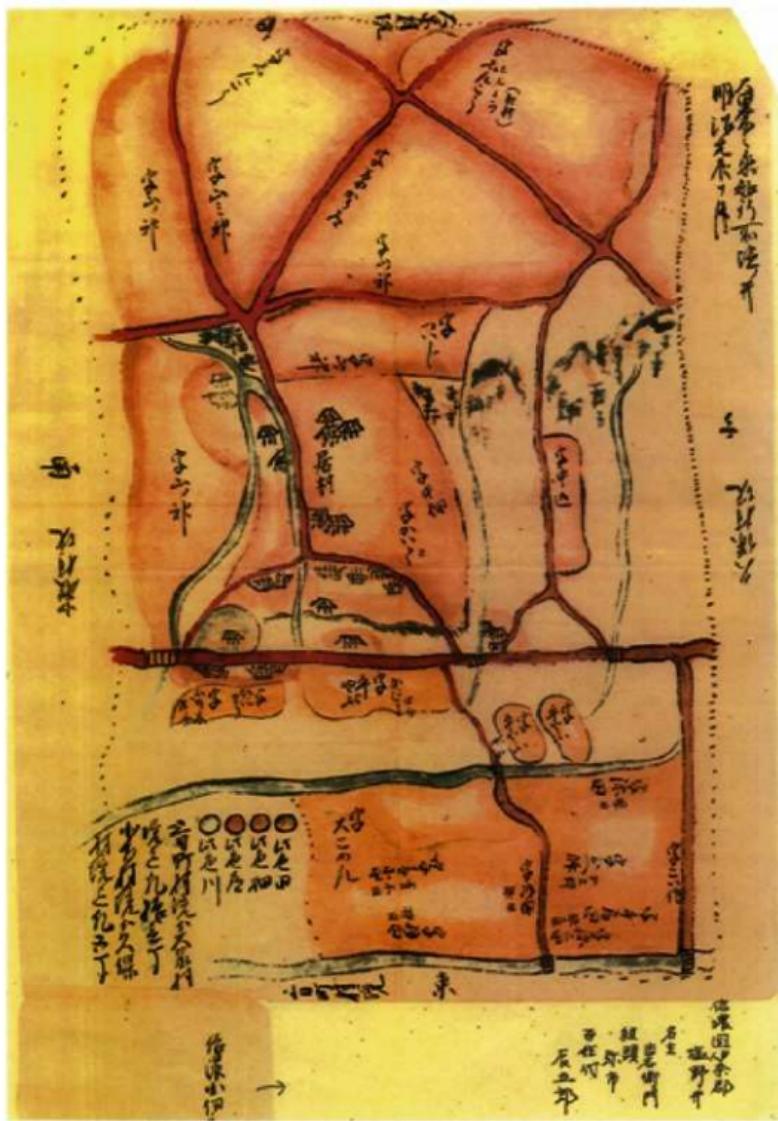
久保春日道下横井戸穴の中

第三 塩ノ井

4+



明治一年（一八六八）の塩ノ井絵図



一 塩ノ井の由来

塩ノ井は東西に長く南北に短い地形の地区です。明治元年（一八六八）の絵図には、東西一一丁（一丁は約一〇九メートル）、南北は五丁とあります。

塩ノ井地区は、北から滝ノ沢・柄ヶ洞・下ノ沢の三つの沢を有し、段丘崖下は水はけの悪い湿地帯が広がり、わずかな水田はありましたが、人が住むには適していなかつたので、主として西側の段丘上に居住地がありました。湿地の排水ができるようになって下段地区に人家も増えてきました。

段丘上は三本の沢筋によつて中込・垣外・山ノ神の三地区に分けられていますが、それぞれに古い歴史を持つています。中込地区には、中世の中込城の遺跡があります。垣外には、縄文・弥生・平安時代の歴史を語る天伯遺跡が広がっています。そして、早くから集落が形成されていました。また、山ノ神遺跡からも縄文・平安時代の住居跡や食器を使つたたくさんの中器が発掘されています。塩ノ井地区に住んでいた人々は、段丘上の畑作を中心にしてきました。

歴史史料に「塩ノ井」の名が初めて出て来るのは、永禄・天正年間（一五五八—一五九二）のこと、諏訪上社関係文書に「廻湛神事」（春の豊作祈願と冬の収穫物取納のために、

諏訪上社の神使が関係地域を廻り神事を行う）のなかに「塩ノ井」で行つたことが記されています。この廻湛神事が行われた推定地は、小字「築地」にある古宮跡（天伯社跡）辺りとされています。

塩ノ井の区（村）名の起源は詳らかではありませんが、古くから久保（窪）村の一部で、江戸時代のほぼ半分もの長い年月を久保村に属していました。江戸から明治・大正期の史料の中には、塩ノ井地区のことを「久保村南割」と書いたものがいくつもあります。しかし、地区の人たちは早くから分村独立の思いが強く、模索を続けてきました。寛保三年（一七四三）、時の領主であつた旗本の太田資賢（一代目領主）の時、ようやく分村が認められて塩ノ井村として独立しました。それ以来一三〇余年、明治（一八六八）まで自立した村として行政事務を行つてきました。

明治五年（一八七二）に再び久保村と合併しましたが、明治八年の南箕輪村誕生の時には、塩ノ井耕地として独立しました。大正三年（一九一四）からは塩ノ井区となり、現在に至っていますが、昭和五〇年（一九七五）中込地区に団地が造成され、中込区として独立分離しました。

かつて、湿地帯で水田耕作も容易でなかつた下段の東地区は、戦後の土地改良事業によって乾田化工事が行われ、良好な水田地帯となりましたが、現在は企業・商店・住宅が立ち

並ぶ地帯へと変貌を遂げています。また、西側の段丘上も、西天用水路の完成により、広い水田地帯に生まれ変わりました。さらに、上下水道の整備等により、住宅や人口が増えました。明治元年（一八六八）当時は、家三六軒・人口二一人だった塩ノ井は、平成三十〇年には一〇九世帯・人口三二八人となっています。

三 塩ノ井神社と境内社

（一）塩ノ井神社

区の西方上段字山ノ神にあつて、「御尺地社」と「貴船社」を合祀しています。

1 祭神

御尺地社

猿田彦命
大己貴命
伊豆速男命
高麗神

2 山緒

社殿は、境内西側に本殿と拝殿があり、本殿と拝殿を渡



塩ノ井神社拝殿全景

り廊下で結ぶ権現造りの形式になっています。拝殿は入母屋造りで、前一間ひさし千鳥破風の向背をつけた角縁松造りです。小さな村柄には不相応な塩ノ井神社は、本殿はもちろん各所にほどこされている彫刻は、優美端麗で「塩ノ井に過ぎたるもの」の一つと言われています。

史料によると、享保一九年（一七三四）に現在地に「貴船社」が造立され、その後「御尺地社」が合祀されたと推定されます。なおまた、合祀された本殿には「寛政九年（一七九七）三月 氏子中」と記録された金幣一对が奉納されています。天明八年（一七八八）に「御左口神 貴船大明神御宮殿（社殿）」が建て替えられ、以後、明治・大正期まで、社殿・神樂殿・鳥居の建て替えや修繕が何回か行われてきました。

明治二四年（一八九一）の「村社取調」によると、「社殿（本殿）間口三間・奥行二間半、神樂殿間口五間半・奥行二間半、境内一四八坪・境外所有地山林一反歩、氏子四六戸」とあります。

戰後間もなく神樂殿はとりこわされ、また、昭和二六年（一九五一）には、社殿の前に拝殿の新築と付帯工事が行われました。

(二)

境内社

由縁

1 天満宮（天神様） 拝殿右手の覆屋
 2 三峯社・神明社・秋葉社の合殿 拝殿左手の覆屋
 この三社は、江戸時代から村民有志による「講」が組織されて、代参が行われてきました。

3 御嶽神社碑 碑陰に「明治三十三年十月建之」とあり、多数の講人名が刻まれています。

4 蟾玉社 明治一二年（一八七九）建立し、その後屋根の修理が行われた記録が残されています。

5 本殿覆屋北側には、かつてはいくつかの家の氏神（小宮）も合祀されていましたが、それぞれ引き取られ、現在は大山祇大神・津島牛頭大王・疱瘡神・御嶽山大権現・金平宮・○○大権現（○○は不明）の六つの小宮が祀られています。

西光寺の創設ははつきりしませんが、江戸中期まではさかのぼると思われます。元文年間（一七三六～一七四〇）に編まれた『伊那神社仏閣記』には、「塩ノ井堂一ヶ所 薬師堂」とあり、また、文化八年（一八一）・天保九年（一八三八）の「村明細帳」にも薬師堂が、西光寺の前身と想定されます。

薬師堂は、

明治に入る

頃より「林泉

院」などと呼

ばれています。

が、明治

二七年（一八

塩ノ井神社と村道四号線を挟んで北東にあります。

本尊

薬師瑠璃光如来座像

四 西光寺



薬師瑠璃光如来座像



西光寺全景

九四)に間口五間・奥行四間・屋根は綾瓦葺の、現在見られるような寺が建設されました。同時に本尊の化粧直しをして、盛大な「入仏式」が行われました。明治三三年には「大般若經六百卷」(村指定文化財)が備えられました。この経本は「延宝五年(一六七七)黄檗山宝藏院本」を京都で版木刷りしたもので、上伊那北部全域に広く有志を募り、一巻五〇銭で頒布し、それらの人々から西光寺へ六百巻が寄託されたものです。現在、一二の木箱に納められて郷蔵に保管されています。

寺号は、嶺頭院(木下にある曹洞宗の寺)の支援を受けて、明治三八年に取得しました。「瑞雲山西光寺」と言い、開基は嶺頭院一九世鳳山大和尚です。梵鐘もありましたが、昭和一七年(一九四二)に供出したままになっています。また、本堂には「鳳山大和尚」の位牌・「権大僧都法印秀應」の位牌のほか、墓所には文政や弘化(江戸時代後期)の元号を持つ尼僧や沙弥の墓石があつて、薬師堂の時代から庵主が堂守をしてきた痕跡が残されています。

(一) 所蔵の文化財

- 1 大般若經六百卷 一二箱
- 2 石仏 十王像、役行者像、馬頭觀音像(四体)、双体馬頭觀音像、如意輪觀音像、藥師地藏菩薩像、南無阿弥陀仏碑

3 掛け軸

涅槃像(明治三〇年購入)

十六善神軸(明治三三年購入―現在所在不明)



(村指定文化財)
大般若經(六百巻の一部)



如意輪觀音菩薩像、藥師地藏菩薩像



十王像石仏 双体馬頭觀音像

五 遺跡・旧跡

(一) 遺跡

1 天伯遺跡

塩ノ井公民館周辺一帯で、
遺跡碑は段丘上の標高七一
〇㍍の所にあります。

昭和四二年（一九六七）、
水田造成事業に伴う緊急発
掘調査によつて調査され、
ほぼ全容が明らかになりま
した。古くから石鐵や土器
片がたくさん出土していいて、
遺跡地として知られていた所です。



西から天伯遺跡を望む

トレンチを掘つての調査の結果、住居跡一軒が掘り出さ
れ、遺物は縄文中期の石器・土器(片)・土偶、弥生後期の
土器(片)、古墳時代の土師器・須恵器、鉄器(鎌・鋤・鋤・
刀子など)、灰釉陶器、紡錘車(四つ)などが大量に出土しま
した。なかでも土師器時代のもの(住居跡も土器も)が最も
多く出土しています。(詳しくは『南箕輪村誌』遺跡編参照の
こと)

2 山ノ神遺跡

平成一三年に村道四号線の拡幅工事に伴い発掘調査された
遺跡です。塩ノ井神社西の道
路沿いに当たる所です。

縄文時代の住居跡二軒、平
安時代の住居跡一軒が検出さ
れました。

平安時代前期の住居跡から
は、食器・煮炊具・貯蔵具な
どが良好な状態で多数出土し
ました。それらの中には、墨
書きや刻書されたものも何点か
見られました。また、住居の
造りには出入り口の造り方・
柱の組み方・竈の造り方など
村内初と思われるものがあり
ました。(出土品と報告書は
郷土館にあります。)

天伯遺跡の西南端に位置す
る所に、「天伯遺跡」の石碑
と、石祠が祀られています。



石碑と石祠



山ノ神遺跡出土土器

ここが古宮跡と推定されます。江戸時代後期の絵図に、塙ノ井神社とともに「朱の鳥居」が描かれています。諏訪神社上社の「廻湛神事」(由来の項参照)が行われた有力な推定地です。この地の小字「築地」は、館や神社仏閣を取り囲む土壠^ハを意味しています。

(三) 塙ノ井神社上 塙

中込城のあつた所の南端は、柄ヶ洞の深い沢が刻み込んでいます。この沢を上り詰めると、南側の天伯の台地と緩斜面で結ばれて窪地を成しています。この辺り一帯の窪地・山林を郷士ヶ窪と呼びますが、中込城との関連が推測されます。(郷士とは、普段は農業などをしていて、戦いが起きたとき武士になつて戦う人々を言います)

(四) 塙畠

村道中込線添いに「塙畠」と呼ばれる小字^{モリ}があります。古老人の話では、西天竜水路による開田以前には小墳丘があつたと言います。円墳跡と推測されます。

(五) 富士塙跡

江戸時代の終わり頃の地図に、村道中込線と北原道(北原へ通じる道)との交差する辺りに小字「富士塙」と書いてある場所があります。どういう人達が、いつごろ築いたのか不明ですが、富士塙が築かれ、富士信仰が根付いていた時があつたことを示すものです。(富士塙については「田畠」の項

を参照)

(六) 上人塙

塙ノ井神社の西南へ一〇〇㍍ほど行つた所の畠地

に、小字「上人塙」があり

ます。そこに

小さな野仏が

祀られ、「元禄年中 上人」と刻んであります。(元禄年中—

一六八八—一七〇四)

この上人塙については昔話が伝わっています。旅の坊さんが、はやり病に苦しんでいた村人を、自分の命をかけて救つたという話です。(「みんなみのわのむかしばなし」参照)

昭和の初め頃(一九三〇年代)まで、小山のような塙であつたようですが、今は平らな畠地になつています。

(七) 蚕玉様

蚕玉とは蚕の神様のことです。

江戸時代から明治にかけて、耕地の八〇㌶以上が畠地であつた塙ノ井では養蚕が盛んでした。そのため「蚕玉様」の祀りも行われるようになつていきました。明治一二年(一八



上人塙

七九）に塩ノ井神社の境内に「蚕玉社」が創建され、その後何度か修理した記録が残っています。

経緯は不明ですが、現在は長尾氏旧宅地裏の斜面に移され、長尾氏が蚕玉社を祀っています。

八 郷藏

西光寺西隣りに、村内で唯一残されている郷藏があります。郷藏というのは、江戸時代中期以前は年貢米の保管をする倉庫が主な目的でしたが、中期以降、特に天明（一七八一）・天保（一八三〇）の飢饉を経て、飢饉に備えての穀物貯蔵のための施設になつていきました。貯穀した穀物は、飢饉時には救民のために配給されました。

塩ノ井の郷藏がいつ頃からあつたかは分かりませんが、天保九年（一八三八）の村明細帳には載っています。明治初め（一八六八）の記録には塩ノ井神社北東隅の窪地に六坪の郷藏が建てられています。そこに「糉二石五斗・大麦一二石二斗が貯穀されている」と記されています。

現在ある郷藏は、明治六年（一八七三）に建て替えられたものを、昭和一年（一九三六）に現在地に移築したものです。



村内に唯一残る郷藏

九 猿田彦命の上棟札

猿田彦命は塩ノ井神社の祭神の一神ですが（神社の項参考）、昭和二六年（一九五一）の拝殿建設の上棟式の時、正面屋根に掲げられたものが郷藏に残っています。

十 翁塚

伊那街道の塩ノ井から北殿宿へ入る手前の所に、「翁塚」と呼ばれる塚がありました。そこには老松と芭蕉の句碑・矢部蠅堂の筆塚が建っていて、街道の名所にもなっていましたようです。矢部蠅堂は幕末から明治の初め、塩ノ井に私塾を開き手習いを教えていた縁で塩ノ井神社の幟を揮毫しています。

北殿宿に入る手前は急坂になつており、また、下ノ沢・大門川の合流場所でもあつて土橋がよく傷み、街道の難所の一つでした。明治二七年（一八九四）、三州（伊那）街道大改修の時に、街道が翁塚にかかることになり、塚は削られてしましました。（碑については「北殿」の項参照）



塩ノ井神社拝殿
上棟式の棟札

六 句碑・顕彰碑など

建っています。

碑面 鍤水の碑

塩ノ井水利組合

西天童土地改良区

(一) 開田記念碑

塩ノ井神社西の庚

申塚の西北隣りにあ

ります。



開田記念碑

碑面 開田記念

前農林大臣從三位勲三等 山本貞次郎閣下題額

なき人に 見せばや変わる 秋の来て

西天童の 稲のざさ波

白馬堂 書

碑陰

西天童役員有志者名 一四名(名前略)

昭和七年十一月 六十三歳 征矢 定次郎 建立

石工 大泉 出羽沢 為十郎



鍤水の碑

(二) 鍤水の碑

神社の北の道を西
天へ上ると、中込線
と交差します。中込
線を北に向つて五〇
メートルほど行くと東側に

(三) 征矢吉兵衛 歌碑

委員名一四名(名略)、外耕作者一同
昭和六十三年十一月二十三日建立

開田碑と同じ場所に並んであります。

碑面 すずみして 聞くひと曲のことのねは

年ふる松のかぜやしらぶる

碑陰 文久二戌(一八六二) 七十二 征矢 吉兵衛

吉兵衛は寛政五年(一七九三)に生まれました。資性温厚で学問を好み、和歌を岡山藩士・河原

文三に学び、村内を中心多く門人を育成しました。弟子とともに「塩ノ井八景」を詠じ、清風亭利支と号しました。



征矢吉兵衛 歌碑

(四) 征矢貫通 歌碑

旧国道と国道一五三号線の交わる所から旧道を北へ八〇メー

ほど行つた所の、西側斜面に建てられています。

碑面 春の田を かえすがえすも さき匂ふ

花に心を つくる賤のを

明治十七年（一八八四）弥生十日 征矢貫通詠之

貫通は本名五郎吉

（五六吉）で、貫通

はその雅号です。幕

末から明治にかけて

の歌人で、多くの和

歌を残しています。

明治二〇年に亡くな

りました。

（五）征矢眞白翁碑（筆塚）



征矢眞白翁碑（筆塚）



征矢貫通 歌碑

明治一〇年（一八七七）七八歳で亡くなりました。

碑文には、（漢文なので、筆者が要点のみ意訳）

書に秀で、数十年間大勢の人達に教えました。温順純朴な性格で、多くの門人が集まりました。酒を好んで飲みました。また、和歌にも秀で、多くの歌も作りました。（万葉仮名で書いた代表作の歌が碑文の中にも刻まれています。）

鳴く虫の 家さえ今は 寂しきに

衣うつなり まとかよの里

この碑文は、高遠進徳館教授の中郷元起が自ら筆を執ったもので、明治四年（一八七一）三月の建立です。

（六）征矢政十郎君碑

以前は貫通や眞

白と同じ場所に

建っていましたが、

現在は政十郎の生

家に移されていま

す。

碑文には、（漢文なので、筆者が要点のみ意訳）



征矢政十郎君碑

かつては征矢貫通の歌碑と並んで建てられていきましたが、道路改修の時、神社南に隣接する墓地に移されました。

眞白は塩ノ井の人で、本名虎教といい、書を教え、門人が大勢いました。この碑は、門人たちが眞白七二歳の時建立したもので、眞白は

にあたりました。かなりの読書家であり、たくさんの書物を読みました。妻帯しましたが、子供はいませんでした。何をするにも夢中になりましたので、無理がたり明治一年（一八七八）に四七歳で亡くなり、遺骨は父母の墓地に埋葬されました。

と書かれてあります。

碑は明治二三年、彼の死後二年後に建てられました。

篆

書の題字は鍋島直彬（元鍋島藩主）、顕彰文は対馬府中藩士が撰し、それを重厚な書風の柳田半古が揮毫（けいご）しています。

（七）道祖神

1 塩ノ井神社西の庚申塚にあります。地区内の道路のどの分岐点にあつたものか不明ですが、道路改修に際して庚申塚へ移したものです。

小さな文字碑で、年号等はありません。

2

国道から下ノ沢沿いに西光寺へ向かう道路端にある防火水槽の脇に建っています。もとは中村小路入り口東側にあつたものを、道路拡張のため現在地に移したもので

です。

文字道祖神



中村小路入口の道祖神

（八）寒念仏供養碑（道標を兼ねている）
伊那街道（旧国道）から居村の集落に入る北の入り口（青ノ坂上り口）にあります。

かつては街道の東側にありました。道路改修により現在地に移されました。

寒念仏（かんねんぶつ）というのは、寒中に三〇日間にわたって念仏行をすることで、碑は行を終えた講の人達が記念に建立したもので

す。

碑面　寒念仏供養

寛延四年（一七五一）三月日　講中

右横面　左　いせ

と刻まれています。

（九）庚申塚

塩ノ井区では、昭和五九年（一九八四）に塩ノ井神社の西隣の字「山ノ神（ミシャグジ）」に、「神壇」を設け以下のような石碑を整備しました。



寒念仏供養碑（道標）

1 庚申塔

(1) 庚申 元文五年

(一七四〇)

(2) 庚申 寛政二年
(一八〇〇)

(3) 庚申 安政七年
(一八六〇)

(4) 庚申 大正九年
(一九二〇)

(5) 庚申 昭和五五年
(一九八〇)



庚申塚全景

銅版はめ込み（碑陰）

昭和五十三年（一九七八）九月秋彼岸ひがん

三十三回忌 太平洋戦争戦没者十五名（名略）

塩ノ井区

5 馬頭観世音碑

(1) 馬頭観世音 文化五年（一八〇八）
(2) 馬頭観世音 供養碑 五基（個人建立のもの）

なお、馬（牛）頭観世音と書かれた供養碑は、他に墓地・道路端などに数多く見られます。

6 蛇絵碑 線刻で蛇が描かれています。年代不明、何のための碑かも不明です。

7 道祖神 道祖神の項に前述。

七 用水

(一) 生活用水

1 下ノ沢の湧水

塩ノ井神社の下の窪地には三か所から豊かな湧水が流れ出ています。これが下ノ沢の湧水源です。

多くの住民が集住していた段丘上の居村の家々では、集落の中心を通る里道沿いの水路から水をくみ上げ、飲み水や勝

4 忠魂碑

碑面 忠魂碑 希典（乃木希典の揮毫）

碑陰 明治三十九年（一九〇六）十二月 耕地中建之

明治三十七・三十八年 戰没者三名（名略）

手、風呂、洗濯などに使うため、桶やバケツを使って天秤棒で担ぎあげ、生活用水として使っていました。

そのため、ほとんどの家には大きな水瓶があり、また、風呂桶を持つ家では水汲みが子供達の日常的な手伝い仕事でした。

また、江戸時代の後半から明治・大正期にかけて段丘崖下の湧水が出ているところを中心的に家ができ始めると、その湧水を生活用水としていました。

2 梶ヶ洞の湧水

青ノ坂の上り口周辺の家々は、梶ヶ洞からの湧水と段丘崖下の各か所からの湧水を生活用水としていました。

3 簡易水道の敷設

戦後、衛生上の安全性や安定した水量を使える上水道の要望が高まり、三か所に簡易水道を作りました。昭和三〇年（一九五五）一〇月、上の段全域を対象に、三年四月には



下ノ沢の湧水

下段北側の地区を対象に、三二年四月、下段南側地区を対象とする簡易水道が引かれ、これにより、特に主婦の家庭での労力が格段に軽減されました。

4 村営水道への加入

簡易水道は、いずれも小規模のもので、管理や経営面で行き詰まり、村営上水道の敷設が待望されるようになりました。

昭和三九年から始まつた村営上水道事業は、水利権なども絡んで困難な事業でした。各簡易水道が抱える事情を考慮しながら一本化するには多くの時間と労力を要しました。ようやく多少の課題を残しながらも、昭和四五年（一九七〇）には事業が軌道に乗るようになり、塩ノ井の三簡易水道も早くから村営上水道に組み込まれました。

（二）水車場利用

滝ノ沢、梶ヶ洞、下ノ沢の三河川は、年中豊かな水量を有し、また、急流でもあつたため、各沢には「水車」が数多くかけられて利用されていました。多い時には大・小七か所もの水車がかかっていました。

（三）水田用水

江戸時代の天竜川の洪水は、主なもので六六回を数えます（『村誌』下巻「水との闘い」参照）。単純に計算すると、三・五年（四年）に一回の割合で発生していたことになり、人々は驚くほど頻繁に水害を受けていたことになります。洪水の度

に水田は流れ、砂に埋まり、天竜川の川筋は大きく変わりました。また、黒川の水域は、湿原地帯で水田耕作には不向きで大変な労働力を要しました。また、ヨシなどが生い茂る「刈敷の草場」などに利用されてもいました。

1 天竜井（北殿の項参照）

2 中島井（北殿の項参照）

3 土地改良事業による灌漑・排水路

昭和二六年（一九五一年）から三一年（一九五六）まで天竜井・黒川などを含む天竜川両岸の灌漑排水工事が行われました。木ノ下駅から北殿駅の区間には、字東田周辺から飯田線の西側を通り長大な第一排水路が整備されました。東田・中田地区の湿田が乾田化され、生産力は一段と増しました。また、塩ノ井地籍の黒川周辺の水抜きも進み、その後、国道のバイパス道（現一五三号線）が開設されるまでになりました。

おおむね段丘崖下の県道（旧国道一五三号線）に当たります。現国道一五三号線と交差する辺りから明和坂までの所は、下段におりていました。

農閑期には農民は副業として、「飼い馬」に商人から預かった雑穀や綿、麻、紙荷、煙草などを積んで飯田、名古屋方面へ、後には松本近辺、甲州方面まで運搬し、帰り便で塩や海産物などを持ち帰る「中馬」稼ぎをしていました。塩ノ井も中馬村の一つで、久保村と合わせて五〇匹の中馬が認められていました。

伊那街道は、明治九年（一八七六）に二等県道に改められ、次いで明治一九年には、二等県道三州街道と改められました。その後、何回かの改修が行われましたが、明治二七年（一八九四）の大改修を経て、昭和四〇年（一九六五）頃、国道としての直線化改修大工事（段丘崖への高い石積み）が施され、現在見るように大きく姿を変えました。

八 交通

伊那街道（後の三州街道）

伊那街道は、中山道の脇街道として塩尻宿から伊那谷を縦貫して岡崎・名古屋まで通じる交通路です。滝ノ沢の土橋から下ノ沢の土橋までの塩ノ井地区の道筋は、



伊那街道と青の坂

(二) 居村の里道

1 塩ノ井神社を通つて大泉への道

下ノ沢の土橋から往還道を段丘上へのぼる道は、塩ノ井神社を通つて大泉へと通じる里道です。道幅は狭く一間ほどのが細道でした。右手は斜面で柳の大木や針葉樹・広葉樹が入り交さつたうつそうとした崖になつていきました。また、左手は下ノ沢に向かつて野面の斜面になつていきました。塩ノ井神社を南に回る道はそのまま大泉に向かっています。北側は山道でしたが、西光寺の少し上から五尺ほどの山道が北西方に向いており、これを抜けると「草刈道」と呼ばれる北西に向かう道に繋がつて、中込の上で「中込道」と合わさり、北原の入会地や原畠へと向かいました。これを「北原道」と呼んだようです。塩ノ井神社北側の山道は直線的であつたため、やがて広げられ、現在の村道四号線(道幅七尺)となりました。

2 村中の道(中村小路から青ノ坂へ)

里道のほぼ中間点の高札場から右に折れて北へ向かう道を「中村小路」と呼びます。道を挟んで東・西に数軒の家並が並ぶ小路でしたが、道幅は狭くせいぜい一間ほどであつたようです。

小路の北詰まりから段丘崖を急な里道が柄ヶ洞の土橋へと下っています。通称「青ノ坂」です。この道も馬に二駄つけ

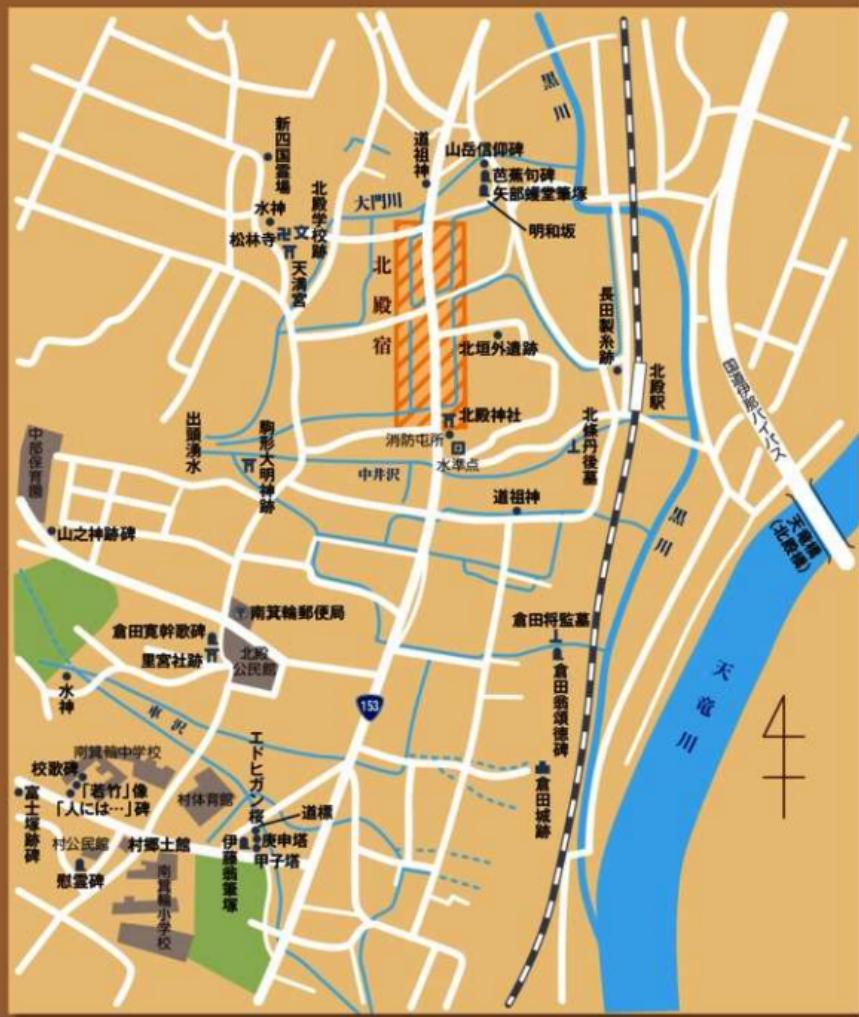
て通るがせいぜいの狭い道であつたようです。柄ヶ洞の土橋の所には「寒念仏の碑」があり、道標の性格も有していました。(本文「寒念仏碑」の項、参照)

中村小路の分岐から四〇丈ほど上で、道が左右に交差します。これも古くからあつた道です。右は、現在の公民館の所で左に上り字「ツイジガコシ」を通つて「北原道」に繋がつていました。左は行き止まり道ですが、下ノ沢の湧水地に接しています。

上段には、このほか何本か道があつたようですが、西天童水路の開通とともに縦、横ともに切りきざまれ、現在のよう

な直線的な農道に姿を変えています。

第四 北殿



一 北殿の由来

北殿は、大泉川扇状地の末端に形成された一段の段丘と天竜川の沖積地に立地した集落です。古く繩文・弥生時代から人が住み始めました。

北殿は南殿とともに、もとは殿村と呼ばれました。一六世紀前半の諏訪上社の文書に「殿村」が出てきます。殿村の地名の由来としては、御射山社^{みさやましゃ}の祭神である建御名方命^{たけみかみなみこと}が狩りをしたとき、家来たちが命をお守りした地であるところから殿衛^{とのわ}と呼び、いつしか殿村に變ったという説があります(『長野県町村誌』)。また、この集落が段丘上に立地することから、「との」とは「棚^は」から転じたもので、棚状の小高い地から殿村となつたのではとの説もあります。

殿村は宿場が大泉から北殿に移されたと同じ年、慶安二年(一六四九)に南と北に分かれ、北部が北殿村と呼ばれるようになります。(寛文二年—一六七二—一説もあります)北殿は呑用水に恵まれていたこともあって、伊那街道の宿場として、伝馬宿としてばかりでなく、旅籠など一般旅行者のための宿も造られ発展しました。

その後、明治八年(一八七五)南箕輪村の発足にともなつて北殿耕地となり、大正三年(一九一四)北殿区となり今日

に至っています。北殿区は明治七年(一八七四)には七戸、三二七人でしたが、平成三〇年には一八三世帯、三三七人となりました。住宅地はそれまでの国道一五三号線と北殿駅周辺から、県道大泉線や天竜川近くの国道一五三号線伊那バイパス周辺に拡大し、近年も住宅・人口が増加しています。

二 神社

(一) 北殿神社

北殿神社は国道一五三号線沿いの東側、消防団北殿屯所の北にあります。昭和四〇年(一九六五)三月、秋葉神社の地に社殿を新築し、北殿区内に散在していた社のうち天満宮を除く、おもな神社を集めてまつり、北殿神社と称することになりました。



北殿神社

合祀されている神社は、秋葉神社・里宮大明神・津島神社・豊川稻荷・居森殿稻荷・金毘羅宮・御鍬社・雨宮社・風宮社・居森殿疱瘡宮・子安社・山の神社の十二社です。

充の問題とも関連し、昭和三九年九月より合祀に関する検討協議が行われ、神社名を北殿神社と決定し、昭和四〇年三月七日遷宮祭が行されました。

秋葉神社の創建は、伝えによると北殿村に大火があつた際、火災除に靈験ある秋葉大権現を勧請したものと言われています。その時期は、北殿区有文書の秋葉社地売渡し証文によつて、寛政七年（一七九五）であると推定されます。また境内には弘化二年（一八四五）の常夜灯もあります。

（二）天満宮（天神様）

北殿の天満宮は松林寺南の林の中

にあります。

創建年代は明

かであります。が、北殿神社に所蔵されている棟札の一

枚はこの天満宮の物と思われます。それは、元禄五年（一六九二）のもので、この天満宮創建または再建のときのものと



天満宮

（三）里宮神社跡



里宮神社跡の石碑

現在の北殿公民館の西、里宮神社

があつた所に「里宮神社跡」の石碑が、昭和四〇年（一九六五）に建

てられました。

里宮神社の創建は明らかではありませんが、江戸時代の正徳・享保頃（一七一〇年代）に描かれたと推定される北殿宿絵図に、「里宮大明神」が記されているので、正徳以前には建てられたことが明らかです。

また天明五年（一七八五）に建て替えられたことが、棟札によつて知ることが出来ます。それによれば、諏訪大明神をまつり、通称里宮大明神と呼ばれ、北殿の氏子のもうもろの悩みを祓い清め、火災・盜難の災いを除き、五穀豊穣を祈念したことが記されています。北殿神社に合祀される前の状

思われます。この棟札から推察すると現在の社殿より大きかったと思われます。現在の社殿は平成一四年に新築されたものです。

況について
は、明治一

四年（一八八

一）の「神社
取調書控」が

残っています。

それによる

と、祭神は建

御名方命・八坂刀売命・豐受大神の三神を祀り、境内三一坪

（約一〇〇坪）、社殿は間口三間半（約六丈）・奥行二間半（約

四・五丈）、鳥居の高さ一丈一尺（約三・三尺）開き九尺（約

二・七尺）などと書かれています。



里宮神社本殿（北殿神社内）



旧里宮神社（昭和初年）

現在、北殿神社に合祀されている里宮社の本殿は、一間社流れ造りです。屋根は柿葺で「一重垂木」。長押の裏に菱型模様の絵があります。実肘木で棟を支えています。出組の木鼻は単純素朴で、懸魚はかぶら懸魚で桁隠も付いています。両側面は板張りで縁高欄があつたあとがあります。

現在の北殿公民館の敷地には、旧中部保育所がありました。が、保育所が建設される昭和三十一年（一九五五）までは、里宮神社の参道と広場があり、桜の木が何本も植えられ、住民の憩いの場になっていました。

（四）駒形大明神跡

駒形大明神は、正徳・享保頃（一七一〇年代）に描かれた北殿宿絵図に描かれています。天保九年（一八三八）の「村差出明細書上帳」には、「駒形大明神 村松森山 壱ヶ所右境内四方式拾間 祭礼三月廿三日に御座候 村中呑用水出ロの所に御座候」と書かれています。

この神社がいつ創建され、いつごろ廢されたかははつきりしません。出頭湧水の東、通学路近くの中井沢沿いにあつたと推定されます。

（五）山の神神社跡

南箕輪中学グランド北の吹上線沿いに「山之神史跡」碑があります。

ここに大山祇命を祀る山の神神社がありました。が、平成二
が推察されま
すが、はつき
りしたことほ
わかりません。

松林寺は北殿の北西、段丘の中段、東に開けた林に囲まれた中にあります。（南箕輪村三二四〇の一番地）本尊は不動明王像です。伝えによると享禄年間（一五二〇年代）の創立で、はじめは性輪（林）寺と称し、箕輪庄殿村字大泉下にあり、両部宗の寺であったと言われています。また開基は源専法印とされています。（一説には正和三年一一四一覚言法印の開基。中興の開基が源専法印とも伝えら



本尊不動明王像

年道路拡張工事によって、北殿神社に合祀されたことが碑陰に書かれています。この碑は同年北殿共に財産区によつて建立されました。

三 松林寺



山之神社跡の石碑

れています。）天文年中（一六世紀中ころ）兵火にあり、下の段に移されました。

慶安二年

（一六四九）
地元信徒の願いにより、郡

内平出村（現辰野町）の高徳寺を介し

て、高野山金剛頂院に出

願し、同院より優心法印を迎えて、寺を現在の位置に移築しました。以来、同法印を中興の祖とし、上野山松林寺と改め、高野山金剛頂院の末寺として真言宗になりました。

明治二年（一八六九）第十五世常勝法印が亡くなり、同年六月いつたん廢寺となりました。住職の死去をきっかけに、廃仏毀釈の時代背景のもと、廢寺に至つたものと考えられます。



松林寺全景

その後、一峰松藏和尚が住職となつて再興をはかり、木下嶺頭院の末寺となり曹洞宗に改宗しました。大正八年（一九一九年）、当時の住職金松道宗尼師がインド渡来の釈迦牟尼仏像を迎えた寺宝としています。



十王像

なお、境内には石造の十王像があります。作られた時期や由来はわかりません。松林寺裏には歴代住職の墓塔十一基があります。また隣接する財産区有林には馬頭観音三十六体・巡礼供養などの仏教関係石塔十基・地蔵尊像十体など多数の石仏類があります。これらは区内にあつた石仏類が集められたものです。

四 新四国靈場（お四国様）



奥の院

北殿の松林寺の裏山に四国八十八か所の靈場の本尊を石仏にして安置してあります。「新四国靈場」と称し、地元では「お四国様」と呼んで親しまれています。

苦労を味わい、人生の無常を感じ一念発起して仏道に帰依しました。

そして全国各地にある神社

仏閣の参詣を志して、天保四年（一八三三）郷里を後にしました。高野山参詣をはじめ、

四国八十八か所の靈場を三度も巡礼した後、七年ぶりに帰郷し、天保一年（一八四〇）新四国靈場の建設にとりかかりました。

(一) 有賀嘉吉のこと

この新四国靈場を發

願し建立の中心となつたのは、有賀嘉吉（一七八八～一八六六）です。

嘉吉は天明八年（一七八八）に北殿有賀屋の長男として生まれました。幼い時に父

母を失い、さまざま



奥の院 弘法大师像

奥の院は天保一五年（一八四四）に完成しています。嘉吉は十年近くの年月をかけて、新四国霊場を完成させた後、嘉永元年（一八四八）に大願成就の感謝のために、再び四国巡拝の旅に出ています。信仰一途に生きた嘉吉は帰郷後、お四国様の傍らに法照庵という草庵を建て俳諧を趣味とし、念佛三昧の生活を送っています。慶応二年（一八六六）正月四日に数え年七九歳で亡くなりました。

嘉吉は、嘉永元年（一八四八）からの四国西国旅行を綴つた『旅行日記』や、『法照庵句集』という冊子を残しています。

（二）霊場建立の趣旨と経過



「勸進帳」の表紙

有賀嘉吉が新四国霊場の建立を発願した趣旨と、寄付者名を記した天保一一年（一八四〇）の「新四國勸進帳」が大宗館

文庫の中に残っています。

それには、「尊い靈場の御利益を受けるためには、四国八十ヶ所は伊那の地からはあまりにも遠い。年寄りや子供など巡礼に出られない人たちにも何とかして靈場参拝のできる喜びを分かち合いたい。」との趣旨が述べられています。

新四国霊場の建設にあたって必要とする資金を、嘉吉と建立世話をした人々は三百余人から集めています。寄進した人々の名は各石仏の台座に刻みこまれていますが、その多くは上伊那中部・北部にわたる親類縁者や近隣の村人です。中には遠く越後・近江彦根・揖津池田からの寄進者もおります。これらは、嘉吉の四国遍路の道連れになつた人々と思われます。



お四国様の石仏群

嘉吉は四国八十八か所の靈験にあやかれるよう、各札所の土を香箱に納めて持ち帰り、それぞれの石仏の台座の下に埋めたということです。

各石仏の台座には寄進者名と、八十八か所の本尊名が彫られ、一番札所から八十七番札所まで整然と並べられています。なぜか三十六番が「勧進帳」にも記載されず、石仏もありませんでした。また八十八番は「勧進帳」にはありますが、石仏がありません。三十六番は地元有志により、昭和五四年（一九七九）に追建されました。また参拝者は奥の院の弘法大師像を八十八番とみなして参拝しています。

（三）諸國神社仏閣塔



有賀嘉吉の墓

有賀嘉吉の墓と顕彰を兼ねた石碑が境内にあります。正面には「奉拝諸國神社仏閣塔」、東面には「瓢箪とわれとのあひのさくらかな 湖月 有賀嘉吉」と嘉吉の句が、北面には「法照庵仏学祖印居士」と嘉吉の戒名、西面には箕輪町木下の医師中川道策（「一八〇〇」一八六八）が記した有賀嘉吉顕彰の文が記されています。

（四）信仰と保存

こうしてできた新四国靈場は、村内はもちろん近隣の村々からの参拝者でにぎわいました。特に戦前・戦中にかけては戦勝祈願のため盛大な祭りも行われました。しかし、戦後はすっかり忘れて草にうずもれるばかりでした。

昭和五〇年（一九七五）には「新四国靈場保存会」が作られ石像や守堂の修理・境内整備が行われ、昭和五一年（一九七六）には村文化財第一号に指定されました。その後、敷地が村に寄贈され村教育委員会によって案内板などの整備が行われました。現在も北殿老人クラブにより、毎月八日に清掃活動が行われています。

五 遺跡・古跡・名木

（一）北垣外遺跡

この遺跡は、北殿駅西側の段丘上で国道東にあり、南北三五〇メートル・東西一六〇メートルの範囲にあります。

宅地造成に伴う発掘が平成三年（一九九一）四月から行われました。その結果、弥生時代の住居址四軒分、古墳時代から平安時代の住居址六軒分と掘立柱式建物址が確認されました。また



扁円筒型土製品

遺物としては、弥生時代の甕や壺の破片や環状石斧が発掘され、古墳時代の土師器や須恵器の完形品や勾玉破片などが発掘されました。奈良・平安の遺物としては愛知県の猿投産の灰釉陶器破片や一二世紀から三世紀の中国景德鎮産の白磁破片も発掘されています。

この遺跡の発掘により、上伊那で初めて

弥生中期終末期の集落址が確認されました。また古墳時代に竈神祭祀に使われたと考えられ、全国的にも出土例が少ない上の面に四つの穴を持つ扁円筒型土製品が発見されたことも注目されます。

(二) 倉田城跡（付）倉田将監墓・北丹後墓

北殿駅南西の段丘上、北殿信号横の路地を入った奥の段丘端にあります。

東西約四〇メートル、南北約五五メートルの平地で、元は水田でしたが今は住宅が建っています。東は高さ二〇メートル余の急な崖で、木立の下を飯田線が走り、南と北に深い堀があります。北の堀の途中から南に向けて大きな溝があることから、昔は西にも堀が南北に続いていたものと思われます。

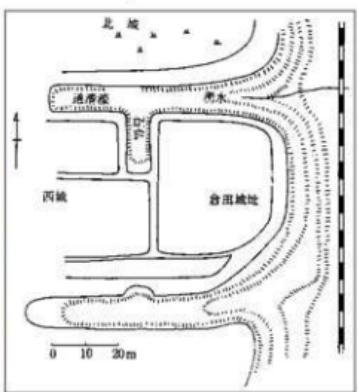
北にある堀は道清塚と呼ばれ、そこには清水が湧き出していて、土地の人は道清清水と呼んでいました。今も一年を通して

じて水が湧いています。この古城跡を本城と呼んでいますが、ここに接して北城・西城の地名が残っており、御小屋というところもあつたそうです。

言い伝えによると、鎌倉から來た倉田筑後守は、はじめ伊那市横山の鳩吹城に居住していましたが、木曾義康と当地で戦つて敗れ、北殿に来て館を構えたとのことです。その子将監安光は剛勇の士で、小笠原長時に加勢した福与城主の藤沢頼親に属して活躍し、天文七年（一五三八）七月一九日、甲斐国垂崎の合戦で武田勢とたたかい討死したとい



倉田城（中央右の林に囲まれた範囲）



倉田城跡付近の見取図

うことです。その子淡路守・石見守を経て子孫がこの地に住みついたといわれています。

倉田氏の子孫たちは、将監の事跡をしのんで、いつのころか城の北のヤセオにある倉田家の墓地に将監の墓を建てました。碑面には「倉田将監友綱墓」と書かれています。

なお、「伊那温知集」には、この地に倉田氏の前に北条丹後守が住んでいたと記されていますが、詳しいことはわかりません。中井沢を見下ろす段丘上東端の北条家の墓地の中に、「北條丹五塔」と書かれた石碑があります。右側面に享保八年（一七二三）の年号が読み取れ、丹後守の子孫が北条丹後守の墓として建てたものと思われます。

（三）浅間塚跡碑

南箕輪村公民館上の道路沿い、アルブス信用金庫南箕輪支店斜め前、浅間塚団地北東角に昭和四〇年（一九六五）に建てられました。

この付近に富士

浅間信仰の富士山型の富士塚があり、浅間神社もまつら

れていましたが、よりこの塚は壊さ



浅間塚跡の石碑

（四）エドヒガン桜
南箕輪小学校、グラ
ードの道路を隔てた北に
ある古木です。この桜
の木は高さ約一七メートル
幹回りの太さ六・五メートル
あり、樹齢二七〇年余
と推定されています。

開花期が早く、淡紅白
色のきれいな花を咲か
せます。

この桜は八幡参道に
沿っており、根元に七
基の庚申塔があります。そのうち元文五年（一七四〇）の庚
申塔が建てられた際に植樹されたものと伝えられています。
昭和五一年（一九七七）に村の天然記念物に指定されまし
た。また、毎年開花期には北殿区によつてライトアップが行
われ、肥料を施すなどの保護がはかられています。



満開のエドヒガン桜

六 句碑・筆塚・歌碑・顯彰碑等

(一) 芭蕉句碑（おきな塚）

上伊那郡で最も古い松尾芭蕉（一六四四～一六九四）の句碑が、国道一五三号線から北殿駅に向かう、旧伊那街道の明和坂下にあります。

かつては現在地より二百メートルほど離れた塩ノ井地籍に「おきな松」があつて、その下に東向きにこの芭蕉句碑と矢部蠅堂の筆塚があり、「おきな塚」と呼ばれていました。「おき



松尾芭蕉句碑

な」とは芭蕉のことを指します。矢部蠅堂の筆塚とともに明治二七年（一八九四）に三州街道の改修により、西向きになりました。さらにその後の道路改修で現在地に移されたと思われます。（塩ノ井）の翁塚参照）



明治27年頃のおきな塚（「今様奇談」の挿図）

花の陰うたひに似たる旅ね哉の句が彫られ、左すみに「尾州隱士也有七十三齡書之」とあります。碑陰には「元禄七甲戌十月十二日 当国三狂庵門人 真輪連中」と三行に彫られています。

この句は、貞享五年（一六八八）に芭蕉が「笈の小文」の旅の時に読んだ句です。句意は「こうして桜の花の下に

いると、謡曲の中の人物になつたようにまことに優雅な、旅の宿りであることよ」といった内容です。

句碑の筆者は、尾張藩一二〇〇石取りの上級藩士で、御用
人・大番頭・寺社奉行などを勤めた、横井也有（一七〇一～一七八三）です。也有は宝暦四年（一七五四）五三歳で隠居し、半掃庵と称し、俳諧句を作り、多くの門人を育てました。優れた俳文学である『鶴衣』を著したことでも知られています。

また、三狂庵は飯田藩士の窪田桐羽（一七一七～一七八八）のことです。桐羽は、横井也有に師事し、宝暦から天明期（一七五〇年代から八〇年代）にかけての伊那谷俳諧の指

導的な人物でした。この碑が建立される一年前に、也有が跋文を寄せ、桐羽が編纂した俳諧集『その原』が発刊されています。そこには、大泉の清水柳茂（一七一二～一七八七）など一七人が「対輪連」として俳名を連ねており、桐羽の門人がこの地で活躍していたことがわかります。

句碑の建立は、「也有七十三歳書之」から安永三年（一七七四）と考えられます。芭蕉没後八〇年の追善供養として、この地の俳人たちが、桐羽を介して、也有に揮毫を頼み句碑を建立したものと思われます。なお碑陰の元禄七年（一六九四）一〇月二二日は芭蕉の命日です。

（二）矢部蠻堂筆塚

明和坂下の芭蕉句碑と並んで立っています。碑面には上に「蠻堂 矢部 先生」と三行に縦書きされ、その下に「筆家」と大書されています。

矢部蠻堂（一八三二～一八七九通称は政也）は天保三年（一八三二）、高遠藩

医の家に生まれました。学問を好み、書道も得意でしたので、医業を継がず、寺子屋師匠となりました。文久元年（一八



矢部蠻堂筆塚

六一）塩ノ井に私塾を開き塩ノ井・北殿の子どもたちを教えた。さらに明治五年（一八七二）から明治九年までは創立直後の北殿学校の教員として習字・読み書きを教えました。

門人の中には清水斎など後世村の中堅として活躍した人が多く、清水ら門人たちが明治二年（一八八八）に、その徳をしのんで筆塚を建立しました。

（三）伊藤翁筆塚

伊藤翁筆塚は工ドビガン桜の下にあります。

碑の表面中央に「筆塚」と大書され、右下



伊藤翁筆塚

に「世話人」「筆児中」と一行書きされ、左に「七十五翁」「伊藤太次兵衛利庸」とあります。碑陰には「文久元酉年」「十二月」と二行書きされています。（文久元年は一八六年）

伊藤氏は、幕末の寺子屋師匠であったということ以外は来歴等はつきりしません。

（四）倉田寛幹歌碑

北殿公民館の西に建てられています。碑面には「潮音四賀光子先生撰書 訪友のたたへて云ふに ほこらしく 仙丈岳と 雪の山さす 寛幹」と彫られています。



伊藤翁筆塚

倉田寛幹（一八八三～一九六七）は、久保に生まれ、木下小学校や中箕輪・南箕輪小学校などの訓導（教員）を三五年間歴任しました。その後、村議・収入役など要職を十数年、一生を公職に捧げた人です。一方で、短歌を好み、号を月哉（げざい）といいました。潮音同人として太田水穂や四賀光子に師事し、歌集『箕輪の月』を残しています。

教え子・歌友によつて昭和四年（一九六九）三月に歌碑が建てられました。

（五）倉田翁頌徳碑

倉田友喜（一八三七～一九一四）の顯彰碑が、通称ヤセオ地籍の倉田家の墓地にあります。

碑面には倉田友喜（三郎兵衛、後に改め三郎）は、弥五左衛門友長の長男として生まれ、明治初年に北殿村里正・副戸長を経て、南箕輪村副戸長・村会議員・郡会議員を歴任、さらには三等郵便局長に任命され、大正三年（一九一四）一〇月一九日、七七歳で病没したこと等が書かれています。



倉田寛幹歌碑



倉田翁頌徳碑

この碑は、上部に横書きで「倉田翁頌徳碑」と伯爵徳川達孝（一八六五～一九四一）により篆額され、下の本文は仏教哲学者の井上円了（一二〇〇四～一〇〇六）に依頼



中学校校歌碑

し、昭和二十五年（一九五〇）三月に制定、同年四月八日の開校記念日に披露されました。

中学正面玄関西にある校歌碑は、昭和五五年（一九八〇）三月に第三三回卒業生の卒業記念として建立されました。揮毫者は当時の南箕輪中学校長で書家の北原青雲（本名繁一）です。

（七）「若竹」の像



「若竹」の像

中学校正面

玄関、校歌碑
の手前に「若竹」と名付けられたブロンズの少年像があります。中

学校創立五〇周年を記念して平成九年十月に建立されました。

像の作者は辰野町出身の瀬戸剛です。

（八）「人には自らは」の碑

南箕輪中学の正門西にあります。

碑面には「人には やさしく暖かく 自らは 厳しく正しく 健やかに たくましく 高坂正顕」と六行に書かれています。

碑陰にある建碑のいきさつによると、中央教育審議会の

七 信仰碑

（一）庚申塚・甲子塔

南箕輪小学校の北、エドヒガン桜の根元に庚申塚・甲子塔があります。庚申塔と甲子塔を建立順に紹介します。

（1）庚申（板碑）

延宝八年（一六八〇）

（2）青面金剛像

正徳六年（一七一六）

（3）庚申

元文五年（一七四〇）

（4）庚申

寛政二年（一八〇〇）

（5）庚申

安政七年（一八六〇）



庚申塔群

庚申塚・甲子塔

「期待される人間像」最終報告を受け、その委員会主査であつた高坂正顕（当時東京学芸大学長）に執筆を依頼し、生徒及び一般の銘とするために、PTAなどの浄財により昭和四一年（一九六六）二二月に建立されたとあります。

(6) 庚申 大正九年（一九二〇）	(7) 庚申 昭和五五年（一九八〇）	(8) 庚申 元治元年（一八六四）	(9) 甲子 大正一三年（一九二四）	(10) 甲子 昭和五九年（一九八四）
1 道祖神	2 道陸神	3 道祖神	4 山岳信仰碑	5 月待信仰碑
北殿と塙ノ井境の国道 一五三号線西側にあり ます。碑面文字は深く 力強く彫られています。 碑陰に「天保七秋 壮月 郵中」とあります。天保 七年は一八三六年、 壯月は旧暦で八月のことです。	北殿字内城の三叉路の道陸神の隣にあります。 建立年はわ かりません。	北殿字内城の三叉路の道陸神の前にあります。 建立年代は不明です。	芭蕉句碑・矢部塙堂筆塙の隣の、大門川にかかる明和橋の 横にあります。建てられた年代はわかりません。 石柱の正面に、「奉講」とあり、その下の右に「大峯山 大権現」、中央に「富士浅間大神」、左に「金毘羅大権現」と 彫られています。右側 面には「立山大権現」	江戸時代に、この村の山岳信仰の講中の人々が建てたもの と思われます。
北殿字内城の三叉路の路傍、防火貯水池の前にあります。 建立年代は不明です。	北殿字内城の三叉路の道陸神の隣にあります。 建立年はわ かりません。	北殿字内城の三叉路の道陸神の前にあります。 建立年代は不明です。	芭蕉句碑・矢部塙堂筆塙の隣の、大門川にかかる明和橋の 横にあります。建てられた年代はわかりません。 石柱の正面に、「奉講」とあり、その下の右に「大峯山 大権現」、中央に「富士浅間大神」、左に「金毘羅大権現」と 彫られています。右側 面には「立山大権現」	江戸時代に、この村の山岳信仰の講中の人々が建てたもの と思われます。



塙ノ井境の道祖神



山岳信仰碑

2と並んで建てられています。道陸神は道祖神のことですが、建立年代は不明です。

- 3 道陸神
- 北殿字内城の三叉路の路傍、防火貯水池の前にあります。
建立年代は不明です。
- 道祖神
- 北殿字内城の三叉路の路傍、防火貯水池の前にあります。
建立年代は不明です。
- 道祖神

(五) 水神碑

1 水神

南箕輪中学グラン
ドの南東下の「いせ
んあわら」の横井の
出口横にあります。

碑面によれば、こ
の水神は横井発起人
の倉田徳三郎が建
てたものです。この横井は「亀徳水」と呼ばれ、明治三一年
(一八九八)一月一九日に着手し、同三四年一月に竣工し
ました。この水は約一町歩の水田用水として使われています。
碑陰には「あらかしめ足利て嬉しやこの清水」の句が添えら
れています。



「いせんあわら」の水神碑

2 水神

松林寺南西の裏山に建てられています。碑面には「水神」と書かれ、左隅下に「北殿北部水道組合」と書かれています。また「大正一四年三月建之」と右側面に書かれています。

大正一三年(一九二四)に松林寺下の湧水を水源とする北殿
北部上水道が、一七戸で作られたことを記念して、翌年建て
られた水神碑です。

八 近代施設

(一) 北殿学校跡

学制の本格実施に先立ち、北殿に郷学校が開校されたのは明治五年(一八七二)九月一七日のことです。松林寺が無住となり、廃寺となつた建物を利用して、久保村・大泉村・北殿村・南殿村の児童が集まつて授業が開始されました。同六年一〇月一五日には学制施行により、明治学校と改称されました。その後それぞの地区に独立の学校が作られ、学童も各学校で学ぶようになりました。明治学校は、明治九年北殿学校と改称されました。

明治一一年(一八七八)七月一日には、北殿・大

泉・久保・南殿の四校を統合し、現在の桜ヶ丘に南箕輪学校が創設され、一二月一日からは新築の校舎で学ぶようになりました。

(二) 南箕輪郵便局

近代郵便制度が始まつたのは明治四年(一八七二)



「北殿学校」跡標柱

のことですが、南箕輪郵便局の前身の北殿郵便取扱所が、松島郵便取扱所から分離独立したのは明治七年（一八七四）一月一日でした。それも明治一八年（一八八五）には再び松島に統合され、さらに明治三五年（一九〇二）に南箕輪郵便取扱所として独立し、明治三八年に南箕輪郵便局となりました。

当初無集配局でしたが、明治四年からは郵便集配事務を開始し、南箕輪村と西箕輪村一円を担当地域にしました。また、このころに為替・貯金・電信・電話業務も扱うようになりました。

昭和五年（一九三〇）局舎を南箕輪村三四六四番地（現在の北殿青山ビルの地）へ移転新築しました。戦後、昭和三二年（一九五七）に電話交換業務は伊那電報電話局に統合されました。さらに昭和五年（一九五六）に現在地の南箕輪村三三五八一三番地に移転新築しました。平成一九年日本郵政



現在の南箕輪郵便局



旧南箕輪郵便局舎

の民営化を経て、現在は日本郵便株式会社南箕輪郵便局となりました。

(三) 南箕輪村郷土館

南箕輪小学校の西隣、南箕輪村公民館敷地内にあります。

昭和四六年（一九七一）、改築中の中学校の木造校舎の一部を移築して郷土館が造られました。所蔵資料を整備・補充していく中で改修が必要になり、平成一四年改修して現在の姿になりました。



南箕輪村郷土館

館内所蔵資料としては、村内遺跡出土の石器・土器、大宗館文庫、古書・古文書類、民具、写真などがあつて、その一部を展示公開しています。週一日の開館で、郷土学習の拠点となっています。（開館は水曜日午前九時～一六時半、その他見学は教育委員会事務局に連絡）

(四) 長田製糸工場跡

幕末からの養蚕業の発達を受け、この地域でも製糸業が興ってきました。

北殿の製糸は、明治七年（一八七四）有賀又七郎が自宅に工女一〇名で座織りによる製糸工場を始めたのが最初です。

明治十年には器械製糸を導入し工女三〇人を抱えて操業していました。

長田国吉が長田製糸を起業

したのは明治二六年（一八九三）ですが、明治三六年には

三州街道沿いの旧郵便局（現在の北殿青山ビル）の北に大規模な製糸工場を造りました。



長田製糸工場全景（大正末年）

九 用水路

(一) 生活用水

出頭湧水

中部保育園北の、段丘崖下の森から豊かな湧水が流れ出ています。

この水源から、小水路によつて段丘面全域の家々に配水され、住民の飲料水などの生活水や、農業用水として利用されてきました。

正徳・享保頃（一七一〇年代）に描かれた北殿宿絵図にも、現在とほぼ同じ流れで小水路が描かれています。



出頭水源付近の清流

湧水近くでは、明治以後いくつかの横井戸が掘られ生活用水・農業用水として利用されてきました。

さらに、これら湧水・横井戸を利用して、昭和三〇年代（一九五五）代に、隣組単独や数組合同で水道組合が作られ、いくつかの簡易水道が敷設されました。

2 北殿駅前水道

北殿駅付近の段丘下には湧水を利用したいくつかの簡易水道がありますが、最も古いものは昭和三年（一九二八）に着工、昭和一〇年に完成したもので、現在でも洗い物などに使用されています。

（二）水田用水

この地域を流れる天竜川は、現在のような護岸工事が行われる以前は、しばしば氾濫を繰り返し、流路を変えてきました。従つて水田用水の井堰も埋没や取り入れ口の決壊等で、その流れは定まっていませんでした。

江戸時代には天竜井と笠田井が、ともに三日町を水源として引かれていたことが文書によつて確認できます。また黒川の水も使用されていました。

1 天竜井

箕輪町三日町の町田橋辺より取水し、三日町や本村下段の久保・塩ノ井・北殿地籍一帯を灌漑しました。

天竜井は古くより公費をもつて普請・修理してきた大切な井堰でした。洪水で増水すると、たびたび取り入れ口の牛粹が流され、その修理補修は、受益村の負担によりその都度行わられてきました。

2 中島井

ひやげんてほう 百間堤防の上から天竜川の水を自然流入で取り入れ、旧田

中城付近一帯を灌漑しました。

3 土地改良事業による灌漑・排水路

昭和二六年（一九五二）からは、伊那土地改良区（一市一町一村の広域）による土地改良事業が、北殿に事務所を構え開始されました。箕輪町の三日町の天竜川に頭首工（取水口）が作られ、天竜井・黒川を含む天竜川両岸の灌漑・排水路工事が行われました。昭和三一年（一九五六）に完成し、北殿地籍においても安定的な灌漑用水の確保と、冷水・悪水排除が行われ、乾田化と耕地整理が進み、米の生産量が増大しました。

十 交通

（一）北殿宿（大泉北殿合宿）

慶長年間（一六一〇年前後）に春日街道が開かれたころ、大泉が松島宿と伊那部宿の間の宿場に定められました。それ以来伝馬一〇匹をもつて伝馬宿を勤めてきました。ところが、慶安二年（一六四九）に、伊那街道筋の北殿へ宿場を移すことになりました。そこで大泉村から問屋一人、伝馬役六匹分の百姓七人が移つてきました。同時に北殿村にも問屋一人、伝馬役六匹分が定められました。そして御伝馬役屋敷一軒分



正徳・享保ころ（1710年代）の北殿宿絵図（原図は82cm×116cm）

に上畠一反二畝（約一二〇〇m²）ずつの居屋敷が与えられました。北殿区有文書「北殿宿絵図」にも描かれているように大泉から移ってきた家は街道の西側に、北殿は東側に、それぞれ間口十二間（約二二丈）又は六間の屋敷を区画して宿駅を整えました。それ以来この宿場は、大泉北殿合宿と呼ばれました。この十二人十二匹の常備人馬によつて、松島宿から來た旅人や荷物の世話をし、繼ぎ立てを行つて伊那部宿まで送り、また伊那部宿から來たものは松島宿まで送りました。

二軒の問屋はその荷継の事務を取り扱い、また公儀役人の宿泊のための本陣も兼ねました。その他一般の旅人を泊める旅籠屋もできました。旅人だけでなく馬も泊めました。

警戒を厳しくするために、どこの宿場でも入口や出口の道は、わざと鍵の手に曲げました

たが、北殿でも、もと伊那街道が塩ノ井から明和坂を登つて、今の国道一五三号線に出るところが鍵の手になつていました。



現在の北殿宿付近

警戒を厳しくするために、どこの宿場でも入口や出口の道は、わざと鍵の手に曲げました

たが、北殿でも、もと伊那街道が塩ノ井から明和坂を登つて、今の国道一五三号線に出るところが鍵の手になつていました。

大泉一反二畝（約一二〇〇m²）ずつの居屋敷が与えられました。北殿区有文書「北殿宿絵図」にも描かれているように大泉から移ってきた家は街道の西側に、北殿は東側に、それぞれ間口十二間（約二二丈）又は六間の屋敷を区画して宿駅を整えました。それ以来この宿場は、大泉北殿合宿と呼ばれました。この十二人十二匹の常備人馬によつて、松島宿から來た旅人や荷物の世話をし、繼ぎ立てを行つて伊那部宿まで送り、また伊那部宿から來たものは松島宿まで送りました。

二軒の問屋はその荷継の事務を取り扱い、また公儀役人の宿泊のための本陣も兼ねました。その他一般の旅人を泊める旅籠屋もできました。旅人だけでなく馬も泊めました。

はじめのうちは一ヶ月の半分の一五日ずつ、大泉と北殿が交代で伝馬役を勤めましたが、正徳五年（一七一六年）の御裁許で、北殿が二〇日、大泉が一〇日ずつ勤めるようになりました。

北殿宿を通過した著名人としては、本草学者で、紀行文を残した菅江真澄（一七五四～一八二九）がいます。その著『伊那の中路』の中で、天明三年（一七八三）五月二三日北殿宿の茶屋で雨宿りをしたことを書いています。また、地元の山崎宇八郎の著した『今様奇談』には、元治元年（一八六四）一月二三日、水戸天狗党の浪士が約八〇〇人の大部隊で北殿宿を通行した様子を絵入りで紹介しています。

明治維新になつて、明治五年（一八七二）宿駅制度が廃止になり、大泉北殿宿も公的な宿場としての役割は終わりになりました。

常備の人馬だけでは、大通行のとき不足することがあるので、その時は田畠・神子柴・南殿（以上南箕輪村）・

(二) 北殿駅

伊那電車軌道(後の

伊那電気鉄道、現在の
飯田線)が木之下から
御園まで通じたのは明

治四年(一九一〇)

一月でした。その時

に「きたとの停留場」

が作られ、北殿駅の歴

史が始まりました。そ

の後、大正一二年(一

九二三)飯田までの全

通により、旧北殿駅舎が作されました。北殿駅の大正一三年

の年間乗客数は六九〇一人、最大時の昭和二八年に八〇九

八八人という記録が残っています。

かつては大明化学本社工場への専用引き込み線がありまし
たが、昭和五九年(一九八四)に廃止されました。昭和六〇
年(一九八五)には無人駅化され、平成一年に現在の待合
所が新築されました。

(三) 北殿橋(天竜橋)

江戸時代には、北殿と福島の間の天竜川に、渡し舟はあり
ましたが、橋はありませんでした。



現在の北殿駅とホーム

八〇年の『長野県町村誌』
には「北殿橋長三十三間
(約六〇メートル)、幅六尺(約
一・八メートル)、土橋なり」
とありますので、明治初
めには橋が架けられてい
たと考えられます。

この土橋というのは、
太い丸太棒を打ち込み、
その上に丸太を組み、そ
の上に粗朶(くぱつ)(小枝)を並べ、土砂をのせて踏み固めて築いた
橋でした。幅は荷車一台が通れるくらいでした。洪水がある
と橋の上まで増水し、流失することがしばしばで、そのため
ごとに架け替えられてきました。

明治四三年(一九一〇)に土橋を架設したときの記録によ
ると、四月に「橋梁架設願」が北殿・福島の有志・総代によ
り提出され、六月には許可が下りています。工事は一二月一
〇日に起工し、二九日に竣工しています。費用は北殿・福島
をはじめとする天竜両岸の一〇の耕地の分担金、および長田
製糸はじめ諏訪・辰野の製糸家や個人の寄付金など合計四九
七円三五銭と、資材提供でまかなわれました。橋の幅は六尺



旧天竜橋(北殿橋)

(約一・八丈)、橋の長さは北殿から中洲へ一四間(約二五尺)、さらに中洲から福島へ一六間三尺(約三〇尺)でした。

昭和九年(一九三四)

にコンクリート橋脚の天竜橋(長さ九三・五尺、幅四丈)が永久橋として作られ、洪水のたびごとの架橋の苦しみからよう

やく解放されました。それ以来七〇余年、天竜川の東西をつなぐ主要な橋として利用されてきました。

現在の天竜橋は、平成三年に国道一五三号線伊那バイパスの竜東へ渡る橋として建設されました。それにともない旧天竜橋は取りこわされました。

なお、北殿・福島間の橋名は、北殿橋とも天竜橋とも呼ばれていて、北殿橋になつてからは正式には天竜橋を使っています。

四 道標

元は国道一五三号線から小学校への八幡参道の分岐点にあつたものを、エドヒガン桜の近くに移したもののです。



現在の天竜橋(北殿橋)

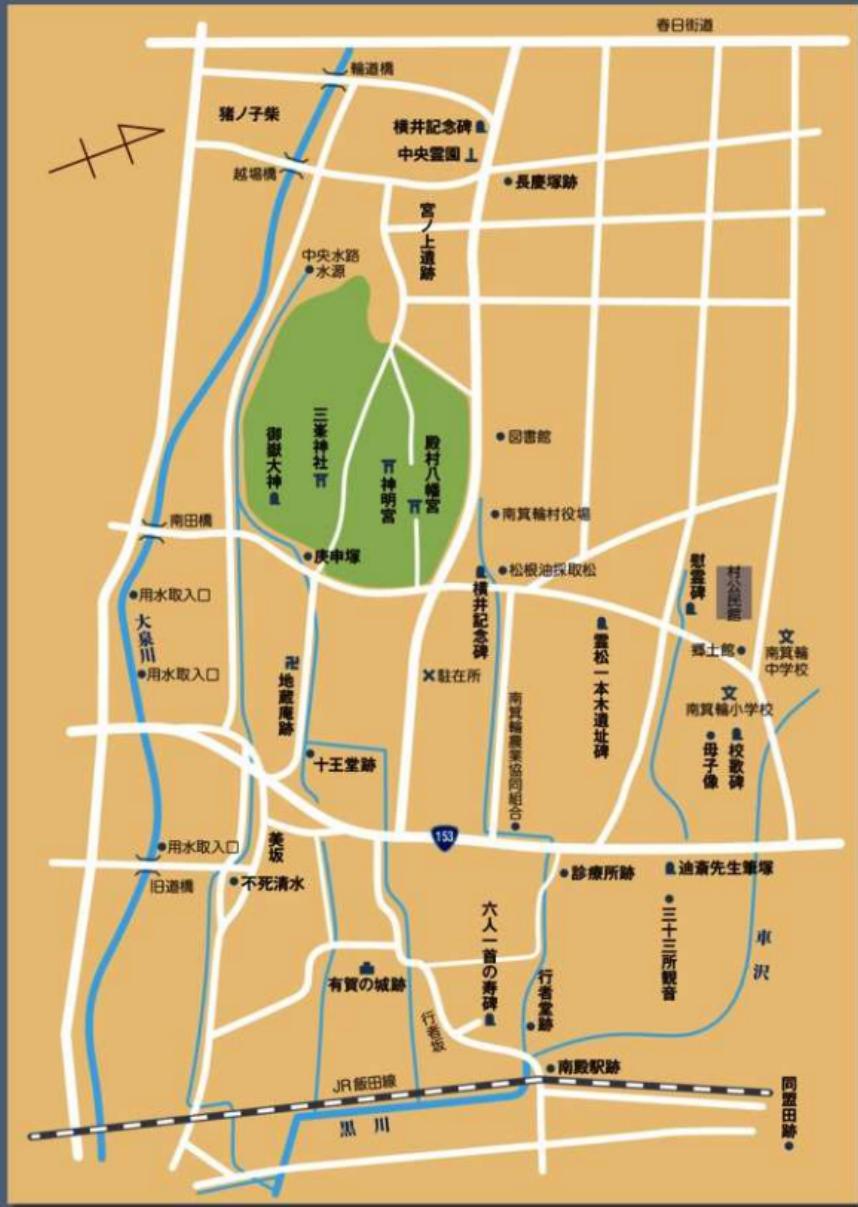
四角柱の道標で、碑面右側に「右 八幡道」、左側面に「左いせ道」と書かれ、正面には「天保二辛卯歳 正月中浣建之」と彫られています。

これは、伊那街道を通る旅人のためのみちしるべです。天保二年(一八三二)は今から約一八〇年近く前になります。また、中流とは中旬のことです。江戸時代の庶民の旅は、主として神社仏閣参詣のための旅でしたので、このような道標が街道沿に建てられました。



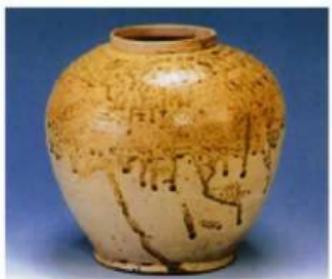
エドヒガン桜横の道標

第五 殿



一 南殿の由来

戦前より八幡宮西の「宮ノ上遺跡」からは、縄文時代中期・後期の土器・石器が多く採集されてきました。そして近年、八幡宮西より平安時代の無傷の「藏骨器」が出土し、村指定文化財となりました。また、八幡宮も古い歴史を持つた神社です。これらのことから、住みよい場所として、古くから人々の生活が営まれてきた地域だったと思われます。



宮ノ上遺跡出土藏骨器

現在の役場周辺は林が広がっています。小さな村で人口も少なかつたようですが、地蔵庵や行者堂などの古跡、大宗館文庫（村指定文化財）等が残されており、文化的な生活が営まっていたと考えられます。

明治八年（一八八五）、六ヶ村が集まつて南箕輪村が出来た時、南殿村は「南殿耕地」になり、大正三年（一九一四）区制施行で「南殿区」となり、今日に至っています。

南箕輪村が出来て以来、村の中心に位置する南殿には村の公共施設がだんだん出来ました。それに連れて人々が集まり、集落が北へ・西へ・下段へと広がっていきました。住宅・人口が今も増え続けています。明治八年に三九戸・人口二四七人だった南殿区は、平成三〇年一月には四一五世帯・人口一二二〇人になっています。

二 神社

（一）殿村八幡宮

南箕輪村役場の南の森が境内です。

祭神 忠神天皇

由緒

全国の八幡宮一〇九座に含まれる格式の高い八幡宮です。

江戸時代、南殿村は幕府領（天領）と旗本領（私領）・太田氏に分かれたり、また一緒になつたりして村としていろいろな苦労があつたようです。江戸時代の古地図を見ると集落は、大泉川左岸寄りに伊那街道を挟んで東西に広がつており、

（二）（一説には、寛文二年（一六六二）とも言う）につき分かれたと伝わります。

江戸時代、南殿村は幕府領（天領）と旗本領（私領）・太田

氏に分かれたり、また一緒になつたりして村としていろいろな苦労があつたようです。江戸時代の古地図を見ると集落

は、大泉川左岸寄りに伊那街道を挟んで東西に広がつております。

伝承によりますと、平安時代に源満仲が勅命を受けて、戸隠の逆徒征討に来た時、逆徒の勢いが強く平定するのに苦しみました。そこで岩清水八幡宮に神助を祈願し、ようやく平定することができました。満仲は凱旋の途次この地を通り、景勝の地であったので、この地に八幡宮を勧請し、弓矢を奉納して八幡神にお礼をしたと言います。時に承平二年（九三二）のことだったそうです。



殿村八幡宮社殿



殿村八幡宮社叢

その後、靈験あらたかな

神社というこ
とで、領主た

ちに尊崇されきました。文治元年（一一八五）には信濃の國の守護・小笠原長清が田を寄進、箕輪郷の領主藤沢頼親は武器を奉納し社殿の修理を行い、武田信玄は天文二三年（一五五四）伊那郡を攻略できた事を謝し七貫二百文の土地を奉納、木曾義昌も天正二一年（一五八三）に五貫文の土地を寄進したと伝わります。その後も小笠原秀政、朝日受永などから寄進を受けています。江戸時代に入り、朱印地になり、三代將軍家光以後の朱印状が九通、社宝として残されています。（村指定文化財）

明治五年（一八七二）に村社になり、朱印地奉還により通い減録金を交付されるようになりました。明治九年、長野県第一回神饌幣帛料共進指定神社となり、昭和三年（一九二八）郷社となりました。



殿村八幡宮朱印状

明治二二年（一八八九）火災により社殿が焼失してしまいましたが、明治二六年新たに造営されました。昭和五七年（一九八二）には社務所を改築しました。

鳥居は控え柱を持つ両部鳥居で、傍らにある御手洗は、明治七年有賀光彦の寄進によるものです。数十段の石段を上ると、左側に元禄三年（一六九〇）奉納の御手洗があり、社殿の前には、享保三年（一七一八）をはじめとする三対と四基の奉納された灯籠があります。

拝殿は入母屋造り、正面向背は唐破風造りで、屋根は銅板葺きです。擬宝珠つきの上り高欄のついた階段の上は、正面及び側面には擬宝珠つきの高欄のついた階段を巡らし、正面は格子戸、側面は横板壁です。虹梁様頭貫の木鼻は、単純な雲形で組み物は三ツ斗の変わりものです。

本殿は切妻流れ向背造りで、棟の両端に千木を置き、五本の鰹木を乗せ鬼板を付けています。正面は板戸で、三方は横板張り、軒支輪の三段はていねいな造りで、組物は三手先の変形、向背柱は左右へ二手出る組み方をしています。蛙股もていねいに造られています。虹梁はつなぎ虹梁になっています。

社殿は森林に覆われ、参道が長く続き、高い石段の上にあつて莊厳な感じがします。御神木の大杉は、樹齢数百年と推定され、参道の松は古い木は樹齢四〇〇年を超え

ると思われます。松の古木もたくさんありましたが、マツクイムシの被害を受け、多くの木が伐られてしまいました。家に開まれた中にある森で、しかも大木が林立している景観は、独特な雰囲気を醸し出しています。そのすばらしい景観から、村の天然記念物に指定されました。

(二) 神明宮

八幡宮の南に隣接してあります。（境内社）

祭神 天照皇大神

(三) 三峯神社

八幡宮本殿の南、境内の森に隣接してあります。

祭神 伊弉諾の神・伊弉冉の神

由緒

明治一〇年（一八七七）前後頃、南殿に放火と思われるものも含め火災が頻発しました。そこで、地区の人々は話し合って明治二〇年頃、火災対策に監修あらたかな三峯の神様を迎えたことにしました。そし



三峯神社

て建てられたのが三峯社です。

神主として、神道実行教伊那協会から下伊那の林岩志郎を招いて、教会を開き祭司としました。この岩志郎は、占いも行つたため、農作の豊凶・失せ物・病気などの占いを求める人々が、近隣からたくさん訪れたと伝わります。

祭日は四月一八日で、かつては隣接している北側の公園の桜の花見を兼ねて多くの人々が集まつたそうです。現在は、四月の中旬の日曜日を例祭日として祭事が行われています。その時は、区内の各戸に御札が配られます。

1 合祀社

山の神社（祭神一大山住神）他三二柱の神様が合祀されています。

山の神社は農協の低温倉庫の西に祠がありましたが、昭和四九年（一九七四）に合祀されました。

2 境内社

御嶽大神（石碑）

祭神 国常立尊、大己貴命、少彦名命

由緒

大正八年（一九一九）九月五日、南殿区の有志者が大泉白木屋の御嶽行者を先達として木曾の御嶽山に登拝しました。

その後、毎年替わり番にて四、五人ずつ登拝を続けていました。やがて、以前大峰講が閉講になつた時、講員が分け合つ

て保管していた祭具を持ち寄つて、講を結ぶことになり、南殿御嶽講ができました。

先達は山崎寿恵吉・鹿角辰次郎・有賀善重でした。太平

洋戦争中は、行者堂を借りて行や祭事をしていました。昭和二五年（一九五〇）四月、この碑を建立しました。そして、

八月一六日に例祭を行い、平成の初め頃まで続いていました。（現在は講は解散し、祭具は郷土館にあります。）

2 塩釜神社・青苧神社（石碑）

祭神

塩釜神社 塩の神、安産の神

青苧神社 三光神（天照大御神・月読神・天之御中主神）、

麻の生育の神、中風
防止の神

由緒

両社とも詳らかで

はありません。



三峯社境内にある
塩竈・青苧社碑



三峯社境内にある
御嶽大神碑

三 堂庵

(一) 行者堂（龍麟閣）跡

行者坂中ほどの北側に跡が残っています。

本尊 （えふぞん）
役行者 （えきぎょうしゃ）



行者堂にあった役行者像

記されています。

明和四年は一七六七年です。

由緒

宝暦年間（一七五〇～一七六三）、南殿村の有賀兵右衛門の分家で、隠居していた新左衛門が重い病気につき、医療に手を尽くしましたが効果がありませんでした。そこで、諸國の神社仏閣の加護を願い、兵右衛門・重左衛門の二人で巡

（二）地蔵庵（円明庵とも言われた）跡

殿村八幡宮の南の庚申塚の辻を東へ一〇〇歩ほど行った所の南側にありました。現在は石仏しか残っていません。

石仏群

塔、庵主石塔（三基）、他八基の石仏

拝の旅に出ました。大峰山へ参拝した時、山中の脅わいも盛んで、参拝の待遇も大変良かつたので感激し、御利益があるに違いないと考えて大峰講を結ぶことを思い立つて帰宅しました。そして、講をつくり、大峰山への参拝を続けました。講を結んでから約一〇年後の明和四年、村の鬼門（北東）といわれる場所に堂を建て、役行者を勧請し祀ることにしました。信者も増えて行き、他村からも参加するようになって行きました。昭和に入り（一九二六年）講に参加する人が減つて行き、やがて閉講されました。

行者堂の参道には、石の鳥居が建てられ、「心靈本覚」両部習合（リョウルイハク）と刻まれていました。堂には「龍麟閣」と書かれた偏額が掲げられていました。現在は堂は倒壊し、鳥居も倒れて朽ちてしましました。講が盛んだった頃は、境内に滝が造られ水垢離（みずこり）の行が行われていたそうです。また、代参の者が帰ると、盛大な祭りが行わされたと伝わります。

役行者像と祭具、堂の偏額は郷土館にあります。

庵の創建年代は不明ですが、元禄年間（一六八〇—一七〇三）に、個人の庵であつたものを金左衛門が南殿村へ差し出しましたと伝わります。

天明五年（一七八五）

三月一六日に念仏百万遍が行われ、天保一四年（一八四三）には嶺頭院（りょうとういん）方丈が来て、三〇人余の尼僧が集まつて大乗經一千部の読経が行われた記録が残つております。江戸時代にはこの庵を使っての行事が盛んに行われていたことが伺えます。



地蔵庵跡の石仏

のと思われます。彫りがはつきりしており、三十三体そろつた石仏群で、村の指定文化財です。石工、制作年代などは不明です。

由緒は、南殿村の屋号大國やが地蔵庵に寄進したものと伝わります。

明治六年に地蔵庵が廃庵になつた時、最初の持ち主に返されたので、大國やでは自分の墓地脇に安置したと伝わります。

（三）十王堂跡



西国三十三所観音石仏

庵は、文化八年（一八一三）に改築され、明治三年（一八七〇）庵主・惠照尼の記録が残っています。明治六年、一切が競売に付されて廃庵となりました。

三十三所観音石仏

南殿の農業協同組合倉庫の北側にあります。もとは、地蔵庵の所にあつたものを移したと伝わります。

石仏は、西国三十三所観音霊場の本尊を模して造られたもの

地蔵庵跡より五〇mほど東に、大きなカヤの木が生えていました。その東側の所に、十王堂が明治末期までありました。由緒など不明ですが、当時を知る人は、木像の恐ろしい形相をした十王が並んでいたと言っています。

明治末期頃、十王堂近くの家に不幸が続き、その家の方から取り壊しを懇願され、焼却されたそうです。十王はどうなつたかは不明です。

四 南殿学校跡

地蔵庵の北側、字宮ノ下にあつたそうですが、今は何も残つていません。

明治六年（一八七三）、第一一〇番小学区第一〇一番学校

として発足したときは、「大成学校」といいました。当時の児童数は三〇人ほどでした。明治九年には南殿学校と改称されました。明治一年、南箕輪学校が字桜ヶ丘に設立されることになり、南殿・北殿・大泉・久保の四校は統合されてそこに学ぶことになりました。

五 遺跡・古跡

(一) 宮ノ上遺跡

八幡宮西一帯の遺跡ですが、昔から畠耕作の折、石器や土器が出土し、遺跡地であることはわかつていていましたが、計画的な調査をしたことありません。したがって、遺跡の



宮ノ上遺跡標柱

規模・内容の詳細はわかつていません。大正一五年（一九二六）に出版された『先史及原史時代の上伊那』には、大遺跡地として載っています。
集められた出土品は、畠の耕作・開田作業の際出土したもので、縄文期の石器・土器が一番多く、土師器・須恵器も見られます。

藏骨器 村指定文化財（由来）の写真参照

平成元年、農協低温倉庫の西南の畠の中から、平安時代中期（一〇〇〇年ほど前）の壺が農作業中に発掘されました。きちんととした石組みの中に納められた壺で、中に中年女性の焼骨一人分が入っていました。傷のない完形品で、「灰釉陶器短頸壺」と呼ばれる壺で、九世紀後半頃、東濃（岐阜県東部）で造られた見事なものです。郷土館に展示されています。

(二) 有賀の城

国道一五三号線の役場入口から東へ一五〇mほど行ったあたりの天竜川河岸段丘突端にあります。天竜川段丘崖上、大泉川左岸段丘東端に位置し、久保の棚木城跡・北殿の倉田の城跡と同じような地形をしています。

北側にある道路が空堀跡と思われ、南側には石壁跡と思われる自然石の石垣が残されています。西に大手があつたと推測されますが、ここに入る道路がかぎの手のようになつているのも往時の名残かもしれません。『長野県町村誌』（資料の

項目参考)によると、「東西二十間、南北三十五間余、今に城濠巖垣開壁を遺す」とあり、明治の頃には城の遺構が残っていたようです。有賀氏がいつからこの地に居住していたかは詳らかではありませんが、地方武士として、始め小笠原氏に属していましたが、武田氏との戦いの後、民間に降つて今日に至つていると伝わっています。

大宗館文庫 村指定文化財

有賀の城の末裔有賀氏は、城跡に住み続けていますが、戸時代から明治にかけての古文書類をたくさん保持していました。内容は、村方文書類・和漢の古書・著名人の書画・錦絵などで、四五〇〇点を越えます。平成に入つて、これらが村へ寄贈されましたので、貴重なものとして郷土館で保管・展示しています。

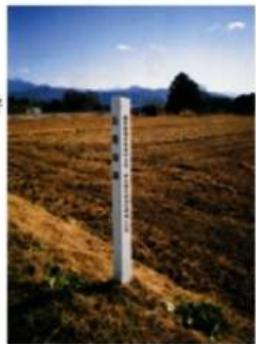


有賀家にあった当時の大宗館文庫

項目参考)によると、「東西二十間、南北三十五間余、今に城濠巖垣開壁を遺す」とあり、明治の頃には城の遺構が残つていたようです。有賀氏がいつからこの地に居住していたかは詳らかではありませんが、地方武士として、始め小笠原氏に属していましたが、武田氏との戦いの後、民間に降つて今日に至つていると伝わっています。

(三) 長慶塚跡

役場の南の道を西に上つていくと、左側に墓地が見えてくる手前に、塚のことを記した標柱が立っています。かつてこの塚は中央霊園の北にありました。大きな塚があり、周囲に樹木が生い茂つていたそうです。里人が午睡しようとしても落ちつけなくて誰も寝ることができなかつたと言ひ伝えられています。



長慶塚標柱

箕輪城主藤沢頼親が築いた塚であると伝わっています。天文一四年(一五四五)、頼親が武田信玄と戦つた後、小笠原氏と共に三好長慶を頼つて京都へいきました。(当時長慶は権力者として京都で勢力を張つていました。)そして、長慶から厚遇を受けました。後、三好氏が滅びた時、頼親はかつての長慶から受けた恩を思い出し、ここに塚を築き、長慶の靈を供養したと伝えられています。この辺一帯の地名を長慶塚と呼んでいます。

(四) 不死清水

美坂の下、かつての伊那街道沿いに豊富な清水が湧き出しています。この清水は、昔から地区の人々の生活用水・農業

用水として使われて来ました。また、名水として大事にされて来ました。次のような話が残されています。

一つは、旅の長者を生き返えさせた名水として、伝説となっています。(『みんなみみのわのむかしばなし』参考のこと)

もう一つは、明治一八年(一八七八)からこの水で

鮭の養殖が試みられたことです。新時代の産業として、鮭の天竜川放流・遡上を夢見た村人たちが、養殖池を作るための水を調べた時、ここのが最適と評価され、事業が始められました。しかし、成功はしませんでした。

今でもこの水でお茶を入れると格別うまいと水を汲みにくる人がいます。

(五) 松根油採取松

役場東の道路沿いに一本だけ残っています。

太平洋戦争の名残です。昭和十九年(一九四四)、戦争末期になり、日本では飛行機や船を動かす燃料が足りなくなつてきました。その対策として松根油を採取して動力油をつく



道路敷設前の湧水出口(不死清水)

ることを考えたのです。全
国へ指令が出
て、南箕輪村
でも松根油の

採取をしまし
た。松の皮を
剥ぎ、幹に傷

をつけて、そこから出てくる樹脂を集めています。
何本かありましたが、一本だけ残っています。

(六) 猪ノ子柴

中央霊園の上から大泉川の右岸を見ると、松の木が二、三本見えます。この辺から西の春日街道へかけての一帯を猪ノ子柴と呼んでいました。

昔、ここに猪が群棲していた、子育てなどをし、民害もしばしばあつたと伝わっています。



現在の猪ノ子柴一帯



松根油採取の松

(七) 同盟田跡（場所は地図参照）

水田が少なかった大正時代（一九一二～一九二六）に、自作水田が少ない南殿区民が参加して同盟田組織を立ち上げました。この組織は同盟会とも呼ばれ、天童川の河川敷に約三〇アールの水田（同盟田）を開墾して会員が全員で耕作し、収穫した米を役場入口信号機付近の倉庫に積んで貯蔵していました。

会員が新米の収穫前に飯米が不足すると同盟会の倉庫から米を借り、新米が収穫できた時に返す仕組みになっていました。なお余った米は売却して会の運営費にあてました。

会員の水田が増え、米を借りる必要が無くなると同盟会は自然消滅し、その後、同盟田は南殿財産区の管理地となり、現在は村が残土置場に使用しています。

六 碑

(一) 迪斎先生筆塚

農業協同組合倉庫の北、国道東の小高い丘（桜丘）に建てられています。

碑面 題額の「迪斎先生筆塚之碑」は高津柏樹の書です。

迪斎の人となり、子弟教育の功績を述べた碑文は木曾福島代

官、山村氏

学問所の学

頭、武居用

拙（一八一

六～一八九

二）の文で、

小島雲溪の

書です。

漢文で書

かれている内容の概略は次のようです。

迪斎は号で本名は光敏といい、享和二年（一八〇二）南殿村の有賀家（中東）に生まれ、諱訪の武井見龍に学問を学び、漢学・国学に通じ詩作もしました。また書道も得意であつたので弟子は数百人に及びました。家業（農業）にも熱心で、幕府に献金をするほど財産を増やし、明治元年（一八六八）死亡しました。

碑陰 没後に門弟が相談して明治二七年（一八九四）に

遺愛の筆を埋めて、この碑を建てたことが記されています。また迪斎遺吟として漢詩一つ、和歌二つが記されています。

(二) 南殿の里六人一首の寿碑

行者跡地にあり、安政六年（一八五九）に建てられ、碑面には南殿の清水徳光の書にて六人の和歌が書かれています。



迪斎先生筆塚

迪齋母大槻みし子 時年八十二才

ながらへて齡のか須も嬉しきに君が恵みをかさねつるか那々

織部清水政守

時年六十四才

いつしかもいはたのをの月影にぬれて吹良ん秋のはつ風

千早振松のを山能神垣にかはらぬ春の花も咲きけ流。

小文治有賀其奥 時年五十九才

竜川を月もわたりて筏船こきゆくかみに千鳥なくなり

迪齋有賀光敏

時年五十九才

多なひける霞のな可をこえゆかむ名こそその闇の花の盛りに

重左工門清水光康 時年五十一才

世の中のうつるならひもさく花は昔の春の匂ひこそすれ



六人一首碑

(三) 靈松一本木遺祉碑

南箕輪小学校

プールより五〇

ト南、通学道路

の東にあります。

碑面には諏訪神

社宮司高階健一

の書による「靈

松一本木遺址」

の文字が刻まれ

ています。碑陰

には清水政明の

書いた靈松に關

する記事が刻ま

れています。

それによると、

この松は高さ二

七・五メートル

、周囲約四・五

メートルの大木で、その偉容は遠くからも見る

ことができました。長野県の天然記念物に指定された古木で

したが、昭和九年（一九三四年）九月二一日の台風で倒木しま

した。この松の存在を後世に残す為に昭和一年九月二一日



靈松一本木の碑



かつての靈松一本木

天然記念物だった松は、古来靈松として近隣の人々や旅人

からも嘆賞されていました。また伝説では、切ると赤い血を

流すとか、かつては夫婦松であつたとも言われています。二

代目の松が立っていましたが、平成三十年伐採されました。

(四) 慰靈碑

村公民館の南庭に建てられています。碑面には「慰靈碑」

「諏訪大神宮司
三輪磐根謹書」

の文字が彫られ

ています。碑陰

には南箕輪村出

身の日清戦争以

降太平洋戦争迄

の戦没者（五九

名）、義勇軍並びに開拓引揚げ物故者（四九名）、公務殉職者

（二六名）名が刻まれています。

この石碑は昭和四四年（一九六九）四月に南箕輪村慰靈碑

建立委員会が建立しました。

(五) 母子像

南箕輪小学校玄関前にあるブロンズ像で「いづみ」という

作品名が付けられています。小学校では新校舎を建設して以

来、情操教育のため環境整備に努めました。庭園、理科池等

が次第に整備さ

れましたが、更

に芸術的氣品の

高い物を欲しい

との声が掲がり、

村の予算と、村

民からの一般

寄付により瀬戸団治氏に制作を依頼してブロンズ像を制作

し、昭和四〇年（一九六五）二月一三日に除幕式を行いました。

制作の費用は五〇万円でした。

(六) 南箕輪小学校校歌碑

昭和四八年度（一九七

三〇七四）卒業生から寄

贈された物で、小学校玄

関前にあります。

作詞者の青山棟三郎に

ついては、田畠の「青山

棟三郎歌碑」の項を参照

してください。

作曲者の井上武士は、

明治二七年に群馬県に生

まれ、東京音楽学校甲種



校歌碑



母子像



慰靈碑

師範科を卒業し音楽教育者の育成に専念した人で、長野師範の教諭も務めたことがあります。音楽創作指導には特に力を注ぎました。

校歌は右の両氏に依頼して昭和二十五年（一九五〇）九月一日に制定されました。

五百日に制定されました。

（七）南箕輪小学校開校記念碑他

南箕輪小学校の入口に建ててあります。

1 南箕輪小学校の開校



開校記念碑

新築落成し、一二月一日「第六大学区第一九中学区南箕輪学校」の標札をあげて実際に開校しました。

碑面 南箕輪小学校開校 明治十一年

碑陰 昭和五八年卒業生一同 題字飯澤孝良書

2 奉安殿・忠魂碑・二宮尊徳像など

太平洋戦争中、小学校校庭に奉安殿・忠魂碑・二宮尊徳像などが建っていました。これらは太平洋戦争にかかる遺物



「写真で見る南殿」よりコピー

昭和11年小学校校庭（右に奉安殿、左に忠魂碑）

とで、アメリカの進駐軍などの指導もあり、だんだんに撤去されていきました。

奉安殿といふのは、御真影（天皇御夫妻の写真）・教育勅語（謄本）などを安置する建

物で、南箕輪村では大正一四年（一九二五）に

○坪を借りることが出来、明治二年一〇月

建てられました。

忠魂碑は戦死者の靈を称える碑であり、二宮尊徳像は刻苦勉励して世のために尽くした尊徳翁を見習うための像です。

現在立っている二宮尊徳像は、昭和五九年（一九八四）の卒業生の卒業記念品です。

（八）庚申塚の碑

三峯神社の東道路沿いにあります。以前は字上道・庚申塚の桜の古木の南にありましたが、道路改良工事に伴い現在地にうつされました。

1 庚申塔

（1）庚申供養 享保一七年
（二七三三）

（2）庚申
元文五年

（3）庚申
（一七八四）

（4）庚申
寛政二年
（一八〇〇）

（5）庚申
安政七年
（一八六〇）

（6）庚申
大正九年
（一九二〇）

（7）庚申
昭和五五年
（一九八〇）



八幡宮南の庚申塚

2 甲子塔

元治元年（一八六四）

甲子 大正一三年（一九二四）

甲子 昭和五九年（一九八四）

3 その他

（1）十一面觀音像 享和四年（一八〇四）

甲子の年に建てられている事から甲子講と関係があると思われます。

（2）馬頭觀世音文字碑

南面 南殿村田畠村山寺村羽広村御子柴村塙ノ井村

沢尻村御園村北殿村

北面 嘉永三庚戌年一月吉日桑嶋馬医山崎政八建

世話人 山崎清七 清水彦兵工 石工 有賀伝藏

有賀善次郎

閑童が書いた正面の「馬頭觀世音」と南面、北面の達筆の文字が青石に鋭く彫られています。造立年は嘉永三年（一八五〇）です。

（3）蚕玉大明神碑 安政七年（一八六〇）

（4）道祖神 天保五年（一八三四）

（5）南無大勢至菩薩碑

（6）金毘羅大神・秋葉大神碑

明治二十五年（一八九二）一〇月一〇日勧請

(7) 廿三夜塔 安政二年(一八五五)

(8) その他

馬頭観音像二体、馬頭観音文字塔二六基、如意輪観音一体、地蔵尊二体

七 用水

南殿地区の人々は、湧水及び横井戸水と川からの井堰水で生活していました。

(一) 川からの引水

1 天竜川から(大河原井)

北殿橋(天竜橋)の下流二〇〇㍍くらいの所から取水しています。天竜川の瀬に牛栓を入れて沈床を作つて水を揚げ、くろ川の流れの上は木製の樋で流し、高い土手は暗渠にして流していました。この井筋は途中から三つに分かれ、約一五㍍の水田用水として使われていました。

天竜川の氾濫で井堰が壊れた時は、くろ川の水を利用していたようです。

2 大泉川から

大泉川から取水した井堰は、三つあります。国道西に二筋・国道東に一筋です。

昔から使われ、元禄年間(一六八八~一七〇三)には、この水を生活用水として、また水田用水として約一五㌶の田に使用していました。

(二) 湧水

南殿地区には、天竜川河岸段丘の突端へ出てくる湧水と、大泉川河岸段丘屋に出てくる湧水とがあります。天竜川河岸段

丘下は湿地ですので、古来段丘上に住む人々は、大泉川段丘崖に出てくる湧水を利用していました。それが中央水路とよばれる水路で、この水を集め落内に回して利用していました。

中央水路の水源は、宮ノ上遺跡南の段丘下字清水から出ている湧水です。この湧水は水量豊富で、地区の人々の生活用水、水田用水として利用されて来ました。

水路は、水源東二〇〇㍍くらいで分流し、段丘上へ行くのとそのまま東へ行くのになります。東へ行く水路は南田水路と呼ばれ、途中で「不死清水」(湧水)の水と合流し、JR飯田線の東でくろ川に流れ込みます。



大泉川よりの取水口

分流のもう一つの水路は、庚申塚の東で東に折れ、十王堂跡の西で二筋に分かれます。一つは北に向かい八十二銀行南箕輪支店の東辺りでまた東に向かいます。もう一つはそのまま東へ向かいます。そして二水路とも国道一五二号線をくぐって、やがて下段のくろ川へ流れ込みます。

中央水路の水源の水は、昭和三年（一九五六年）南殿簡易水道が出来る時、その水源として段丘上にポンプアップし、使われました。

天竜川段丘下へ落ちる豊かな湧水は、養魚（ニジマス）水として、またワサビの養水としても盛んに使われましたが、現在は減少してきています。

（三）横井戸

1 八幡入横井戸

役場駐車場への入り口西に水路が見えるのが、横井戸の出入口です。役場駐車場の東へ流れ、豊かな水を北東へ運んでいます。

横井掘削工事は明治二六年（一八九三）に着工し、二七年に開田工事を始め、三〇年には一部水稻の作付をし、三二年約四石の開田が完了し、三三年に工事すべてが終了しました。横井工事請負費（水代金という）は一〇アール当たり四八円でした。なお当時の作業者の賃金は一日につき三五銭前後でした。

昭和三四年（一九五九）より横井は開田地主の經營となり、三五年には水量増加の為、北の方向に支線一四〇メートルを掘削し、これにより本支線合わせて約六〇〇メートルとなりました。その後、地主の交代もあり開田者一四名、開田面積は約五七ヘクタリになりました。

横井記念碑

役場駐車場東の道路脇に建っています。これが八幡入り横井戸の記念碑です。

碑面 題額—御井神

（碑文は漢文なので要点を略述する）

農業の本は水である。南殿は崖の上で水が無い。明治二六年（一八九三）に横井戸を掘つて灌溉用水を得ようとした。しかし、ここは御料林（皇室の山林）なので許可を得るのに苦労した。三〇〇間余掘つてようやく湧水を得ることができた。



八幡入横井戸碑

開田は五町歩余り、関係者は一〇数軒。喜ばしいことである。

大正四年（一九一五）五月

碑陰 起業者 一一名

開田者 一四名

た。祖先の想いを便びここに碑を建立する。今は西天竜の水を使つた、立派な水田が出来てゐる。

碑陰 平成二年七月吉日

山崎清房

長慶塚から西へ五〇筋くらい行つた大泉川段丘下に水の出
口があります。かつては水量も結構あつたようですが、現在
は少量の水しか流れていません。

記念碑

碑面

題額 御井神

碑文 祖父山崎清直は、宮の上畠を開田して食料米の確保
をすべく、水を求めて大正四・五年にこの地に横井戸を掘つ



上河原の横井戸碑と水口

八 公共施設等

(一) 南箕輪村役場

明治八年（一八七五）に村が誕生した時、最初の事務は北殿に事務所が設けられました。その後、民家を借りて、役場庁舎としてそのまま使つていました。

明治三五年（一九〇二）、前年小学校校舎落成を受け、分教場を改造して役場庁舎を建造しました。しかし、



最初の南箕輪村役場庁舎

業務が増えるに従い狭く不便になつていきました。

昭和八年（一九三三）、現在のJA上伊那南箕輪支所の所へ新しい庁舎を建てました。

木造二階建ての庁舎でした。
昭和五六年（一九八一）現在の庁舎が出来ました。

（二）南箕輪農業協同組合

南箕輪村に産業組合が出来たのは、明治三八年（一九〇五）大泉の「有限責任大泉購買組合」が最初でした。その後大正一〇年（一九二一）に「有限責任南箕輪村信用販売購買組合」が設立されました。しかし、販売事業は振るわず、大正一四年には、販売事業はやめることになりました。

大正末から昭和初めにかけての農村恐慌は激しく、国や村でも産業組合の再建に力を入れ始め、昭和七年に「保証責任南箕輪村信用販売購買利用組合」となり農村再建の目処が



昭和8年に建てた旧役場

たつてきました。

太平洋戦争が始まると、食料増産が農村の最大使命となり、南箕輪村も農会・産業組合・養蚕組合が統合して、昭和一九年（一九四五）太洋戦争が終ると、昭和二二年農業協同組合法が公布され、官制ではない自主独立の農民の組合を造るべく、農業会を解散し、二三年には「南箕輪農業協同組合」が設立されました。農民の経済的・社会的地位の向上を図るのを目的としました。

昭和二〇年（一九四五年）太洋戦争が終ると、昭和二二年農業協同組合法が公布され、官制ではない自主独立の農民の組合を造るべく、農業会を解散し、二三年には「南箕輪農業協同組合」が設立されました。農民の経済的・社会的地位の向上を図るのを目的としました。



現在の前の南箕輪農業協同組合の建物

昭和四七年（一九七二）八農協が合併し伊那農業協同組合

南箕輪支所となり、平成八年に五農協が合併して上伊那農業協同組合（JA上伊那）南箕輪支所が発足し現在に至っています。

（三）村診療所

南殿信号機東一〇〇

丁位の道路北の建物が以前は村診療所でした。

昭和一一年（一九三

六）「村診療所」が開所し、同三年九月二十五日には「南箕輪村立国保診療所」となりました。



旧診療所（現在は個人の家）

昭和二七年四月一日、嘱託医師が辞任し、後任者が無く診療所を休止しました。その後、

診療所の施設は大泉の原千秋医師が借りて診療を続けていましたが、昭和四六年に同医師が診療を休止し昭和五六年（一九八二）診療所は廃止されました。

（四）駐在所

南箕輪に駐在所が設けられたのは明治三八年（一九〇五）のことでした。

昭和一二年（一九三七）に南殿信号機東二〇丁位の道路北に駐在所の建物が落成し、一人の駐在所員により駐在所業務が行われていました。昭和三年より「南箕輪村巡査駐在所」と呼ばれるようになり、同二九年に「南箕輪村警察官駐在所」と改称されました。

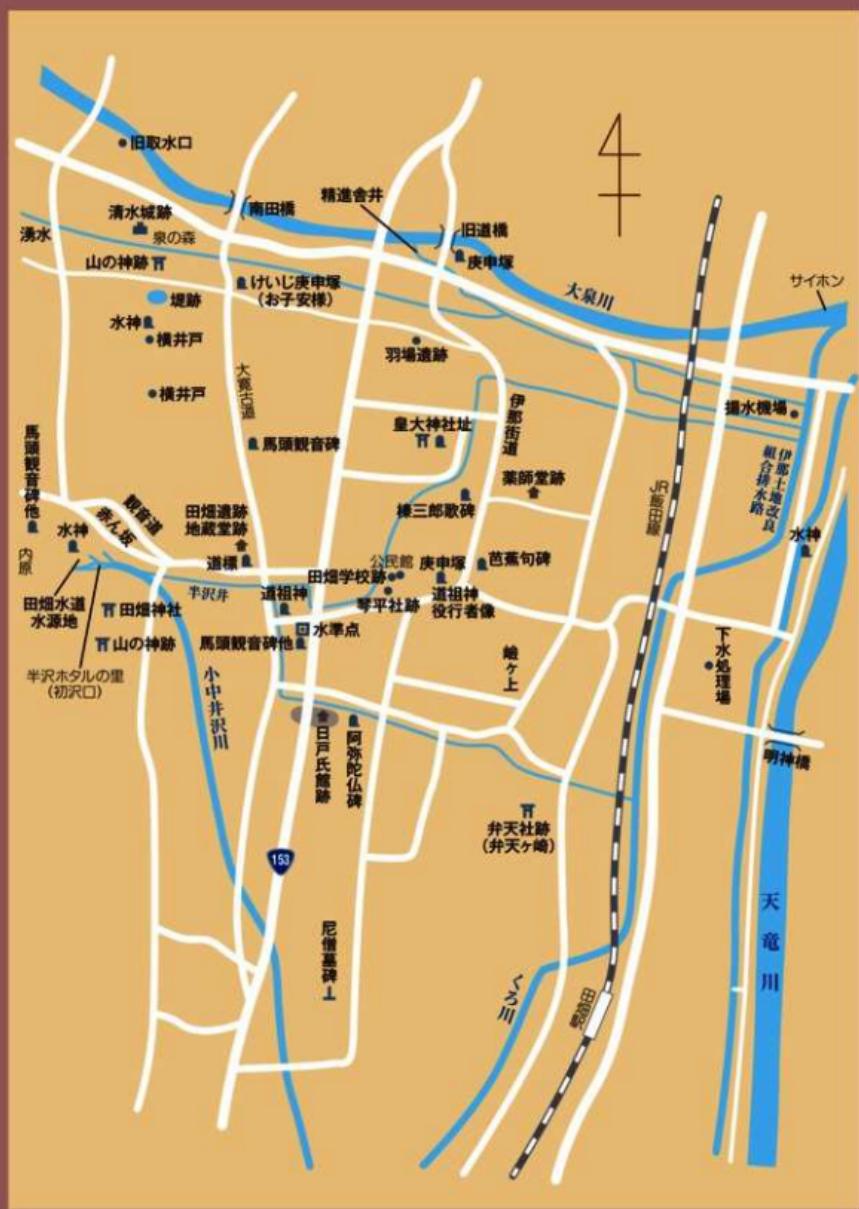
昭和五五年、人口と交通量の増加に対応できるように駐在員三名の勤務となり、昭和五七年（一九八二）現在の場所に新築移転しました。



現在の駐在所

第六 畑

4+



一 田畠の由来

区内のあちこちから繩文土器片や黒曜石の鐵などが採集されているところから、古くから人々の生活があつた所だと推定されます。田畠神社の付近に御射山社の通拝所があり、その近くに田畠神社が建てられたと言い伝えられており、中世（鎌倉時代～戦国時代）には集落が形成されました。

地区名の「田畠」は、「長野県町村誌」には「田畠古ヘ田畠、中古田畠村とす」、「建御名方富命及び群臣へ餉を献せし地なり」とあり、昔から田畠が広がり、農耕が盛んな土地であることが想像されます。

天竜川河岸第一段丘上に中心集落が造られましたが、北に大泉川が流れ、その川を越えるのに二か所が選ばれ（南田橋と旧道橋）、集落の中を一本の街道が通りました。そして、田畠信号機の西二〇番くらいの所で合流して神子柴方面へ進みました。西側の街道周辺から南方面を南割、東側街道周辺を北割と呼び、かつては（江戸時代以後）神社を別々に祀り、区別する風潮もありましたが、現在は神社も一つになり、北割・南割と言つても分からぬ人が多くなりました。

集落の南は神子柴ですが、かつては小中井沢川西南は神子柴地区でした。半沢の湧水を両地区で利用していました。そ

の分かれ目が小中井沢川だつたのです。

かつての集落は、天竜川第一河岸段丘上にまとまつていましたが、科学技術の進歩によって堅固な堤防ができ、安全な排水工事がなされ、かつて川の氾濫原・湿地だつた所に生活ができるようになり、また、原野だつた水の無い扇状地上も水が行き渡り、集落が大きく広がりました。そして、昭和後半から戸数・人口も急激に増えました。明治八年（一八七五）南箕輪村に合併した時、七三戸・四〇三人だった田畠地区は、平成三〇年には八一六世帯・三二一四人となりました。

地区的景観も大きく変わり、田畠が散在していく家の裏へ行けば畠があつたのが、今は家が立ち並んでいます。また、湿地だつた下段天竜川沿いの地区は、企業・公共施設・住宅で埋まっています。そして西天地区へも住宅が広がりつつあります。

二 社寺等

(一) 田畠神社

西方第二段丘下、半沢湧水の南、字前宮原七〇一三番地にあります。

祭神

あさひみなかわのひここと
建御名方命（南割地区の神社・諏訪大明神社の祭神）
天照皇大神（北割地区的神社・神明宮の祭神）

由緒

昭和二三年（一九四八）三月、両社氏子の総意に基づいて、字神明にあつた神明宮を前宮原の諏訪大明神社に合祀して、社名を田畠神社と改称しました。昭和二八年二月に宗教法人田畠神社となり、田畠地区全体の氏神社として現在に至っています。

田畠神社は、本殿（一間社流れ造り）と拝殿が覆屋の中に



田畠神社 鳥居・手水場・制札



田畠神社 舞台

入っている造りで、他に宝蔵・舞台・社務所・水屋があります。舞台は村内に唯一残っているものです。鳥居は両部鳥居で、平成八年に建て替えられました。鳥居の右前にある看板は、明治の初めに建てられた「禁制札」で、日本語と英語で書いてあります。これも村内ただ一つ残っているものです。境内に三対の献灯（石灯籠）がありますが、最も古いものは宝暦二年（一七五六）のものです。



神明宮跡に建つ碑

1 諏訪大明神社

『長野県町村誌』によると、前宮大明神といい、

大山田神社の憩屋の神事（御射山神事）の遙拝所でした。社領（五反歩）より神饌（供物）を供していましたが、天正年間（一五七三～一五九一）の兵乱により神領を没せられ、それ以後は廃絶したと書かれています。大山田神社は延喜式（平安時代の書）に載っている古大社ですが、どこにあつたかについては諸説あつてはつきりしません。

明治五年（一八七二）に村社となり、明治四五年

に神饌幣帛共進指定社となりました。昭和二三年（一九四八）まで南割地区的氏神社として尊崇をうけてきました。

2 神明宮跡

字神明の地の社地が児童公園と変わり、そこに「皇大神社址」の碑が建っています。神社は西側にあり、東から参道があり、社殿は杉などの大木に囲まれています。

神明宮は、元禄四年（一六九一）に北割地区一七戸の鎮守社として勧請されました。享保二年（一七三六）に再建され、明治五年（一八七二）に村社となりました。北割地区的氏神社として祭事などを行われてきましたが、昭和二三年（一九四八）南割地区の鎮守社「諏訪大明神社」と合祀することになり、社殿を無くし諏訪大明神社社殿に移りました。そして、田畠神社と改称され現在に至っています。

3 境内社

本殿の南北に祀られています。

(1)弁財天社 昭和二三年、弁天ヶ崎より遷座

(2)嚴島社 昭和二三年、田畠公民館周辺の金刀原（琴原）より遷座

(3)嚴島社

(4)御嶽社

(5)塩釜社

(6)居森殿

// //

- (7)秋葉社 //
(8)御鏡社 昭和二三年、金刀原より遷座
(9)蚕蠶社石碑 一二基 明治一年建立、明治一四年建立
(10)山の神 以前は二か所に祀られていました。北割地区的人々が山に入る入り口のけいじの庚申塚西一〇〇ほど行つた所に一社あり、南割地区的人々が山に入る入り口の田畠神社南に一社ありました。昭和の後半、一社にして現在地に遷座しました。平成になって社殿を新しくしました。

(11)天満宮 北割地区と南割地区に一社ずつあつたのを昭和二三年合



北割にあった社殿を移転した天満宮

殿は「神明宮」の社殿を移したものだと伝わります。

4 諏訪上社「御頭祭」と田畠・神子柴地区

諏訪神社上社の祭りに「御頭祭」と言つて一年の豊作・豊穣を祈願する祭りがあります。その祭りを仕切る頭屋が、一〇年に一度旧中州村（諏訪市）福島区に回ってきます。その時の祭りに昔から田畠・神子柴・御園・山寺の四地区が招待されます。江戸時代から現在まで続いています。

そのいわれは、次のように推察されます。

①昔、この四地区は諏訪の勢力下にあって諏訪大明神を信仰していた。それで、神社への奉仕や神饌物の農作物・狩猟物を奉納していた。

②いつの頃からか、四地区が福島村の枝郷（付属の地区）となつて、福島村の手伝いをするようになつた。それで、福島村に頭屋が回つてくると、祭りの奉仕がてら農産物や狩猟での捕獲物を持つて四地区の人々が参加した。

時代は変わりましたが、福島地区の人々が故事を大切に守り、今でもそれが続いています。

丁寧な招待を受けると、四地区的代表者がお祝い金を持て出掛けます。迎えられて、まず福島の氏神社（ミシャクジ社）へ参拝し、それから諏訪上社の「御頭祭」神事に参加します。



昭和9年(1934)御頭祭参加の四地区代表と福島の神社総代の人々ー背景は福島の御尺地社

(二) 堂跡

1 地蔵堂跡とお子安様

天和四年（一六八四）の古絵図に、現在の屋号・喜多側家の東南隅にお堂が描かれています。そこには昔地蔵堂があつたと伝わっています。また、けいじの庚申塚に子安觀音立像の石仏が建っていますが、もとは地蔵堂にあつたと伝わっています。この地蔵堂とお子安様については、次のような話が伝えられています。

安政年間（一八五四～一八六〇）にこの地蔵堂に老僧尼夫婦が住んでいました。子供も身寄りもなかつたので、死後は無縁仏になることを思い胸に石仏を建立しました。そして終生お産をする人々・道行く人々の無事安全を祈りながら暮らしました。子安觀音石像には、「一人の法号「釈大石開道」・「釈大鏡利貞」が刻まれています。また、次のような話も伝わっています。

この地に「おしおぶ」さんと言う人がいました。子どもを授かつたのですが、大変な難産で何日も苦しみ続けました。そのある日、夢枕にこの子安觀音石仏が現れ、「お産の手伝いをしたいが、我はうつ伏せに倒れてるので行かれない。我を起こして、火を灯し祈願すれば、必ず安産できる」と言いました。さつそくお告げの通りにしたら、間もなく元気な女の子が生まれました。「おしおぶ」さんは、觀音様に感謝を

し、自分も安産の手伝いをしようと考え、その後大勢の人の出産に尽くしました。

田畠婦人会（婦人会解散後は仏教婦人会）では、地区的人々の安産を願い、一二月の二十三夜様の日に、お産を待つてゐる女性を集め、子安觀音石像への参拝と僧の法話を聞く行事を行つてきました。（平成三〇年で終了）



最初地蔵堂にあった子安觀世音像

地蔵堂の建物は、明治になつて取り壊され、材は田畠学校の建築に使われました。また、地蔵堂周辺にはいくつかの石仏・石碑がありましたが、けいじの庚申塚と西天地区入り口字内原の区有地の隅に移されました。

地蔵堂に最後に住んでいた尼僧は、明治元年（一八六

八）に亡くなり、田島屋（木ノ島家）の墓地に葬られ、「仏參慈生尼油弥」の法号の墓碑が建てられて供養されています。

2 薬師堂跡

北割地区の東屋（松澤家）の南、下段へ下りる道端にあります（私有地）。記録がなくて詳細はよく分かりませんが、お堂に眼病を治すことが上手な僧が住んでいて、近郷から大勢の人々が治療に通つていたという話が残されています。

建物は明治の初めに壊されて、田畠学校の建築材に利用されたりと伝わります。跡地には、いくつかの墓石と石仏が残されています。



薬師堂跡に建つ正觀世音像

三 田畠学校跡

現在の田畠公民館の所、字金刀原（琴原）にありました。

明治五年（一八七二）の学制発布を受けて、明治六年筑摩県第十八中学区第百十二小学区の第百五番学校として設立さ

れました。

開校当時は養蒙学校といい、官立ではありませんでしたが、義務制ではなく、授業料を納めなければなりませんでした。修業年限や教育内容の詳細はよく分かりません。

養蒙学校時代の教師は土族出身の山崎就正という人で、象就学者六二人、就学者三五人、不就学者二七人でした。

学校の変遷は次のようです。

明治六年開校 養蒙学校

〃八年田畠学校と改称

〃一年一村一学校制施行 独立校維持

〃一二年美和学校と改称

神子柴地区の生徒を入れ
〃一九年田畠分校となる
(一村一校の趣旨により)

〃二一年田畠分校となる
(四年生まで就学)
〃二六年南箕輪尋常高等小学校に併合する

地元運営ですので、資金が多く必要でした。施設建設、指導者招聘、運営費用等々、大変なことでした。また、義務化されるまでは、不就学者も少なくなく、その教化も一苦労でした。

一〇年に及ぶ田畠学校は、地域の人材を育てるのに大いに役立ちました。統合された後の田畠学校の建築材は、南箕輪村の役場建築の材に利用されたと伝わります。



田畠公民館南にある田畠学校跡の標柱

四 古跡

(一) 清水城跡

国道一五三号線から大泉川右岸を約四〇〇メートルほど行くと、その西南に湧水が出ていて字清水という所があります。(権現とも呼んでいます)その洞と大泉川に挟まれた段丘の出張りがあります。その上に清水某という地侍が居城を構えていたと伝わります。

倉田氏・高木氏・日戸氏等と、箕輪の福与城主藤沢氏の旗下に入つて武田氏と戦いました。天文一五年(一五四六)藤沢氏が武田氏に敗れたので、その後は農民となり南殿に移り住んだと伝わります。(長野県町村誌)にあります。

城跡があつても不思議でない地形をしていますが、城跡ら

しいものは見つかっていません。

(二) 日戸氏館跡

いつの頃から日戸氏が田畠に居住するようになったかは史資料不足でよく分かりませんが、半沢の井筋の一つが東南の集落を東に流れ下る国道近辺に日戸姓の家が数軒あり、その辺一帯が館のあった所と伝わっています。

『長野県町村誌』によれば、天文年間（一五三二～一五五四）以前にここに居住し、武田氏の伊那侵入に箕輪の藤沢氏と共に戦つて敗れ、この地に農民として生活するようになつたと書かれています。

古者の話では、館の一角に尼寺があつて、その名残である「阿弥陀仏」碑が今でも畠の中に残つていて、日戸姓の人々によつて祀りが続けられているとのことです。また、「内城」という屋号の家があり、館と関連するのかもしれません。



日戸氏館と関係があるかも知れない阿弥陀仏碑

(三) 富士塚（浅間塚）

西天竜幹線水路端にある南箕輪養護老人ホームの南約五
十くらいの所にある円錐形の塚が富士塚です。

土盛りをして富士山の形に造り、頂上に火口の形も造り、山頂を人が回り歩けるようになっています。

富士山信仰は古くからありました。秀麗な山容、群を抜く高さ、大昔から人々はこの山に靈気を感じてきました。そして、拝んできます。

富士山登山が始められました。江戸時代（一六〇〇）に入り、修験道と結び付き、講がつくられ、富士登山が盛んになっていきました。修験者・長谷川角行（一五四一～一六四

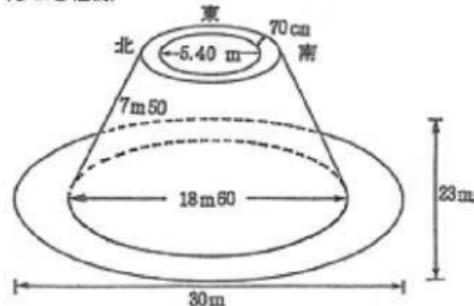


大芝老人ホーム南にある富士塚（所有は田畠の人です）

六)は、富士山の神は日月星の本体である仙元大菩薩(浅間様)であり、富士山の靈氣に触ることは幸せにつながることだと教え広めました。この教えは、農民・商人・職人などの中に広まり、庚申信仰とも結び付いて地方へも浸透していました。江戸では八百余の講中ができたと伝わります。

昔、富士登山をすることは大変なことでした。誰でもが富士登山に出掛ける訳にはいきませんでした。そこで考えられたのが富士塚です。模造富士山を造り、そこに登つて本物の

東西幅	19m60	頂上穴	5m40
南北〃	18m60	南北内径	6m20
高さ	3m44	東西深さ	70cm
境内地		縁幅	70cm
東西	23m		
南北	30m		
縁高さ	30cm		
(うつぎ植樹)			



富士塚の見取り図

富士登山の代わりにしようと考えました。装束も、火口を回ることも、唱える言葉なども本物の富士登山と同じにし、富士登山の御利益に預かるうとしました。

この富士塚は、元文五年(一七四〇)に神子柴・田畠・大泉・大泉新田・大萱の五ヶ村の人々によって築かれたのが始まりと推測されます。

神子柴の高木正照(鶴翁)が、安政七年(一八六〇)に書き残した文によれば、寛政二年(一八〇〇)に築き直し、安政七年(一八六〇)にまた築き直すと書かれています。

南箕輪村内には、「ふじづか」と呼ばれる地字が何カ所も残っていることから、少なくとも四カ所には富士塚があつたと推測されます。

(四)弁天ヶ崎

JR田畠駅の西の段丘崖の突端に一段低い出崎があります。この出崎を弁天ヶ崎と呼んでいます。

昭和二三年(一九四八)以前には、一段低い出崎の西端に小丘があつて弁天社が鎮座していました。この弁天社はいつから祀られていたかはつきりしませんが、天和四年(一六八四)の古絵図に載っています。

宝暦二年(一七六二)の古文書(門屋文書)には、この弁天社の横の大木が村の境界の基準を示すもので、この大木か

らの方向と距離で境界の確認がなされたことが記されています。天童川は、よく氾濫し、その都度神子柴村・上牧村・田畠村・野底村の村境が分からなくなってしまうので、この大木を基準点としたのです。古老人の話では、かつて大木の根元に矢印を刻んだ大石があつたそうです。

現在は、開発の手が入り、標柱（教育委員会）と標石（開発業者）が西の段丘上にあります。

『長野県町村誌』には、「・東に長沙を望み、遠く高遠城址あるいは六道の郊原をあわせ望み、絶崖尽くる所の沢岡・伊那部の村落あり。南ははるかに三遠の天遠く、目下に童川激湍を帶び、春秋月峯の白雪巒の紅葉なべて絶景の勝表なり・・」と記されていて、景勝の地として紹介されています。



標柱と標石

五 碑

(一) 芭蕉塚(尾花塚)



芭蕉塚の句碑

田畠公民館から旧伊那街道を東へ五〇㍍くらい進み、大きく曲がった所の東側に卵塔形の句碑があります。かつては丘塚があり、そこに句碑が建っていました。

この句碑は、文化四年（一八〇七）に加倉白雄門下の俳人・中村伯先の命により、その門人である里朝（鎌屋）・菊叟（井桁屋）・花六（豆腐屋）・三曉（糸屋）らによつて芭翁（鳥居）を埋んで建てられたものです。同時に建てられた四塚（鳥居

峰の雲雀塚の碑、木下の蟹清水塚の碑、山寺の秋風塚の碑、
田畠の碑の一つであると伝わっています。文化一年（一八〇四）編の伯先の句集「香組草」に四つの碑について書いて
あります。

伯先は伊那に蕉風（芭蕉の俳風）を導入した人で、生涯を
伊那市山寺の坎水園にて活動しましたが、三歳の時から
三六歳の正月までの四年間田畠に生活していましたが、多くの
門人が田畠にいたと推測されます。発起人の四名は、当時田
畠で活躍していた人達です。

碑文 兎も角も ならでや雪の 枯尾花 芭蕉翁

碑陰 文化六年己亥
發起 里朝、菊叟、花六、三曉、社中

句は冬の句で、元禄四年（一六九一）一月、芭翁が江戸
へ帰った時の懐で、折しも訪れて来た旧友や門人への挨拶
の意が出ています。雪の中に、秋を過ぎた枯尾花が、雨風に
折れもせずまだ残つてゐる。自分も長い旅を経て、多病の身
がどうにかこうにかたどり着いたことよ、という意味だと思
われます。

また、「長野県町村誌」には「これを見れば、翁もまた我が
本国穂屋の薄の古事を慕うの意明らかなり」と記しています。

（二）庚申塚

三カ所にあります。

1 けいじの庚申塚
大泉川の南田橋の南の段丘の上道路東にあります。

（1）奉請青面金剛庚申信心色主

宝永五年（一七〇八）庚申

元文五年（一七四〇）庚申供養塔

享保二年（一七二七）庚申

宝永五年（一七〇八）庚申

元文五年（一七四〇）庚申

宝永五年（一七〇八）庚申

元文五年（一七四〇）庚申

宝永五年（一七〇八）庚申

宝永五年（一七〇八）庚申

宝永五年（一七〇八）庚申

他に四基あるが詳細不明



けいじの庚申塚石碑群

旧道橋南庚申塚

(1) 庚申供養塔

元文二年（一七三七）

(2) 青面金剛像

安永五年（一七七六）

(3) 庚申

安政七年（一八六〇）

3 田畠公民館東庚申塚

(1) 庚申

宝暦九年（一七五九）

二十二夜供養

(2) 明和九年（一七七二）

二十三待供養

(3) 明和四年（一七六七）

御嶽座王大権現

(4) 嘉永四年（一八五二）

役行者像
年号不詳

田畠公民館東にある庚申塚の石仏群



旧道橋の所にある庚申塚の碑—この庚申塚はもとはもう少し南にあったそうです。

(三) 道祖神碑

1 田畠公民館東の庚申塚

碑面 道祖神

碑陰 嘉永三年一月 田畠村中

2 田畠信号機の西二〇番先の交差点

碑面 道祖神

碑陰 安政一年二月 田畠村中

(四) 水神碑

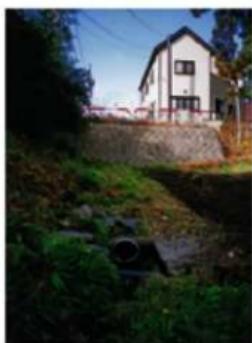
1 けいじの庚申塚西南段丘下字新田横井戸出口北

碑面 水神

碑陰 湊屋敬書 明治一三年 社中



横井戸北にある水神



横井戸出口



田畠信号機の西の辻にある道祖神碑

2 天竜川明神橋北三〇番先の土手西側
碑面 碑陰
水神 大正一五年四月二十四日

3 半沢の田畠水道水源地

(横井戸の所にあったものを移したものと伝わる)

碑面 水神

碑陰 昭和二六年四月二〇日竣工じゅこうじ

田畠水道組合



田畠半沢井の水源にある水神碑



天竜川土手にある水神碑

地区内に散在していたものを集めたものです。
(墓地などに残されたものもいくつもあります。)

2 国道田畠信号機横
(2) 地蔵堂から移された墓碑・石仏 一七基



西天の入口に建つ石碑群



田畠信号機の所に建つ
村内最大の馬頭観世音碑 他

(1) 碑面 馬頭観世音 (村内最大の碑)
碑陰 大正六年
田畠搬夫組合創立一〇周年記念
(役員・協力者・組合員名略)

2 同所に建てられている他の碑
摩利支尊天 文字碑
蚕玉神 文字碑

(六) 青山様三郎歌碑 二基

田畠北割地区の旧伊那街道沿いの真ん中辺西側、榛三郎生家の跡に建っています。

榛三郎（本名松澤修一郎）は、田畠の旧家に明治二六年（一八九三）に生まれました。教員生活（小学校・高等学校）をしながら作歌活動を続け、同人短歌誌「山河」を主催し、また歌集も何冊か出版しました。短歌は若山牧水、太田水穂（みずほ）に師事して勉強しました。南真輪小学校の校歌の作詞者です。昭和四八年（一九七三）亡くなりました。

この碑は、榛三郎を偲ぶとともに、一族の中心であつた旧家（門屋）が絶えることを悲しんだ一族の有志が、平成七年に榛三郎生家の跡地に建立しました。二基の石にはそれぞれ



青山様三郎歌碑

次の短歌が刻まれています。

1 谷水の あらん限りは 峰の松も

青くあらんを 人は寂しき

（字は北原青雲）

2 出でて去なば 恋ひまさるべき 里ならん

在る日を惜しめ 桐咲きにけり

（字は榛三郎）

六 用水

田畠地区は、北に大泉川、東に天竜川が流れていますが、大泉川は流水が安定せず、また荒れ川で生活用水としては利用するには難しく、天竜川も荒れ川で生活用水としては利用できませんでした。しかし、沖積地の水田用水として昔から利用されてきました。

生活用水は湧水に頼ってきました。天竜川・大泉川の河岸第一段丘下へはたくさん湧水が出ていましたが、第二段丘下には初沢口（半沢）以外は水量が少なく、地区の人々の大半は半沢の湧水を利用して生活していました。

初沢口から出る湧水は田畠と神子柴で古来より飲用水・生

活用水・水田用水として利用してきました。田畠地区内に設けられた井筋を半沢井と呼んでいます。

天和四年（一六八四）の古地図を見ると、主要水路は現在とほぼ変わりませんが、人家が増えるに従つて多少の変更があり、だんだん整備され現状のようになりました。延享三年（一七四六）の絵図によると、初沢口（半沢の水源地）の三カ所から水を集めています。利用量が増え、水源を拡大していったのです。

古老の話によると、「明治の末頃の水利権は、神子柴七分田畠三分だった。初沢口の所に水番小屋が設けられて、水確保に苦心した。水量はあまり多くなく、この水を使っての稻作はごくわずかだった。主に飲み水・家事用水として使っていた。水路は細く、下流のほうは自然の窪みを流れていた所もあつた。昼間は洗い物などに使用されるので、飲み水は夜遅くに、次の日に使う分の



西天からの水とホタルの里の水源の湧水が合流する所—半沢井の始まりの所

水を瓶などに汲み貯めておいた」ということでした。

昭和四年（一九二九）、西天竜用水が行き渡り始めると、そのまま水が合流して、半沢井の水量が多くなり、開田され水田も増えていきました。しかし、水質は落ち、飲み水に適さなくなってしまいました。

そこで、各家では井戸を掘り、飲み水・台所用水の確保を図りました。

昭和二六年（一九五一）、田畠簡易水道が完成して飲み水・台所用水としての半沢井の役目は終わりました。しかし、生活用水としては無くてはならない水なので、区民は毎年清掃しながら水路を守っています。

水路は、昭和の初め石垣積みに大改修し、その後コンクリートになりました。

かつて蝶が飛び、アメノウオを捕らえた半沢を取り戻そうと、平成五年、「半沢を愛する会」が発足し現在も活動が続けてけられています。

（二）伊賀島井他

いつ造られたか不明ですが、天竜川から水田用水として引かれた井です。昭和二六年からの土地改良事業により、水路などすっかり変わり分からなくなってしまいました。

しかし、江戸時代の古文書に名前が出てきますし、「長野県町村誌」にも「南殿耕地の東端において天竜川を堰ぎ、田

畑耕地の田に導き、また天竜川に注ぐ」と書かれています。この井の水で約二㌶の水田を耕作していたと伝わります。

古文書に、他に「天竜井」、「黒川井」というのが出てきます。

(三) 精進舎(屋)井

大泉川からの取水で、
旧道橋西に取り入れ口
があります。水田用水
として設けられた井で、
大泉川下流南側一帯の
水田用水となっていました。



精進舎井の大泉川からの取り入れ口

西天竜用水のあまり
水、字権現のあまり水
が豊かになり、現在は
ほとんど使用されてい
ません。大泉川からの
取水は南田橋の上からもあ
り、字権現地域で田用水として
使つていましたが今は使わ
れていません。

(四) 伊那土地改良組合排水路(くろ川)

かつての下段地域は、湿地でどころどころに排水池が設け
られている地帶でした。そして、排水の集められたのがJ.R

田畠駅の西を通つて神子柴へ流れっていました。

昭和二六年からの伊那土地改良組合の土地改良事業により、
水路改良もなされて、一帯の水路は変わりましたが、流末の
所は同じで、田畠駅の西を流れ大清水川へ注いでいます。そ
の川を「くろ川」と呼んでいます。

(五) 揚水機場

昭和四七年（一九七
二）から五二年にかけて、
西天竜幹線水路より上段
地帯の畠地灌漑・水田
補給用水として、下段の
あまり水を集めて上段へ
送る事業が行われました。
田畠地区へ、水を集め、
送るための施設ができま
した。

その施設を揚水機場と
呼んでいます。大芝から
大泉川南を道路に沿つて下りて来て、天竜川へ行き着く手前
の南側に在る施設です。送水の管は大芝へ行く道路の下に
埋設されています。



揚水機場

(六) 下水処理場

田畠公民館から東へ下り、鉄道を越え、道路を越えた所の施設が「公共下水道南箕輪中部処理場」です。平成四年着工、平成九年供用開始です。



公共下水道南箕輪中部処理場

(2) 天和四年の絵図では、旧道橋（大泉川）から北割地区を通り田畠信号機の所に出てくる道を「大寛道」と書いてあります。江戸時代初期、脇往還としての伊那街道が整備された時、この道が整備され中心道路となつたと推測されます。江戸時代の伊那街道はこの道のことと言っています。

(3) 明治一〇年代（一八七八）、国の道路行政が強く推進され始めると、一九年（一八八六）には伊那街道は二等県道三州街道となり、二〇年代には大規模な道路改良が始まりました。現在の国道のもとが出来ました。南殿に近い大泉川周辺は湿地で、その南が崖だつたのを堀割つて道路が造られました。今の国道一五三号線です。

(4) 田畠から神子柴へ行く道は、信号機の西を南に折れて小中井沢川へ突き当たり、川の左岸に沿いながら神子柴へと入りました。小中井沢西一帯は、かつては湿地だつたのです。

2 道標

(1) 紛失した道標

田畠信号機の西二〇メートルの三差路の角に、平成二五年まで折れた道標がありました。「右 ゼ」とだけ読みました。古老の話によると、元は「トモ」余の角柱で「右ゼンこうじ道」・「左やま道」と刻まれてあつて、北四〇メートルほどの四つ辻にあつたそうです。北殿のエドヒガン桜の所にある道標と酷似しているのですが、今はありません。

(2) 石垣から出てきた道標

四〇年程前、(1)に書いた四つ辻周辺の道路工事をしていら
る石垣の中から道標が出て来ました。「右　ぜんこうじ道」
と刻まれており、人々は紛失した道標以前からあつたもので
はないかと話し合つたそうです。

現在四つ辻に建つています。



石垣から出て来た
「ぜんこうじ道」の道標

田畠信号機の所にあります。
水準点とは、その地点の標高を示す印です。建設省国土地
理院が、水準原点を決め(東京都千代田区永田町の尾崎記念
会館脇にあり、東京湾の平均海面から二四・四一四八の高
さ)、そこから主要国道・県道に沿つて約一段ごとに設置し
ました。

3 水準点

北割地区の人々が通る山道は、大泉川の崖っぷちの上を西
に向かい、けいじの庚申塚をさらに西へ進み、段丘に突き当
たる所から山へ入つていきました。そこには「山の神社」が
祀られており、お参りしてから山に入りました。南割地区の
人々は、田畠神社の東をとおり、神社の南から山に入りました。
た。山に入った所に「山の神社」が祀られていました。

半沢の洞(ほざわのほら)に沿つて上段へ上の一本の道があります。「かん
の道」(観音道がなまつたもの)と呼んでいますが、羽広觀世

印がついていて、その頂点が標高を示します。
(2) 山道とかんの道

昔の人にとって山へ行く道は大切なものです、どの集落にも
山へ入る道があり、大切にされてきました。田畠地区には北
割地区の人々が使う山道、南割地区の人達が使う山道があり
ました。



水準点

南箕輪村の国道一五三号線には
二カ所にその印があります。一つ
は北殿の問屋の門前にあつて五
三四七号・六八一・一五九号です。
(今は北殿屯所前に移っています)

もう一つは田畠にあって、五三四
六号・六七六・三六、五号です。

花崗岩の標石の上に、半球状の

音参りをする道と言う意味だと思われます。これも山道の一

つであり、畠作道（西天にある

畠）だったと思われます。

右側の急坂の道が古い道で、

西天地域が開墾され、車馬の通

りやすい道にするために左側の

広く緩斜の道が作られました。

かんの道と田畠神社への道と

の分岐点に、花崗岩の道標があ

ります。

〔右 西真輪方面〕

「左 神子柴原へ」とあります。



西天へ上る旧道と新道の出発点

〔三〕 新しい道

太平洋戦争後、人口が増え田・畠に住宅が建てられていくきました。また、下段地区は排水工事がなされ、企業誘致や団地造成がすすめられました。そうなれば道路が必要ですから何本かの新しい道路ができました。

揚水機場からの送水管の上は村道六号線となり、重要な道路となりました。交通量も年々増えています。また、泉の森を始め道路周辺に住宅がどんどん建ちつつあります。

（揚水機場）の項参照 供用は昭和五九年（一九八四）からです。

〔四〕 明神橋

天竜川を越える橋が村内には二つあります。その一つが田畠にあります。

『長野県町村誌』には「神子柴橋」が天竜川に架っていたと書いてあり、「幅六尺、長さ三十五間、土橋なり」と書かれています。明治の初め頃には神子柴地籍に天竜川に橋が渡されていましたと思われます。

いつの頃から橋が架けられたのか不明ですが、江戸時代頃からだと推察されます。

昭和（一九二六年）の初め頃には木の橋が架かっていました

2 村道一〇八五号線

JR飯田線のすぐ東を南北に通じている道路です。

かつては湿田が広がっていた地帯が、排水工事のお陰で、

企業団地・住宅団地に変わり、公共施設も出来、道路も開通しました。

村道一〇八五号線（産業道路と呼んだ）の供用は昭和五九年からで平成七年には県道となりました。

3 村道二〇二四号線

田畠公民館から神子柴に通じる道路です。

細い道がある、田畠だった所にたくさんの住宅が建たり、広い舗装道路になりました。供用は、昭和六二年（一九八七）からです。

た。山から伐り出した丸太を組み合わせたものでした。歩くところは砂利などが敷いてありました。手すりなど付いていませんでした。しつかり出来ていなくて、大水が出る度に壊れ、流されてしまいました。次の橋が出来るまでは、中州へ丸太（一本を縛り付けた）を渡し、それを繋げて橋の代用としたりしていました。位置なども、川の様子によって移動しました。



コンクリートローゼ桁橋の明神橋

コンクリート橋が出来たのは昭和三七年（一九六二）でした。コンクリートローゼ桁橋と

言つて、アーチ型の桁の姿が他県では少ないもので、土木遺産の一

つだそうです。

大正（一九一—）の頃、田畠にも天竜川

の渡し舟がありまし

た。昭和五〇年（一九七五）に、古老から次

のよう話を聞きました。「天竜川の土手下に小屋掛けをしている

おじさんがいて、声を掛けると舟に乗せて天竜川を渡らせてくれた。東西の土手に柱を立て、そこに針金が張ってあって、それを伝わって舟を動かしていた。」明神橋は伊那市の管轄のようで、橋幅が狭く通勤時には野底からの一方通行が行われています。

（五）田畠駅

最初の電車軌道の時の駅（停留所）がどこにあつたかはつきりしません。大正八年（一九一九）に改良線になつてからは現在の所に停留所がありました。

駅員のいる駅（最初は地元負担で駅員を置いたので、地元の意向で決められた）となつたのは、大正一二年でした。昭和四五年（一

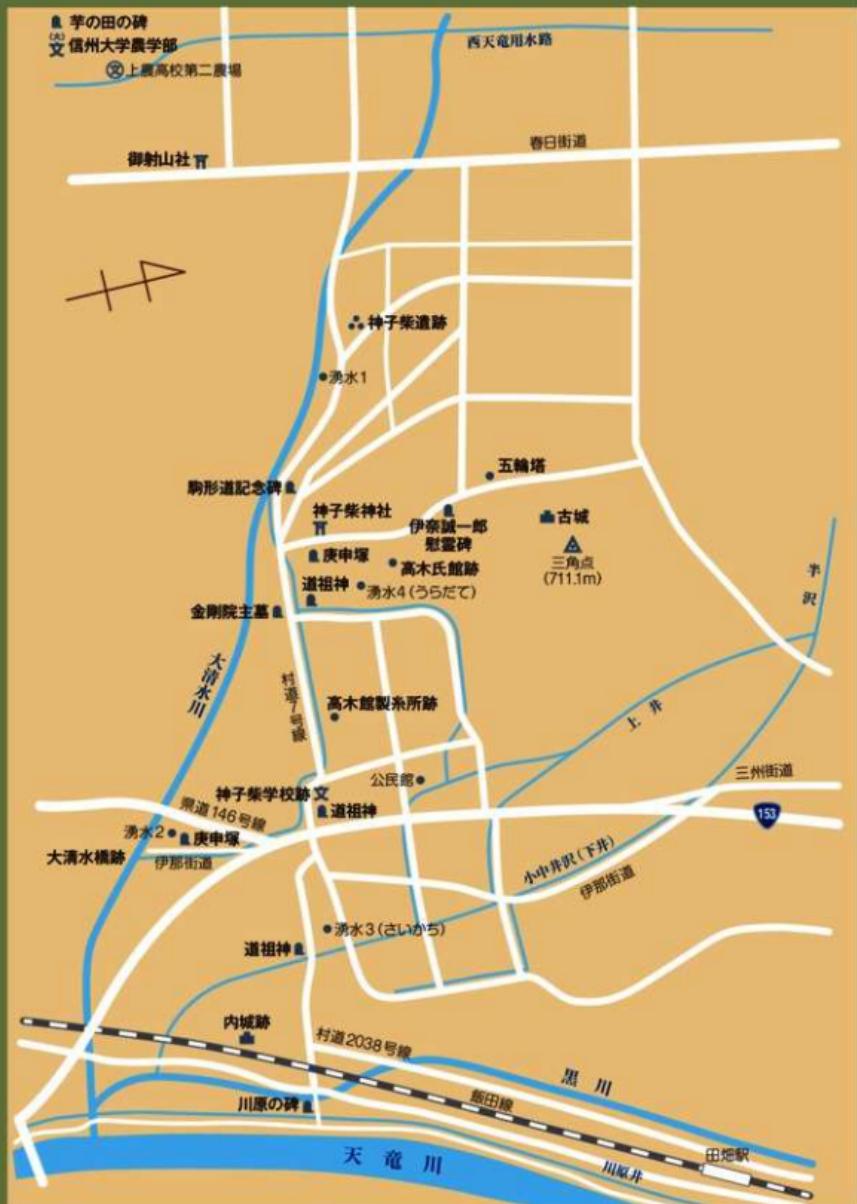
九七〇）に無人化になるまで、業務委託された女性が、駅員として常駐していました。

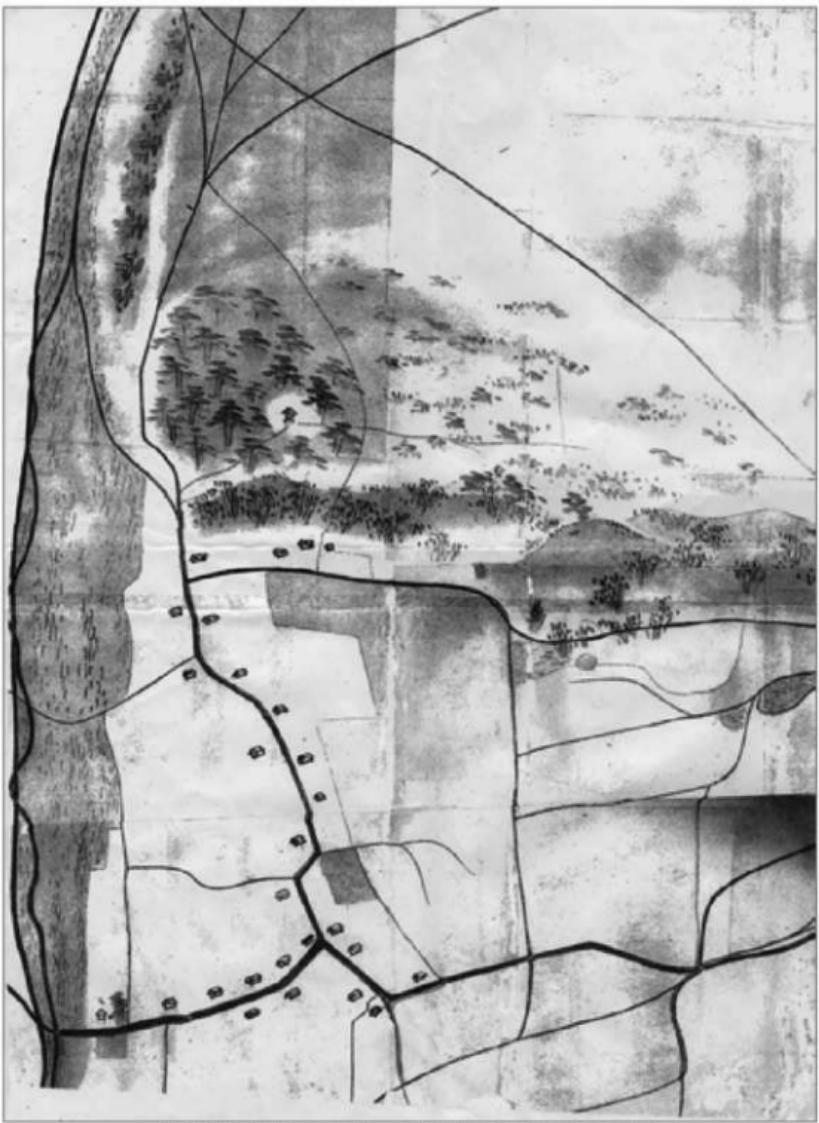
田畠・神子柴・南殿の村人、川向こうの野底・牧の人など昭和四〇年頃までは、乗降客でにぎわっていました。



昭和の初め頃の田畠駅と電車

第七 神子柴





神子柴絵図(大和手文書) 文化元年8月(1804)215年前

一 神子柴の由来

ここ神子柴は、神子柴遺跡（旧石器時代）が物語るようによくから人が住みついていたようですが、その後のことは殆ど分かっていません。しかし、御射山社の鳥居跡があり、神子柴神社の歴史も古く、古城・内城など多くの古い地名も残っています。

神子柴区は、上段・中段・下段の三か所に集落があります。中心部の中段は、大清水川と大泉川の伏流水が湧き出る位置にあることから湧き水が多く、飲み水や水田用水に恵まれ、地形も平らであることなどから早くから人が住みついたと思われます。明治半ばに伊那街道が県道（三州街道）になりました。商店や会社もできてきました。上段は、西天竜用水路が造られ、道路が整備された頃から家が建ち始め、上農寮や信大農学部などができて家が増え、中央道の開通によりアクセスマート道路が開かれたことによって市街化しつつあります。最近は春日街道沿いにも家が増え、JAの施設や病院などもできました。下段は、天竜川氾濫原の水田地帯でしたが、戦後、伊那土地改良区による耕地整理事業が行われ、村道二〇三八号線が整備されて水道管が敷設され、天竜川の堤防が強

化されたことによって家が建ち始め、現在は住宅地となりました。

「みこしば」の名の起りははつきりしませんが、昔「神子柴」と「御園」とは一つの村でした。何時の頃か分かりませんが分かれたようです。『長野県町村誌』によると、南箕輪から西箕輪にかけての一帯は建御名方命の御狩の古跡であつたようで、命が腰をかけられたことから「御腰場」、その後御射山祭が行われるようになつて「神輿場」と云われる様になりました。その後「御子柴」となり、さらに延宝六年（一六七八）に現在の「神子柴」と改められたようです。今でも十年に一度、諏訪の上社の祭りに諏訪市中洲福島区へ招かれていて、



アクセス道路付近



村道2038号付近

諏訪明神との繋がりが続いている。

明治八年（一八七五）に「南箕輪村」が誕生して、「神子柴区」^{くわい}へと名前を変更し、大正三年（一九一四）から「神子柴区」となっています。神子柴区の戸数は、南箕輪村になつた当時は五十三戸でしたが、戦前は七〇戸程になり、現在（平成三〇年一月）は七〇〇戸・人口一六三八人となっています。

二 神社

（一）神子柴神社

字駒形にあり、白山社と八幡宮の合社です。

1 祭神

白山社

白山比め神・伊弉諾尊・伊弉冉尊

八幡宮
菅原別尊（応神天皇）

創立の年やいわれは分かりませんが、伝えられるところによると、平安時代の初めの大同年中（八〇六年）に奉祀され、

当時は盛大な祭りが行われていたといいます。社家の神馬（木製の馬）に、「天文五年（一五三二）丙申正月献す」と有ることから推して、かなり古くからの社であつたことがうかがえます。

2 社殿

本殿は、一間社流れ造りで、正面には唐破風（そり曲がつた破風）が付いています。海老紅梁は見事な龍の彫刻が施されています。また擬玉珠のある柱を立てた欄干をめぐらした勾欄の縁のはてには脇障子があり、右側には宝劍（尊い剣）に乗る仙人、左側には雲上の鳥に乗る仙人が彫刻されています。寛文一年（一六七一）に再建。天保三年（一八四二）にまた建てなおして、明治五年（一八七二）村社になつていま

ます。

覆屋の棟木には「奉上棟天郷中主神宮永久吉祥大正元年一



神馬

本殿



平成20年頃の神社

「二月一五日吉祥」と書かれています。昭和五年（一九三〇）に改築され、現在の建物は平成五年に建て替えられたものです。拝殿は間口五間、奥行き三間の入母屋造りで、大正七年（一九一八）に改築したものです。

3 烏居

高さ一尺、開き七尺で控え柱を持つ木製両部式のものであつたが、平成元年氏子（村中）と財産組合とによってコンクリート製に建て替えられました。

4 石灯籠

古い石灯籠が崩れてしまっていたのを平成五年（一九九三）一〇月に西天地区の有志（九人）の人々によつて再建されました。

5 階段

拝殿を改築した大正七年（一九一八）に施工・建設したようです。

6 水屋

水屋と御手洗が造られ、水道が引かれました。御手洗には昭和天皇六十周年記念（一九八五）と記されています。

（二）境内社

1 高丘社（天狗社）

祭神

高津神（『長野県町村誌』では天狹霧命となつてゐる）

創立の年月は分かりませんが、明治四年（一九〇八）一月、半ノ木原にあつたものを移したもののです。

2 稲荷社

祭神
倉稻魂命、猿田彦命、大宮女神

この社も創立の年月は分からぬが安政年間（一八五四～一八五九）に再建されていて、明治四一年（一九〇八）一月字駒形より移されたものといわれます。

3 金刀比羅社

祭神は大物主神・崇徳天皇

4 天満宮

祭神は菅原道真公

5 蚕玉様

祭神は蚕の神

この外に名前の分からぬ小祠がいくつあります。

（三）御射山社（御射山社鳥居跡）

祭神

建御名方命

八坂刀売命

御射山社は、昔、豊穣と豊穢を祈った祭りとして始まつたもののですが、鎌倉時代（一一八五～一三三三）には幕府の保護を受けて盛んになつたといいます。

神子柴の御射山社は春日街道添いにあり、二本の落葉松（現在は一本）の大木の根本に穗屋（すすきの屋根）を架け「御射山社」と書かれた古い碑が建っています。この碑は文政二〇年（一八二八）に神子柴の人々によつて建てられたものです。碑の裏には御射山社の故事・来歴が書かれていて、この碑文は、この御射山社に関する記録の中で最も古いものでです。

碑文の内容は、「御射山社の鳥居の基礎がここにある。最初の御射山社は、平安時代の大同四年（八〇九）に坂上田村丸（麻呂）が本社を建てた。その後四五一年経つた鎌倉時代の文応五年（一二六四）に再建され、三二六年後の戦国時代天正一三年（一五八五）一月の大地震によつて壊れた。それから一四三年も経つたが再建されることもなく、人々はただなげくばかりで昔からのしきたりも無くなつてしまつた。やがてこの基礎も分からなくなつたのである。」といふもので



御射山社の石碑

御射山祭りには、穂屋（御仮屋）をこしらえ宮島氏が神官を勤めていたようです。神子柴からは御射山社へ御輿（みこし）を出し、途中にあつた三本木で休んだといいます。また、御射山社の規模について、神社の別当寺は普光寺（藤宝寺と言う説もある）で、一時は一二坊もある大規模なものであつたと言われば、御射山社は、伊那郡一の大社だつたようです。しかし、兵火や大地震に遭つて、かつての姿は全く無くなつてしまつました。御射山社については、「落原拾葉ひとつばなし」・「伊那志略」や「長野県町村誌」の南箕輪村・西箕輪村の項等多くの古書に書かれてはいますが、御射山社の歴史は大変古い上に、旧御射山祭が行われなくなつた後に書かれた記録のみで、はつきりしない事ばかりです。

西山には「御射山」という山があり、地元の人々によると、字御射山平には御射山社や御射山社の別当寺があつたといいます。西箕輪の書物『我が郷土』や『西箕輪誌』によれば、最初の御射山社は与地にあつて、それを羽広へ移したと記されています。また、明治の初めまでは第二の鳥居があり、第一の鳥居は神子柴の鳥居原にあつたと記されています。このよ



御射山社祭典（昭和52年）

うな事を合わせて考えると、神子柴の石碑には「御射山社」と刻まれてはいますが、ここに御射山社の本社があつたとは考えにくいのです。神子柴に御射山社があつたというには裏付けがなき過ぎますし、「神輿場」の名の起りも御輿を出した村ということで、西箕輪に本社があつたとするのが自然です。

鳥居のあつたところに「御射山社」と書かれた石碑があるのは、碑文にもあるように、かつての様な盛大な祭が出来なくなつて、御射山社を分散し、祭りのよりどころとして碑が建てられ「御射山社」と書かれたものと思われます。写真で見るよう、今も大きな落葉松の根元の石碑に種屋を架け、神子柴では毎年八月二六日頃御射山祭の神事を行っています。

三 お堂など

(一) 薬師堂

前は宮ヶ崎にありましたが現在は神社境内の諸社を祀つた建物の南にあります。切妻造りの小祠の中に、正面に唐破風の屋根を持つ、古くて小じんまりとした建物です。よく手のこんだ組み物によるお堂です。このお堂について、古書『落

原拾葉ひとつばなし』に、「内城の城主だった近藤氏の守り本尊だつた」という記述が有るといいます。お堂の中には、昔、天竜川に流れ着いたという素朴で古めかしい薬師如来が安置されています。

その下に薬師如来の眷属十二神将が置かれています。これらの像は、頭にそれぞれ十二支をいただいて力動感があり、おだやかで優しい美しさがあります。台の裏には、「文化拾三子九月吉日本曾宮越住加藤嘉置作之」と記されています。村の指定文化財(一体欠如)にもなつていますが残念なことに平成二三年三月盗難に遭つて四体を失い、現在残っているのは七体だけになりました。



薬師堂



平成10年頃の十二神将



宮ヶ崎にあった頃の薬師堂

(二) 金剛院

「神子柴にはお堂が二つあった」という言い伝えがあり、文化元年（一八〇四）の絵地図にも二箇所にお堂と思われる建物が描かれています。その一つが旧伊那街道沿いの大清水橋に近い庚申塚や馬頭観音碑がある場所で、今でも何本かの大木が茂っています。向かい合いには「やくしまえ」という小字もあります。はつきりしたことは分かりませんがここに金剛院があつたのではないかと言われています。

『長野県町村誌』

や高木家（屋号

東朝軒）の言い伝

えに拠ると、先祖

は、中世期に武田

氏に仕えた武士で

あつたが、川中島

の戦いの後帰農し、

神子柴に落ち着いたと言います。

祖父正弘の二男盛秀

（幼名は秀弥）が

松島の明音寺へ弟子入りした後、金



金剛院主の墓

剛院を開いたと言います。この寺について『伊那郡神社仏閣記』に、「一真言宗山伏張本三宝院派金剛院」と書かれています。盛秀はこの地方民から信頼を得て活躍し、元禄三年（一六九〇）に亡くなりました。金剛院はその後世襲し、明治維新の「神仏分離」により廃院となつたようです。その金剛院の歴代の法印の墓石が、高木家（沢屋）の墓地に五基建っています。

金剛院はその後世襲し、明治維新の「神仏分離」により廃院となつたようです。その金剛院の歴代の法印の墓石が、高木家（沢屋）の墓地に五基建っています。

(三) 役の行者の石像

山岳修行者である役の行者の石像一基が神子柴神社境内（本殿の北の石垣の上）にあります。

四 公共施設

(一) 神子柴学校跡

明治五年（一八七二）九月五日に筑摩県下で二六番目の学校として山寺村（伊那）に開校した第二六小校の学区に神子柴村は加わっています。その後、明治六年一月にこの小校は解散し、七年一月神子柴村には第一一二区一〇四番「致知

学校」が設立され、これが神子柴村にできた最初の学校です。役所に出された文書には、最初の生徒数は男二四人、女一二人と記されています。明治一〇年には校名も「神子柴学校」と改められ、分校「大萱学校」(西箕輪)を持つようになります。

明治一一(一八七八)年には、さらに山園学校(山寺・御園)へ併合しましたが、国の「一村一校制」の制度改革により神子柴学校は廃校となり、明治一二年(一八七九)には田畠の「美和学校」(のち南箕輪学校分校となる)へ併合しました。幾多の変遷を経て明治一九年(一八八六)からは漸く南箕輪学校(田畠支校・久保派出所・大泉派出所があつた)で学ぶようになりました。

神子柴学校跡は、神子柴耕地の中央にあり、山園学校併合後は耕地の集会所として使われました。また、当時は学校田畠があつて水田から上がる米代が子供らの奨学資金として使われていたといいます。しかし、昭和二七年(一九五二)に建物は上牧(伊那)の民家へ移され、道路も拡幅されていて昔の面影はありません。

(二) 公民館

公民館の前身である神子柴耕地の集会所は、神子柴学校の建物でした。戦後の新しい村づくりの一つに公民館の設置がありました。最初の公民館は、昭和二十五年(一九五〇)の公

民館設置条例に基づき神子柴区の北方の水田へ「宮ヶ崎」(お宮前)の土砂を運んで造成した土地に建てられました。そして会議をはじめ、いろいろな文化活動が行われてきましたが、昭和五七年(一九八一)に農家の「連担団地」(耕地の団地)の研修センターが建てられ、公民館としても併用されてきました。

この戸数が増えたり、公民館活動が活発になつたり、他の区で広い公民館が建てられたこともあつて、にわかに新しい公民館建設の話が持ち上がり、平成一三年に広いホールのある公民館が完成しました。



旧公民館



現在の公民館

(三) 保育園(所)

「就学前の幼児を保育するための施設を欲しい」という声は前々からありました。昭和二二年(一九四七)に出た「児童福祉法」の公布により、「保育に欠ける幼児を保育する」保育所が開所しました。



最初に建てられた保育所

「南部保育所」ができたのは村内では一番早く、昭和二十八年一〇月の事でした。集団生活による育児効果もあって次第に幼児の数は増え、殆んどの該当幼児が入所するようになりました。昭和五〇年六月に近くへ移転改築し、五七年には一才未満児も入所できる部屋も増築されました。名前も「南部保育園」と改称されました。

(四) 上伊那農業高等学校第一農場(中の原農場)

この農場は、西部公民館のすぐ南にあります。かつて「上農寮」と呼ばれていた塾風教育の宿泊施設と農場があつた場

所です。

この農場については、資料二の項と沢尻区の上伊那農業高等学校的項で説明されています。

(五) 信州大学農学部

昭和二〇年に長野県立農林専門学校として開校し、昭和二四年信州大学設置に伴い吸収され、(農学科・林学科)発足しました。

昭和四七年大学院農学研究科修士課程が設置され、平成三年に岐阜大学院連合農学研究博士課程設置によりその構成大学となりました。

平成二七年四月、信州大學農学部はこれまでの三学科制から「農学生命科学科」の一学科制(四コース)に改組しました。



信州大学農学部



上農寮舍(昭和11年)

五 古跡など

(一) 神子柴遺跡

神子柴水道の水源地の北方の小高い丘にあります。日当たりが良く、なだらかな傾斜地で、大泉川扇状地の先端にあたる場所です。

ここから出土した石器類は、今から一二、〇〇〇～一五、

〇〇〇年前（旧石器時代後期）のものと言わ

れ、歴史が大変古い上に、どれも形が整つていて美しく、昭和六三年（一九八八）国の重要文化財に指定されました。

昭和二八年（一九五三）頃、この土地の耕作者が遺物を採取したのがきっかけで、昭和三三年上伊那誌編纂歴史部の人たちによって

南側から見た発掘現場



神子柴遺跡

第一回発掘調査が行われました。この発掘調査によって多数の貴重な石器が発掘されました。上伊那に於いては旧石器時代（土器が使われる前）に人類が生活していた最初の証拠となり、この地方の人類の生活の起源が一万年あるいはそれ以上溯る事になったのです。翌、三四年に第二回めの発掘調査が行われ、石器や土器片の外、竪穴住居址三個の有ることも確認されました。

この二回の調査によつて発掘された石器は古いことに加え、大きくて美しいことに發掘した人々も驚いたと言います。その後、石器には「神子柴型石器」の名が付けられ全国的にも有名な遺跡となりました。この遺跡からは、旧石器時代・縄文時代・平安時代の遺構・遺物の貴重なものも見つかっています。

昭和四三年地元の

希望により、

第三回発掘調査

査を一月に
一二日間行い
ました。この

時、旧石器時
代の石核調整
の作業場と思
われる遺構と、



神子柴型石器

石器多数、縄文時代の石組み遺構一〇址、それに土こう墓と、
土器、石器多数と土器の灰釉陶器・須恵器が発見され、さら
に堅穴住居が確認されました。この調査の結果は、この辺り
に一三、〇〇〇年ほど前から人が住んでいたことを物語って
いるといえます。この遺跡は青森県の長者久保遺跡とともに、
「長者久保神子柴文化」として石槍や片刃石斧を持つ文化の
栄えた一時期のあつたことが考えられる遺跡であると考古学
上注目されるようになったようです。

出土品は、「伊那市創造館」に常設展示されていて、村に
もレプリカが造られ、郷土館に展示されています。また、平
成二〇年に神子柴遺跡についての発掘調査報告書「神子柴」
が出版されています。

(二) 古城跡

神子柴の北西の段丘上を高圧線が通っていますが、その

段丘上の林の中の鉄塔がある辺りを「古城」と呼んでいます。
ここは南北の展望が開け、東は高遠方面まで見通せる好位置
です。現在は、三角点があつて、「七一一・一五」と記され
た標柱が立てられていますが、室町時代の文明年間（一五世
紀半ば）に箕輪氏（木曾義仲の末孫と言われる人々）がここ
に居住していたと伝えられ、城の遺構などはないが、この山
の下には城ノ越（腰）・殿垣外・小太郎という地名が残つて
いて「古城」もしくは「内城」に関係した見張り所か狼煙台が
あったのではないかと言われています。

(三) 五輪塔

「古城」の直ぐ西側の林の中
に、古い五輪塔が三基立つて
います。この五輪塔は「長野県
町村誌」には、文明年間（一四
六九—一四八六）の箕輪氏の箕
輪義建（左衛門）・同義俊（小太
郎）・同義嶺（刑部）の墓と記さ
れていますが詳しいことは分か
りません。



五輪塔

(四) 内城跡

飯田線が南下するとき、小中井沢川を渡る手前の右側の台地（飯田線の西側の断崖の上一七メートルほど）にあって、地元の人たちはここを「うちじょう」と呼んでいます。

上の平は、東西六五メートル南北一〇〇メートルほどの長方形の土地で、東に天竜川・西に小中井沢の谷・北に空堀（現在は掘り下げられて道路になっている）だったと思える小さな谷・南には幾つか曲輪があり、城の構えにふさわしい地形です。しか

し、この城につ

いては、昔「近

藤某が城主だつた」という言い

伝えがあるだけ

で、その外の事

は何も分かつて

いません。ただ、

この城の北方に

という地字が有

り、まれに地中

から古城貝が出

たという話が伝



内城の概略図

(五) 高木氏館跡

高木氏は、初めは小笠原氏の家臣であつたが、次に箕輪の藤沢氏に従い、天正一〇〇年（一五八二）高遠の保科氏に属した武士のようです。伊那一二騎の一人とまで呼ばれ、高木氏の名はいろいろな書物に出て来ますが、天正一七年（一五八九）民籍に帰つたと伝えられています。

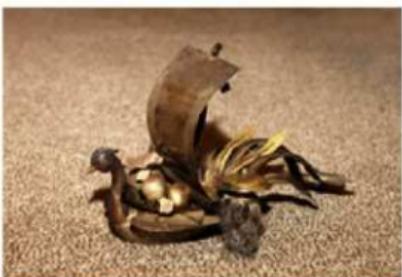
ところで、神子柴には高木姓は多く、中でも古くから続いているといわれる家が三戸あつて、その一戸は高木氏が住んでいたという館跡（神子柴の西方の小高い丘に、東西一六間、南北二〇間、面積三二〇坪と記されている）に近く、現在の高木家（大和手）の墓地には、古い墓石も多くあります。また直ぐ近くに「高木の城」と呼ばれる場所があつたという話もあります。さらに、現在残っている古

い土蔵の中には江戸時代の古文書が数多く保存されています。たし、古城や五輪塔のある場所にも近く、高木家（大和手）は武士高木氏の子孫と思われますが、中世に活躍した高木氏に結びつく確かな証拠はありません。

もう一戸の高木家（東朝軒）も古くからの有力な家柄で多くの分家があり、金剛院の院主もこの家の分かれのようです。昔は墓地が大和手の墓地と同じ場所だったと言いますから同じ高木氏であつたと考えられます。

(六) 天竜川通船

天竜川通船を始めた加藤孫市家の（田丸屋）は現在は上の段へ移っていますが、家人の話によると当時の家は神子柴の中心部にあつたと言います。通船による営業のはつきりした姿は分かりませんが、神子柴村の年寄孫市によつて、文政二三年（一八三〇）～天保六年（一八三五）の間営業していたようです。しかし業績がよくなく、長くは続かなかつたと言います。天竜川上流の輸送業の創始者であつた孫市



銅板の宝船

(七) 高木館製糸場（所跡）

この製糸場は現在の二組の会所のすぐ北にありました。大正一〇年（一九二一）に高木藤五が始めた製糸所で、社員が六〇人（男五・女五五）五〇釜程の規模でした。

後に山本館（伊那町）と合併して株式会社高木館下平製糸場となつて伊那町へ移転したために神子柴での営業期間は短かつたが、神子柴に最初にできた工場でした。動力には水車を使つていたと言います。



神子柴にあった旧高木館製糸場

六 石碑

(一) 庚申塚・甲子塔など

神子柴の庚申塚は旧伊那街道の大清水橋の北方約五〇メートルの所と、宮ヶ崎（神社入り口）にあります。

1 大清水橋に近い庚申塚等

- 庚申 寛政二二年

- (一八〇〇)

- 庚申 安政七年

- (一八六〇)

- 甲子 二基

- 馬頭観音像 八体

- 神子柴神社入り口の
庚申塚等

2

- 庚申 元文五年

- (一七四〇)

- 庚申 大正九年

- (一九二〇)



神社入り口の庚申、甲子塔



伊那街道沿いの庚申塚

庚申 昭和五五年
(一九八〇)

甲子 昭和五九年
(一九八四)

昭和五九年に近くに散在して
いた庚申塚・甲子塔をまとめて
した。さらに平成二〇年(一九
〇八)に「八体の馬頭観音像や
馬頭観音碑を道路端へまとめ
した。

(二) 道祖神

1 神子柴神社下の三叉路

- 道祖神 年代不詳

- 道祖神 年代不詳

- 道祖神 年代不詳



道祖神



集められた馬頭観世音

2 宮ヶ崎

・道祖神 年代不詳

3 屯所の西の三叉路

・道祖神

嘉永辛亥夏

(一八五二) 四月

鼎彌方



道祖神

4 川原へ下る坂道の手前

・道祖神 年代不詳

(不吉の言い伝えがあり横倒しのままになつてゐる)

(三) 駒形道の碑

大正天皇の御即位記念の事業として大正三年(一九一四)に原(西天)へ上る道を開削した記念の碑です。

この文書にこの時の開通式の村長の式辞が残つていて、郡

長を招いている

ことや、今日か

ら馬車交通が安

全にしかも沢山

の荷物を運べる

ようになるとい

う喜びが書かれ

ています。



駒形道記念碑

(四) 川原の碑

村道七号線が天童川の堤防と交わる三叉路の直ぐ南にあります。現在は川原井沿いにあります。元の位置は田畠駅の少し南の高く(三メートル程)盛り上げた小山の上にありました。戦後の耕地整理の時にここへ移転したものです。

碑文
明治十八年
九月
戸隠大神
水波能売神

この碑は川原井近くにあつたので用水の水神かと思われやすいですが、

・洪水による災害が続いた明治一八年(一八八五)の九月に建てられていること

・水波能売神(水を司る神)と戸隠山大神とを祀つてあること

・水田地帯へ小山(二~三メートル)を造りその上に建ててあつたこと

さらにはこの石碑が大きいことなどから考えて、堤防が未だ不完全で、何度も水害に苦しめられた人々が、水波能売神に水害を防いで貰う願いを込めて建てたものと考えられます。現在でも水との戦いは続いているが、昭和になつて堤防

を造る技術が進んでからは水害は少なくなっています。

(五) 芋ノ田の碑

信大の農学部の農場の上の林の中になります。明治の初め、この一帯は草刈場で水もなく家もありませんでした。明治の半ばを過ぎた頃、西箕輪村大萱の原杉藏とその子孫が危険を犯して長い横井戸を掘り、林を開墾して水田を開いたことなどを伝える記念碑です。石碑は三基ありますが一連のもので明治三六年（一九〇二）に建てられたものです。

碑文は読めない部分もありますが、当時の水田の面積は九反歩（〇・九反）程だったようです。その後も開拓が続き、現在この一帯は

信州大学農学部の農場になつています。

近くに横井戸

があり現在も途切れることなく清水が流れています。



芋の田の記念碑

碑面 大清水湧水

水神

碑陰 大正一四年三月 水道完成

(七) 伊奈誠一郎 慰靈碑

うらだて横井戸に沿つて登り、山道に出た右側の林の中にあります。天保四年（一八三三）高木家（大和手）勘之丞の三男として生まれ（幼名一甲子次）医師になりましたが、幕末、幕府軍に身を投じ、北海道函館の五稜郭の戦いまで参戦しました。

その後、石川県内の警察署長などを歴任し、明治二二年（一八八九）五月十五日在任中死去しましたが極めて烈士であつたので人々の同情をかい、昭和六二年（一九八七）一ヶ月村内の有志（伊奈誠一郎移設顕彰会）によつて能登に在つた慰靈碑が移設されました。

碑には「故石川県警部伊奈誠一郎之碑」「明治二二年五月一五日死去静岡県伊奈太郎建之」とあります。そして、すぐ左に副碑があります。

(八) 宮ヶ崎の碑

神子柴水道の完成記念の碑です。昭和の末になつて建てられました。

公民館を造るために宮ヶ崎の土砂を削り取つて埋め立てま

したが、土砂を取る前は眺めの良い高台（広場）になつていて、そこには、薬師堂との碑がありました。薬師堂は神社

の境内へ、宮ヶ崎の碑は現在の所へ移されました。この碑には「宮ヶ崎」大正四年青年会建之とあります。

七 用水

(一) 生活用水(神子柴水道)

神子柴の人々は昔、大清水川添いの下の沢の清水二ヵ所(上村・横小路)と・さいかち清水(下村)を飲み水にして生活していたと言います。その後、用水路が整備されて、区内全体を流れるようになり、不自由無く生活することが出来るようになつたようです。しかし、伝染病等の心配などから大正一四年(一九二五)簡易水道が創設されてカラムをひねるだけで良い水が使えるようになりました。

戦後、人口が増え水の需要が増したため、昭和四八年(一九七三)にタンクを大きくし、配水管を太くし、水質も向上させて今日に至っています。

神子柴の水道は村内で一番早く創設されましたが、現在もなお村内最後の簡易水道として続いています。

(二) 半沢井

半沢井と田畠区の境が半沢で、ここから流れ出る沢水を田畠と上井・下井(小中井沢川)に分けて区内に引き、主に

水田用水として使つてきました。この辺りは早くから水田になつていたようで、昔の検地の時には「上田」が多かつたといいます。

(三) 川原井

この井は、天竜川にしつかりした堤防が造られた頃、田畠区の東の地点で天竜川の水を取り入れ、神子柴地籍の水田へ引水するため造られたようです。この井は水神橋(伊那町)方面へも延びていました。

現在の水路は昭和三年完成した幹線用水路(伊那土地改良区の事業による)になつていて、箕輪町地籍の天竜川から取水しています。

八 橋

(一) 大清水橋跡

三州街道(県道)に改修される前の伊那街道は、幅が狭く、カーブや坂の多い道でした。神子柴と御園(伊那村)の境には大清水川があるため、坂を下つて橋を渡り、また坂を登る急カーブの道でした。大清水川を渡るこの橋が大清水橋で、長野県町村誌によると、長さ二間(三、六メル)・幅九尺(二、七メル)の板橋であつたと記されています。

明治半ばに行われた三州街道と大清水川の大改修工事によって昔の面影はありませんが、大清水川橋までの伊那街道の道筋の一部は現在も残っています。

(二) 神子柴橋

神子柴橋について『長野県町村誌』に「神子柴耕地の東にあり。伊那部村及高遠へ通す。長三十五間、幅六尺、土橋なり。」とあります。田畠の橋の記載はなく、北殿橋と並んで書かれています。

古老人の話に聞くと、大清水川が天竜川に流れ込む辺りに（昔は高い杉の木が立つていてその根元に水神碑－現在の二葉町神社の石碑）神子柴橋があつて、橋を渡つて上牧に通じていたと言います。初めのうちは、芦の生い茂つた中州と中州の間に丸太を渡した程度のものだったようですが、高遠に通じる大事な橋だったようで、やがて橋脚のある土橋になり、長さ三五間（六三尺）・幅六尺（一・八メートル）の橋になったようです。

その後、堤防工事が繰り返し行われて当時の面影は全くありませんが、竜東の人たちがこの神子柴の橋を渡つて里道を通り御射山社の方へ向かつたという話が残っています。

九 道路

(一) 伊那街道筋

伊那街道は、人や牛馬が歩くための狭い道で、坂があり曲がりくねっていました。明治になって産業が盛んになり、荷馬車や乗合馬車などの車馬交通の必要に迫られて、鉄道と共に全国的に近代道路整備事業が行われました。県道三州街道も、明治二八年（一八九五）に塙尻から飯田まで改修されました。しかし、神子柴と田畠は完成するのが大幅に遅れました。

この県道が完成したのはいつだったのか確かな記録が見つかりませんが、大正一〇年頃のことと思われます。それは、古老人の話です。



旧伊那街道

が「県道が出来上がったのは昭和になつてからだ」と言つて
いたことや、大正八年にこの道が「県道長野飯田線」と改名

されていて、長野～飯田間の交通を円滑にするため、遅れて
いた部分や不完全な部分を完成させたと考えられるからです。

神子柴と田畠の間が完成したことによつて、伊那～辰野間
の交通（特に荷馬車・自転車）は盛んになつたことが交通統
計にも表れています。その後、乗り合いバスも開通しました。

(二) 東西の道

南北に通じる道は古くからありましたが、
東西に通じる道はかなり遅れて開発されました
た。神子柴の東西の道に荷馬車が通れるよう
になったのは、大正三年（一九一二）の御大
典（天皇即位の祝い）の時の道路改修以後の
事でした。続いて翌年、下道が測量されさら
にならなかな道が開かれました。

区の古文書に拠つて、川原へ下る道も、ほ
ぼ同じ頃測量され改修されたものと思われま
す。

(三) 国道一五三号線（伊那バイパス）

県道は、昭和の初めに完成し、二九年（一
九五四）に二級国道一五三号線（名塩国道）
に昇格し、拡幅・直線化・舗装化されていい



バイパス工事の大看板

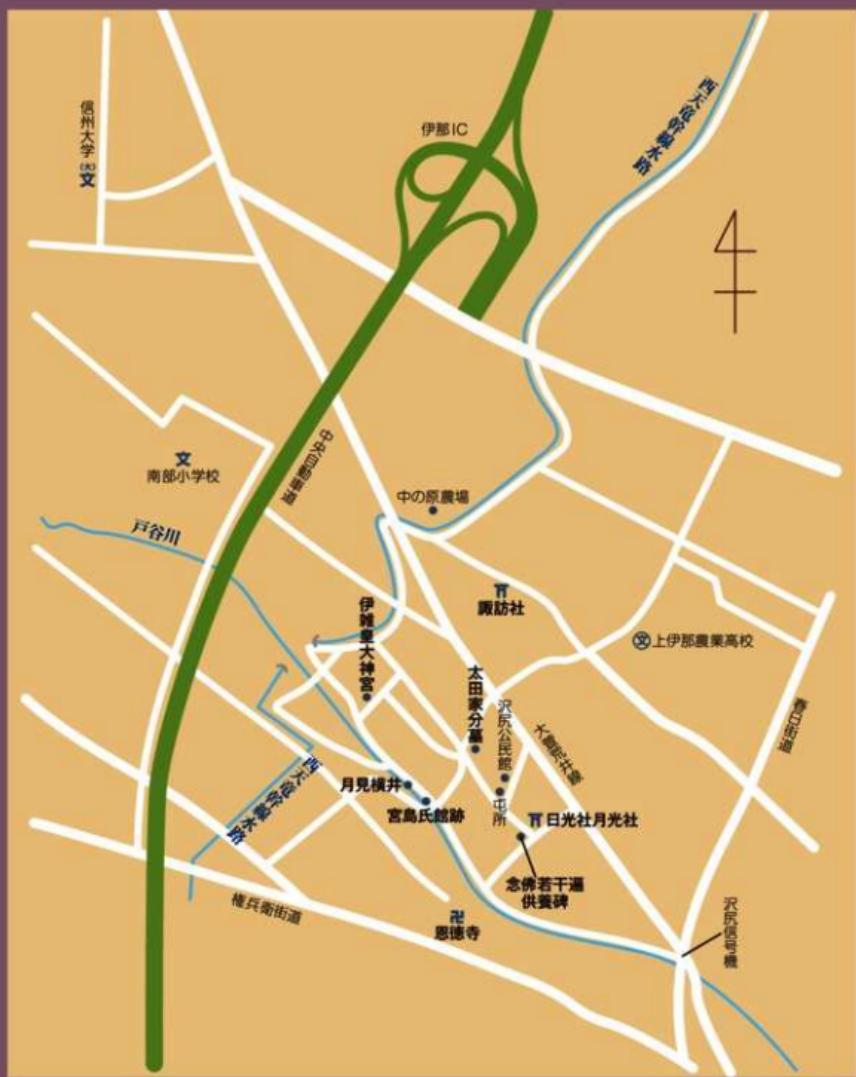


入舟へ向かって進められた工事風景

道路になりましたが、交通がさらに激しくなつたために、昭
和四七年（一九七二）伊那バイパス（神子柴～入舟間）として
天竜川の堤防の上を走る広い道路が開通しました。この道路
はその後小黒川まで延長されました。

旧国道（神子柴～沢渡）は、県道一四六号線となりました。

第八 沢尻



一 沢尻の由来

古くは沢渡といい、その後沢尻と改められました。この地名の由来は定かではありませんが『長野県町村誌』によると、建御名方富命が猛獸を追いつめた極みの地の意味で、ここから沢を渡る所、言い換えれば沢の尻、沢尻と称したといわれています。

また、羽広山王権現の棟札に文応年間（一二六〇）一二六一）に沢尻居住の神職宮島津盛が御射山社再造の式を行つたという記述があり（『長野県町村誌』）、かなり古くからあつた村と思われます。文禄元年（一五九二）になって里長と神職を兼ねていた宮島式部一族が、近郷の住民に襲われて数人で他地区に逃れ、この時より村が亡くなってしまいました。

その後式部は姉の嫁ぎ先、久保の城主棚木四郎を頼り久保に暮らしていました。やがて承応年間（一六五二～一六五四）になつて、再び一族と共に沢尻へ帰つて村を構えました。これは明暦二年（一六五六）との説もあります。それから「久保村沢尻」と称して明治八年（一八七五）まで久保村に属していました。また昭和三〇年（一九五五）に中ノ原が沢尻に合併しました。

沢尻耕地の明治一六年（一八八三）の人口は一二一人でした。

たが、戦後信州大学農学部が設立され、昭和四九年（一九七四）には長野県上伊那農業高等学校も移転してきて、更に伊那インターの開通や平成八年に南部小学校が開校されて発展し、平成三〇年の沢尻区は六五七世帯、人口は一四一二人です。

二 神社

（一）日光社月光社

恩徳寺から北に一〇〇メートルほどのところにあります。古くは下日光平にあつたものを、今の日光平に遷したそうです。

祭神 天照大御神

月讀命

由緒

いつ頃創建されたか定かではありませんが、棟札によると明和四年（一七八七）に建立され、「日光大権現社」と称し、神主は伊藤伯耆守、大工は伊那市小沢の小林喜右衛門と記されています。同じ明和四年に「月光大権現社」が建立され、『伊那郡神社仏閣記』には「日光大権現」とあります。二社が合殿されたのですが、いつかは分かつていません。嘉永五年（一八五二）に覆屋が造られました。明治一〇年（一八七七）



日光社月光社

には久しく風雨にさらされ
祭典も滞っていたのを憂え
て、覆屋を村中で葺き替え、
祭典も復活させました。

明治四一年（一九〇八）
年に、氏子の少ない神社は
合祀するよう県知事から訓
令があり、辰野町川島の飯
沼沢の諏訪神社に合祀され
ました。しかしそれは帳簿
上の合祀で、実際はそのま
まで祭典も毎年行われてい
ました。昭和二七年（一九五二）の五月に県知事の許可を得
て、神社本庁に所属する神社となり、今日に至っています。

社殿
覆屋は銅葺。本殿は一間社流造、擬宝珠勾欄の縁を廻し、
脇障子があり、屋根は柿葺きで、一重繁垂木です。拝殿は昭
和五一年（一九七六）に建立されました。

本殿内には、諏訪社（文政九年—一八二六）、御射山宮（嘉
永五年—一八五二）、式部明神（明治二年—一八六九）、稻荷
社（文政九年）、寿命天神社、簡男三社、伊知氣社、弁財天
社などの十五社が祭られています。

また、境内社には東に木造の秋葉神社と石碑の蚕玉神があ
り、西に石祠の天満宮があります。



秋葉神社（左）と蚕玉神（右）



天満宮

(二) 伊雑皇大神宮
祭神 宮島氏館跡から西に二〇〇メートルほどの丘の上にあります。
天照皇大神など
思われます。

由緒

創建など定か
ではありません。

明治四一年（一
九〇八）に区内



伊雑皇大神宮

の小祠を合祀した際に、この神宮だけは合祀できませんでした。村人はこの宮を「いぞうこうさま」とか「おこわさま」と言つて、十二月二十日を祭日として祭祠を怠らなかつたそうです。現在は、祠でなく石碑が建てられています。

碑陰には、次のように記されています。

奉納祀伊雑皇大神宮 文政十三庚寅歳一月廿七日 氏子中
奉上屋替伊雑皇大神宮 明治三十三年一月一日 氏子中
奉再建伊雑皇大神宮 昭和二十年二月二十日 氏子中
平成元年 秋之建 講中

(三) 講中

イチイの木の下に石碑があります。
祭神 建御名方命

由緒

西天童の開田に当たつて、入植した人々が奉祀した神社です。



講中

三 恩徳寺

沢尻区のほぼ中央丘の上にあります。

(一) 本尊 不動明王

由緒

恩徳寺は以前は薬師堂で、薬師如来を本尊とする寺で現在の庫裏のところにありました。寺伝によると、建永二年（一一〇七）真海法印の開創の祈禱寺で、春近郷

（伊那市西春近表木）

にいたる一切のもの

を、明治一七年（一八八四）に現在の地に移

しました。



恩徳寺全景

現在は「沢尻のお不動様」として近郷の人々から尊崇されています。本尊が不動明王

とされるまでには、次のような経過がありました。

明治維新まで、箕輪領のうち五千石の領主であつた太田資智の奥方である梅崎は、維新の後不幸せが続いていました。

ある夜梅崎の夢枕に不動明王が現れ「成田不動明王を迎えてつれ」とお告げを受けました。これを聞いた沢尻村の人々は、梅崎のためにも、世の人々のためにも、成田不動を迎える決仕と努力によって、明治二三年（一八八九）現在の庫裏のある場所に本堂が完成しました。

（二）本尊以外の仏像

1 本尊不動明王（南箕輪村指定文化財）



本尊不動明王

不動明王は火焔光
背を背負い、巻髪の
弁髪、蓮の花を付け、

憤怒の相をして、制
多迦、矜羯羅の二童
子を脇侍としていま
す。千葉県成田山新
勝寺の行場に安置さ
れていたものを、明
治一七年（一八八八

四）に迎えて祀られました。江戸中期の仏師、不動金兵衛の作と伝えられています。

2 不動明王一体（南箕輪村指定文化財）

（一九〇二）伊

那市西春近上嶋

の法性院から一
体、神子柴金剛

院から法性院に
移されたもの一
体を、一緒に迎
えたと伝えられ
ています。作者
は不明です。

3 薬師如来



薬師如来



不動明王（金剛院）



不動明王（法性院）

沢尻に古くから

あつた大峯講

の人たちが、大

和の大峯から迎

えたものだろう

と伝えられています。

年代・作者とも不明です。

5 十三仏

明治二八年

(一八九五) 伊

那市西春近恩徳

寺から迎えました。作者など不明です。

6 仁王像

昭和五三年(一九七八)建立



仁王像



十三仏



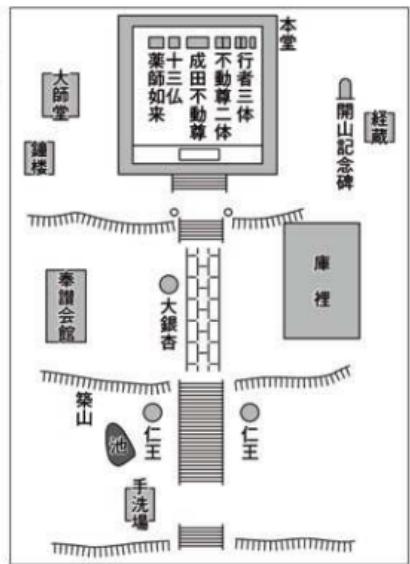
行者

(写真は三体の内の一體)

(三) 堂宇
1 本堂

昭和四年(一九二九)に新しく造られた手洗を左に、昭和五三年(一九七八)に作られた仁王像を仰いで石段を登ると、正面に本堂があります。本堂は「前方二面吹き出し」の建築で、唐破風の正面に雲の上を鶴が飛んでいる「兔毛通」があります。

柱は全部自然石の上に立ち、床から下は八角で床上は円くなっています。外陣の天井は格天井で柱の間が吹き通しています。外陣と内陣の間は格子窓になっています。屋根の四隅は太い「二重隅尾檼木」で、四隅の間には「二



恩徳寺平面図

重繁種木

三斗の斗組

4 経蔵

大般若六百卷および十六善神幅などを収めています。

明治二八年（一八九五）建立されたものを今の場所に移しました。

の上に更に「花肘木」を

のせて桁を受けています。

四方の隅の柱や向拝柱に

象と獅子の彫刻の木鼻が

付いています。

本堂

二重虹梁の間には龍の彫刻があり、上の虹梁と輪樋木や菖蒲棟の間に

獅子のぼたんの彫刻を充填した見事なもので

本堂建築の棟梁は、諏



2 大師堂（旧辻堂）

恩徳寺の宗派は真言宗智山派で、中央に本尊の大日如来を、西に宗祖の弘法大師を、東に中興の祖の興教大師を安置しています。

平成一六年に、旧本堂の場所に新築しました。

3 庫裏

訪市湖南の大隅流の伊藤義範で、彫刻は立川流の流れをくむ木曽郡上松町の林作十の作です。伊那市長谷非持の伊藤助弥もこの建築に従事し、南・北・西隅の三箇所の木鼻はこの人の彫刻です。

4 鍾樓

昭和四八年（一九七三）建立

5 奉賛会館

昭和三二年（一九五七）建立

檀信徒の休憩所です。

6 棚

幹の周囲三・五メートル、高さ二〇メートル、地上三メートル程

で四方に枝分かれし茸状になつており、秋の黄葉は見事です。言い伝えによると、恩徳寺の前身薬師堂の時、境内の大銀杏を切り、本堂の薬師如来を刻んだと言われ、その切り株に生えたのが現在のものであるとのことです。



大銀杏

四 沢尻学校跡

沢尻学校は、明治六年（一八七三）六月一日創立の久保学校の支校、久保沢尻支校として発足しました。場所は恩徳寺（当時の薬師堂）の庫裏であり、唐沢金一郎氏が教員であつたと言われています。古い沢尻耕地の図面によると、「三二四番、学校、三畝一六歩^{せき}村扣（約三五〇平方メートル）」とあります。

明治十年（一八七七）四月九日学区改正により「沢尻学校」となりましたが、同年一二月一二日今の伊那市伊那小学校との合併の相談がまとまりました。しかし、雪の深いときは本校から教員がきて、通学困難な児童の教育をする約束がありました。

それ以来沢尻の児童生徒は、行政区画の異なる伊那市の伊那小・中学校へ通学していましたが、平成八年に新設の小学校として南箕輪村立南部小学校が開校したので、同校と南箕輪中学校に通学するようになりました。

五 宮島氏館跡

宮島氏館跡は、恩徳寺を西に一〇〇mほどのところにあります。沢尻の字古屋敷にあつたと言られていますが、はつきりとは定まっていません。古絵図には「長者の井」「拝殿」「神殿」「的射場」などもあります。

『長野県町村誌』によると、関ヶ原の戦いの少し前、文禄初年（一五九二）までは宮島氏がこの地に邸宅を構え、里長と神職を兼ねていました。それよりずっと昔の文応年間（一二六〇～一二六一）には御射山社^{みさやま}が再造営され、その式を執り行つたのが宮島氏でした。また羽広山王権現^{ひろやまのくわんげん}の棟札には、「宮島津盛」の名が記されています。これらから宮島氏は古くから箕輪郷の総社である御射山社の神職であり、他の社の神職も兼ねた実力者であつたことが推測されます。



宮島氏館跡（明治初年）

六 碑

(一) 成田山開山記念碑

昭和一六年（一九四一）建立

恩徳寺本堂の西に建っています。碑文には恩徳寺の由諸が書かれています。（おんとくじ）題額は太田資時の筆で、碑文は真輪町木下

の笠原政市の撰（そん）文により、片桐安司の筆です。

建立は唐沢恵泉個人の志によつたものです。



成田山開山記念碑

(二) 庚申塚

日光社月光社の上り口にあります。

庚申 年代不詳

庚申 大正九年（一九二〇）

庚申 昭和五五年（一九八〇）

甲子 元治元年（一八六四）

甲子 大正一三年（一九二四）

甲子 昭和五九年（一九八四）



庚申碑



水神碑

(三) 水神
伊雑皇大神宮の右隣にあります。
水神 大正一三年（一九二四）春日



甲子碑

(四)

供養塔

念佛若干遍供養塔
わなぶんじゅうさんへんぐやうとう

(1)

文化三年（一八〇七）

日光社月光社の南にあります。

(2)

大乘妙典一千部
だいじょうみょうでんせんぶ
日光社月光社の南にあります。

(3)

文政五年（一八二三）

年代不詳

念佛供養 大荒井

線と恩徳寺から
の道の交差点に
あります。



念佛若干遍・大乘妙典供養塔

(左は馬頭観音)



念佛供養

(五)

「舊領主太田家分墓」碑

（江戸時代箕輪領主）

年代不詳

日光社月光社から西に上る道を進み、沢尻屯所から一〇
○歩程行つた所にあります。すぐ西には唐澤家の墓がまと
まつてあり、古老によると唐澤家の先々代が建てたとのこと
ですが、いきさつは不明です。



領主太田家分墓

(六)

丁石

丁石とは伊那市坂下の辻を出発点に、伊那市西箕輪の羽広
山神仙寺（羽広觀音）に参拝する道に、一丁（一〇九歩）ごと
に安置された高さ五〇センチメートルほどの觀音像のことです。
伊那市の小沢川の室渡場橋へつづく坂道は昔から「十丁目
の坂」と呼ばれていますが、坂を上りきつて沢尻に入つてい

ぐ大萱荒井線沿いに、八つの丁石があります。（南箕輪村地

篇内）

一五丁石は沢尻信号機の西の道路北側にあり、一七丁石・

二〇丁石・二四丁石・二八丁石・三〇丁石・三三丁石・三四

丁石（大萱信号機手道路南側）が建てられています。丁石には

施主名や村の名前、丁番が彫られています。伊那市の上牧、溝

小沢、羽広などに混じり、高遠の下山田や長谷の非持村、溝

口村、黒河内村、そして今の沢尻の施主名も見られます。



丁石(24丁石)

七 横井戸

(一) 月見横井

宮島氏館跡の西

にあります。この

横井戸は大正時代

に掘られたものと

思われます。戸谷

川右岸の小崖に掘

られた横井戸で、

夏の渴^{かづ}渴期には枯

れてしまう戸谷川

の代わりにこの水

を使つたそうです。

この水は伊那市小

沢の月見松付近の

水を引いてきてい

るので、月見横井

と呼ばれています。

他にも横井戸が幾つか掘られたようですが、



月見横井

八 学校関係

(一) 長野県上伊那農業高等学校

明治二八年（一八九五）伊那村（現伊那市狐島四一八三番地）に仮校舎を設けて開校し、正科・冬期科を置きました。翌年新校舎が落成し移転（現伊那市中央四六〇五番地—伊那警察署辺り）し、開校式が挙行されました。そして明治三二年（一八九九）郡立上伊那甲種農学校と改称されました。明治三七年（一九〇四）に

県立移管し、長野県立上

伊那甲種農学校と改称さ

れました。更に明治四四年（一九一）長野県立

上伊那農業学校と改称さ

れ、昭和一〇年（一九三五）学則改正により上農

寮に第一種（修業年限三

年）を収容し塾風教育を

創設しました。

昭和二三年（一九四八）長野県上伊那農業高



上伊那農業高等学校（校門付近）

等学校と改称、農業科、林業科を置きました。また昭和二五年（一九五〇）農業科に女子生徒が入学し、上農寮は経営農場（第二農場）と改称されました。

昭和四六年（一九七一）に南箕輪村から寄贈された土地に新校舎が起工され、昭和四九年（一九七四）新校舎へ移転しました。そして、昭和六三年（一九八八）には生物工学科が設置されました。

現在は、生産環境学科・園芸科学科・生物科学科・緑地創造科・生物生産科・生命探求科・アグリデザイン科・コミュニケーション科と多くの科があります。

明治二八年（一八九五）、上伊那郡立上伊那簡易農学校として開校して以来一二〇有余年の間、上伊那地区の農業の基幹校として、一万九千名を越える人材を社会に送り出しました。

(二) 長野県上伊那高等学校 中の原農場（上農寮）

中の原農場は神子柴地籍にありますが、農場の門柱から入つて左にある碑文には、このように記されています。

「この農場は、塾風教育として全国に知られた農業実践教育の舞台となつた地である。

時の校長 村上明彦は、昭和初期の経済恐慌で疲弊していた農村の窮状を開拓するため、青少年の強固な精神力を涵養し優れた農業自営者の養育を図った。理念に賛同した三町

村（伊那町・南箕輪村・西箕輪村）から広大な原野の寄贈を得て、上農寮塾風教育が創設された。

高学年は一ヶ年、全校生徒は適時、教師と共に宿泊して真摯に学んだ。

一九三五年（昭和十年）開墾開始

第一農家（正大家）稻作主体

第二農家（明徳家）果樹主体

第三農家（誠敬家）養蚕主体

第四農家（極天家）畜産主体

戦後この地は第二農場として当番の宿泊を併せて、農業教育の場として長く活用されている。
二〇〇一年（平成十四年）名称を旧に復して、中の原農場とした。

上伊那農業高等学校、並びに同窓会は、同校創立百十周年を記念してこの農場を整備し、学校の好意で愛称を村上記念農場とした。

二〇〇四年（平成十六年）十一月十三日

上農寮塾風教育は学校長の村上の手記によると、予想以上の成果を上げて、昭和一四年は入学志願者が二二〇名にもなりました。また、当民間人の旧満州への移民が進みました。昭和一二年に日中戦争が開戦しました。大陸農業開発による食料の飛躍的増産と農民の指導啓発は戦力増強上重大な要務

と村上は考え、昭和一五年四月に学級増加を行い、第一種の第五学年に内地科・大陸科の二学級を編制しました。

中の原農場の門柱から入っていくとユリの木並木があり、更に進むと駐車場があります。

その反対側には小屋が建てられ、その手前には上農高校創立一一〇周年と定時制創立五五周年を記念して平成一六年に建立された「寮歌の碑」が、そしてその奥に昭和四〇年に建立された村上明彦の胸像の碑があります。

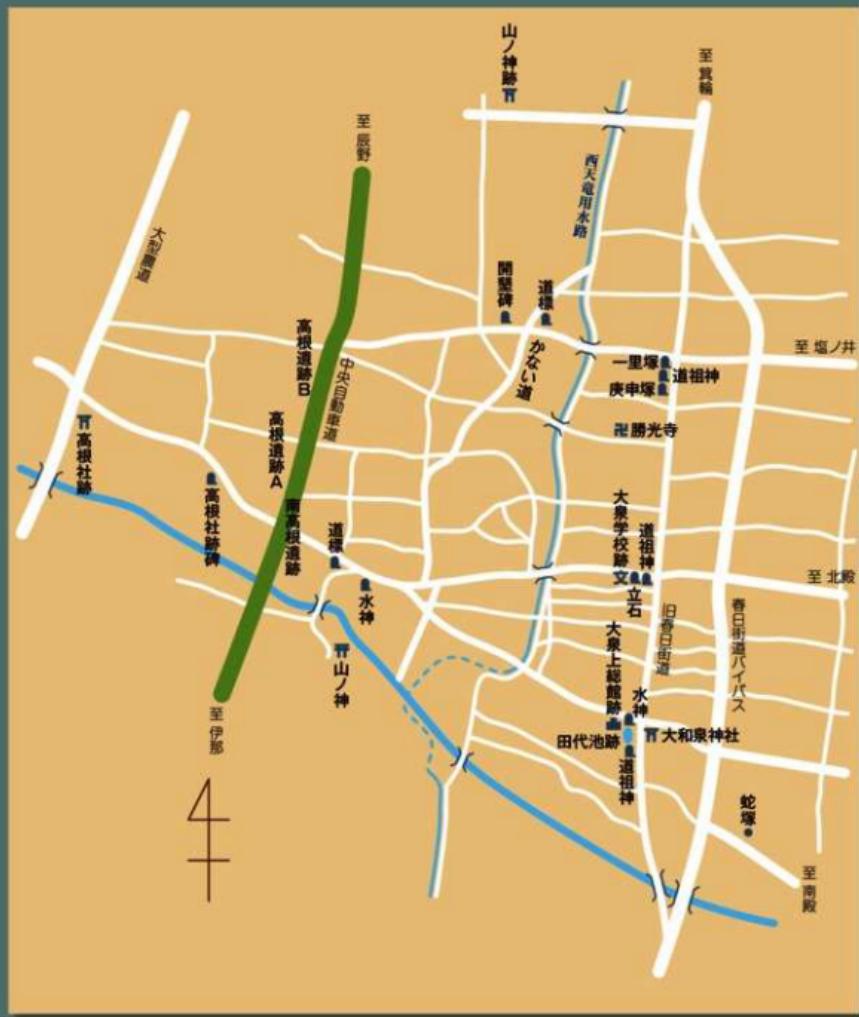


村上明彦胸像



上農寮 入口

第九 大 泉



一 大泉の由来



下井頭首工

大泉という集落名が近くを流れる大泉川に由来しているのか、集落名から河川が大泉川という名称を得たかは文献上からは明らかではありません。大泉を尾泉と記した古文書があるといいますが、古い時代には当て字で地名を表記すること多くありましたので、尾泉という字も当て字の可能性はありません。

しかし、帶無川が尾水無川と記された文書があるといいますので大泉川は尾泉川であつたことも考えられます。「尾」を下流という解釈をすれば、下流に泉のある川の意でしょうか。そうすれば他の近隣の河川（大清水川・小沢川・小黒川など）が「お」で始まる事実の解釈にもなります。また、大泉の集落名は河川の名称に由来することになります。

大泉と「大」の字で記すのは和銅六年の「諸国郡名著好字令」以来全国的にしばしば行われてきた瑞祥地名の流れによる

ものであり、大という好字をあてたものと思われます。永録年中（一五五八～一五六九）の鹿祭りの古文書に大泉と書かれたものがあるというので、一六世紀には既に大泉という集落名を使っていたのでしょうか。また、殿村八幡宮の古文書に「大和泉村」と記されたものがあります。最古のものは慶安二年（一六四九）と記されておりこれもまた「大」と「和」という好字による瑞祥地名表記であると思われます。



殿村八幡宮文書

繩文時代、現在の中央自動車道周辺には人々が住んでいました。北高根遺跡からは県宝となった釣手土器が見つかっています。大泉は大泉川の段丘北側に東西に長く発達した村であり、高根社がその中心であつたといわれています。天文年中（一五三三～一五四四）に福与城の戦で活躍した大泉上総（武士が本姓の他、地名を名乗ることは往々にしてありました。）は、大泉に館を構えていました。

慶長二年（一六〇八）、春日街道ができると、宿場として各戸に八間の町割をして南北に長い村となりました。塞ノ

神としての役割を成している立石（庚申塔）や道祖神の位置、「中村」や「市場（通常常村の端に市場ができた）」という小字の位置等の事実から春日街道開鑿時は、村の規模は、大和泉神社（近くに村南の道祖神がある）から春日街道旧道と県道北殿・吹上線の交差する四つ角までであったと思われます。勝光寺が宝堂院跡から現在大泉第二公民館のある地へ移り、その後、春日街道に沿って更に南北に長い村に発展しました。

唐松公園にある道祖神は安政七年（一八六〇）建立が記されています。

慶安元年（一六四八）には大泉新田が村として独立しました。また、慶安二年（一六四九）には北殿との合宿として伊那街道へ問屋一戸、伝馬六戸が移っています。

大泉川の扇状地扇央部にあるため、古来、水を得るに苦労した村です。稲作ができる場所は小字「田代（大和泉神社前旧春日街道の西付近一帯）」などの場所に限られていて畑作が中心でした。大泉川の上流から長い水路を引き、家の敷地内に井戸を掘り、段丘を利用して横井戸を探り、生活・耕作をしてきました。大泉新田の上部付近（下井開鑿当時大泉新田は未開拓・現在の吹上橋よりや上流）からの水路である下井は戦国時代にはできていたといわれています。上流の吹上や大泉新田との水争いは西天竜用水路が完成するまでは絶えませんでした。昭和三年（一九二八）の西天竜用水路竣工、

昭和十年の開田竣工以降の時代は、上手田の用水路をコンクリート化し、上下水道が完備されて生活用水も灌漑用水も豊かに利用できるようになりました。

明治七年（一八七四）に世帯数八十戸四六〇人だった戸数・人口は平成三十年（二〇一八）には五一八戸、一四九一人になりました。

二 神社・仏閣

（一）大和泉神社

大和泉神社は大泉区の南方にあり、大泉川の段丘の上に位置し、春日街道旧道に面しています。諏訪大明神社本殿と鹿頭祭及び猪守稻荷神社本殿は、村の指定文化財になっています。

祭神

建御名方命（諏訪大明神社）

伊弉冉尊（高根神社）

速玉雄命（高根神社）

事解男命（高根神社）

由緒

明治四〇年（一九〇七）一月二日、諏訪大明神社と高

根神社等を合祀して、「大和泉神社」と改称しました。

諏訪大明神社の創立は明らかではありませんが、御朱印高五斗の社領を持つていたので、江戸時代のはじめにはすでに相当の社格を持っていたと思われます。さらにさかのぼって、戦国時代末期の永禄年中（一五五八～一六〇九）には鹿祭りが始まっていることからみて、大泉の諏訪大明神社は箕輪の惣社南宮神社に属する神社の中でも、この頃既に有力な神社であったと思われます。棟札によると明和六年（一七六九）に建て替えられています。文政九年（一八二六）焼失したため、文政二年（一八二九）に再建されて、今日に至っています。

春日街道から石段を上つて境内に入ると、高い常夜灯が左右に一基ずつ立っています。石の御手洗が神社に向かって右側にあります。入り口に近いところに、柱を持つ両部鳥居が立つ



大和泉神社(平成30年)



大和泉神社(昭和50年頃)



大和泉神社(昭和初年)

てます。銅板で覆つた木製で真新しい扁額には「大和泉神社」と揮毫されています。近年更新したのですが、旧い扁額には「諏訪大明神」と刻まれています。その奥に石製の鳥居があります。明神鳥居です。さらに常夜灯が左右に一基ずつ据えられています。「天保十四年（一八四三）八月奉納」と記されています。なぜ鳥居が二基あるのかは不明です。「遷座合祀したとき鳥居も移設した」「鳥居を新調したとき旧い鳥居を壊さずそのままにした」などが考えられます。



諏訪大明神社本殿

殿は、文政二年（一八二八）七月

諏訪高木村の立川

流宮大工小口直四

郎（棟札には小口

求四郎）が請負の

一札を入れ、翌二年九月に竣工しています立川流の特徴を

顕著に形にした建築様式上も、美術史上も貴重な社屋です。

拝殿は入母屋造り正面唐破風瓦葺（昭和の屋根修理により現在は銅板葺）で虹梁と桁の間に龍の彫り物、木鼻には象や獅子の彫刻が刻まれています。正面や瓦、大棟には「丸に諏訪桿」の紋が施されています。

本殿は、覆屋の中に安置されています。覆屋の大棟には、

「諏訪桶」の紋があり、これは諏訪大社上社、南宮神社の紋とほぼ同じです（若干のデザイン的な違いはあります）、根本部分の本数は四本です。

本殿は、六尺の一間社で流れ造り正面唐破風です。向拝柱は面とり角柱、頭貫は虹梁様、木鼻は象です。正面虹梁と桁との間には鶴に仙人の彫刻があり、破風の下の軒の桁

も虹梁様彫刻があり、中心の棟との間に彫刻があります。卯の毛とおしは龍で、母屋と向拝の虹梁も龍を彫刻したえび虹梁です。正面長押と台輪の上にも彫りもの置き蛙股があり、柱の上の組物は二手先斗棋で



諏訪大明神社本殿脇障子の彫刻
(竹林の七賢)

向拝の前は浜縁になつていて五段の木階、擬宝珠勾欄を設けています。背面は横板張り、両側面には七賢人の彫刻が施されています。

右側にある熊野社本殿は高根社から遷座したもので、一間社流れ造りの階段のない見世棚造りです。柱は全部角柱で、貫は絵様くりがた、妻は大瓶束です。

鹿祭り（村指定文化財）

大和泉神社境内に勢揃いした稚児が、行列をつくり鹿頭の冠り物をつけ太鼓に合わせて左回りに三回、廻つて奉納する祭りです。お鹿祭り或いは鹿頭祭と呼んでいます。古来より天童川西の集落の鹿頭は、大泉で合流し諏訪大明神（大和泉神社）に奉納、その後南宮神社で奉納するという形をとつてきました。

この祭の起源は明確ではないのですが、永禄年中（一五五八—一六六九）に大干ばつがあり、雨乞いをしたところ大願かなったので御礼に鹿頭七五を出したのが始まりであるといいま



鹿祭り（平成29年）

されています。



熊野社本殿

す。また、諏訪では年々御射山で明神の大祭を行つています。近在では三日町にその例式が残っています。これははじめ西山の御射山平で行われたものでした。鹿祭りはこの御射山神事の残つたものかともいわれています。七五という数字は諏訪神社の猪鹿七五をまな板にのせて供えるという御頭祭の数とも一致しています。起源は御射山神事或いは御頭祭の可能性はあると思われます。

南宮神社は箕輪郷一万石の中心的な社であつて箕輪二七箇村住民の信仰の対象でありました。子どもの健全な成長や雨の恵みによる豊穣な農作物は民の切実な祈りの表れであろうと思われます。

(二) 境内社

1 痞守稻荷(村指定文化財)

諏訪大明神社の北に西面して祀られています。

祭神

豊宇氣比売命

由緒

もとは春日街道の西側(二〇〇四番の口)にありました。

明治一二年(一八七九)三月現在地へ引宮しました。天明年中(一七八一〜一七八八)に飛驒国の人茂助といふ人が江戸の在、谷中の笠森稻荷の神主方へ奉公し、國許へ帰る途中大泉に来て番人・下僕を勤めるようになりました。その時、この

稻荷社の分靈をここに祀つたということです。

現在の本殿は三度目の改築で、原直八によるものです。覆屋の中に安置されているので、外からはよく見えませんが唐破風に千鳥破風の手の込んだ細工が施された社殿です。



瘞守稻荷本殿

2 天満宮

諏訪大明神社の南の祠に西向きに祀られています。

祭神 菅原道真

3 蚕玉社

諏訪大明神社の北の祠に西向きに祀られています。原此右衛門作の石像の蚕玉神です。なお、大泉の市場の蚕玉神も昭和五〇年(一九七五)に合祀されました。

4 太子様

諏訪大明神社境内の北側の祠に南に向かって祀られています。建立不詳。昭和四七年(一九七二)春日街道バイパス開鑿によつて遷宮しました。

(三) 高根社・山の神

1 高根社

大泉集落の西方、高根信号機の南東に高根社跡があります。現在は祠と昭和二十二年（一九三七）建立の熊野三社跡の碑があります。旧来の高根社は明治四〇年（一九〇七）に大和泉神社に合祀されました。中央道の西約三〇メートルの地点、大泉・吹上線の南側に高根神社の碑があります。付近の田の中から出土ものであるそうですが、この位置にあらゆる理由等は分かりません。



高根社跡碑



高根社(熊野三社)跡

井坂に遷座されました。近年ですかいつ行われたかは分かりません。

現在荒井坂の社は「ふるやまのかみ」と呼ばれています。社殿はありません。近くに多くの馬頭観世音の碑が安置されています。

(四) 大泉山勝光寺

西部保育園の東にあります。

本尊

十一面觀世音菩薩

村指定文化財です。

十一面觀世音菩薩といわれてきましたが、手の形（合掌）と宝珠または鉢の持仏は千手觀世音菩薩です。十一面觀世音菩薩なら通常二臂で水瓶と願印などではなくてはなりません。頭上に十一面を有するのは十一面觀世音菩薩も千手觀世音菩薩も該当します。しかし、千手を付けていた痕跡は認められません。仏像の手の形や持仏は功德を示し非常に大切です。「千手觀世音菩薩立像」或いは「十一面菩薩の功德を残した「一面千手觀世音菩薩立像」ではないかと考えられます。

由緒

勝光寺は古くは大泉の北西、字宝堂院の地にありました。御嶽神社碑・清澤靈神碑があります。大泉北部字北原の神社林の中にも山の神がありましたが荒井坂東、大泉川南の山林中に祀られています。

2 山の神



勝光寺

本尊は羽広仲仙寺、上古田正全寺と姉妹像であるといいます。しかし、観察によれば羽広仲仙寺の像とは仏師が異なると思われます。また、大泉上総はこの仏像に強い信心を寄せたという言い伝えがあります。江戸時代の民衆から考へて、大泉上総が活躍した天文年間（一五三二～一五五五）には

が岳修行時の作であり、羽広仲仙寺、上古田正全寺と姉妹像であるといいます。しかし、観察によれば羽広仲仙寺の像とは仏師が異なると思われます。また、大泉上総はこの仏像による修理の記録

きに変わっていると思われます。

一説に、本尊は平安時代前期天台座主であつた慈覚大師の経

寺と記した板の位置（寺としての向き）は、東向きから南向

きに変わっていると思われます。

昭和十三年春までは、堂宇の修理も同時に行つていています。

昭和十三年春までは、堂宇の修理も同時に行つていています。

昭和十三年春までは、堂宇の修理も同時に行つていています。

の僧侶がいましたが、以降、無住となり現在に至っています。

堂宇の東北部の外部から見える格子戸の中に十王像があります。現在、高齢者によつて春の彼岸には彼岸会を行つて造花をしたり、五月八日（月遅れ）には灌佛会をし数珠回しをし甘茶を配つたりしています。

（一九七九）には堂が大修理されました。

勝光寺什物には本尊の他、釈迦涅槃図一幅・四天王像二体・仁王像一体・伏鉢一・大數珠一などがあります。涅槃図は、掛け軸の裏に『安永六年 丁酉 二月吉日 信濃伊奈郡 大泉村 観音堂 什物 発願主 庵主 玄門 施主 観音講中』と記されています。安永六年は、一七七七年であり、



勝光寺十王像



勝光寺・四天王



勝光寺釈迦涅槃図

近郷の寺院の涅槃図（明治以降のものが多い）と比較して多い

古いものであるといえます。

四天王像二体は手

や持ち物が欠けてし

まっているので、四

天王の誰であるかは

わかりません。しか

し、正しく修業を積

んだ仏師の作である

ことは像の姿や彩色

の細かさからわかり

ます。

伏鉢は、裏に「天

保一〇年 亥年 二

月 西村和泉守作

と記されています。

天保一〇年は、一八

四〇年です。江戸の

神田鍛冶町で作られ

たものと考えられます。大数珠や寒念佛塔・念佛供養塔の存在などと併せて考えると、念佛が盛んな時代があつたと思われます。

なお、春日街道西側勝光寺が現在地に移転する前の地（大泉第二公民館）に「郷藏敷」という字名の所があります。こ

こは大泉の郷藏があつた所でもあります。

境内には以下の塔碑があります。このうち廻国供養塔の一基（写真・勝光寺石仏群II・一番右奥）には元禄一二年（一六九九）建立と記されています。南箕輪村内では最も古い廻國供養塔であるといわれています。

境内的石仏

○五輪塔（部分）

一基

権理塚から移したといわれています。

○馬頭観音像

五〇体

○馬頭観音（文字）碑

二基

○聖觀音像

六体

○如意輪觀音像

二体

○地蔵像

四体

○馬頭観音（文字）碑

一基

○南無阿弥陀佛碑

一基

○寒念佛碑

一基

○念佛供養塔

二基

○廻國供養塔

三基

○觀音講中碑

一基

○無縫塔

七基

○墓碑

一基

○秋葉神社碑

一基



勝光寺石仏群Ⅰ



五輪塔(部分)



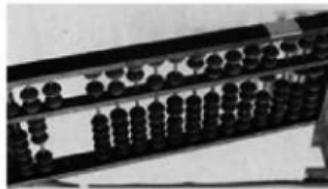
勝光寺石仏群Ⅱ

大泉学校は、大泉村の中央、屋号中西の北側にありました。児童数は明治九年（一八七六）には男四二人、女七人でした。

沿革

大泉では明治五年九月二十四日から、久保南割（塩ノ井）、北殿、南殿と相談して北殿の松林寺で学校をはじめました。明治五年（一八七二）八月一日の学制頒布をうけて、明治六年一〇月二十五日、北殿南殿と大泉で明治学校を設立して教育が行われました。

しかし、遠くて幼童の通学に不便であり雪道の困難もあったので、大泉学校を建てて明治八年四月二十五日から独立開校しました。明治一〇年には合併を県から勧められています。明治一一年七月一日「南箕輪学校」が現在の南箕輪小学校のある桜ヶ丘に創立され、大泉学校は廃止されました。



大泉学校使用のそろばん

しかし、降雪時等の幼童の歩行通学が困難であるとの状況

三 大泉学校

を踏まえ、大泉に出張所をおき教員一名を配置し、この問題に対処しました。その後、明治一六年にも大泉の総代は独立校設置の願いを県に出したり、県の許可なしに学校を始めようとした。明治一九年、田畑・神子柴・久保も合併した南箕輪学校になつて以降も大泉には派出所が置かれました。当時の教育にかける期待の大きさや熱意の高さをうかがい知ることができます。

四 古跡

(一) 高根遺跡

大泉高根、大泉川北岸段丘上にあります。



県宝釣手土器

(二) 大泉氏の館址

昭和四七年一〇月から一一月にかけて、中央道開鑿に関わり緊急発掘を行いました。続いて、大型農道の開鑿により緊急発掘調査が行われました。これらの調査によってこの辺りは古代の集落址として重要な遺跡があることが確認されました。

南高根遺跡からは、平安時代の住

居址一・土壙一が発掘されました。また、縄文時代早期・中期・中期・晚期の土器及び平安時代の陶器が出てきました。縄文時代中期の土器が最も多数発見されました。

北高根A遺跡からは、土壙五・堅六三・縄文期の土器多数と古銭や一世纪後半の美濃産灰釉陶器などが発掘されました。この遺跡は東西一五〇m、南北一〇〇mに及ぶ地域に存在しているものと考えられます。県宝となつた釣手土器二点は北高根遺跡から出土したものです。

また、ここに熊野三社址のあるところから推察すると、平安末期から鎌倉時代には、旧大泉集落はこの神社を氏神としていたと考えられます。

大泉の南端、大泉川の北の低地を字田代といいます。この辺りに大泉上総（本姓は原氏と伝えられる）の館があつたといわれています。ここは、近年まで湧水があり水の便の良いところでした。中世の武家屋敷の常識からすると、防御機能の高い高所に屋敷を構えるのが普通でした。このことを考えると、大泉川の段丘上にも館を構え緊急時に対応し、普段は水の便の良い田代に居住していたのかも知れません。

天文一三年（一五四四）の武田氏と藤澤氏の福与城の戦いに大泉上総は、倉田氏・有賀氏・清水氏・日戸氏などと共に伊那衆・箕輪衆として参加しています。この戦いは小笠原氏の援護もあり大きな戦でした。大泉上総は弓の名手でこの戦いで活躍し四天王のひとりとして『伊那温知集』『伊那志略』などの古文書に名を挙げられています。

なお、天文一四年六月、和睦が成立し藤澤頼親は武田一門衆である穴山信友の配下となりました。その後、藤澤頼親は、三好長慶に仕えるなど転々としますが、天正一〇年（一五八二）、徳川氏と結んだ保科氏によつて急襲され滅ぼされました。

天文一四年の戦いで福与城は敗戦落城したという記述が散見されますが、この戦いでは、和睦条件は藤澤氏に厳しいものでした。和睦が成立しています。西上を目指す強力な武田軍と戦い和睦に持ち込んだ大泉上総をはじめとする伊那衆・箕輪衆の活躍や結束は特筆すべきであろうと考えます。

〔三〕 一里塚址

大泉の北、公園或いは唐松公園と呼ばれる地に一里塚があつたと伝えられ標柱が立っています。正保年間（一六四四～一六四七）に作成された「信州伊那郡之絵図（脇坂絵図）」には、大泉の北端に一里塚の印がつけられています。ここには昭和二七年（一九五二）頃まで唐松の古木が聳え立つてい

ました。古老の話では、春日街道がつくられたとき、間縄の古くなつたものを埋めてそこへ唐松を植えたといいます。

ここには一里塚の他、道祖神・庚申塚・甲子塔・清水翁頌徳碑などがあります。設置された年月は不明なものが多いのですが、庚申塚碑の最古のものは正徳二年（一七一二）です。この時にはここが大泉の村の北端になつていたのでしょうか。



一里塚址



庚申塚碑

〔四〕 蛇塚

大和泉神社の東方約五〇〇メートル、大泉川の段丘を上つた道と交わるところに経塚がありました。その西方約一〇〇メートルの位置に蛇塚跡があります。現在は田の畦に標柱が立ててあります。天正年間（一五七三～一五九一）に時の領主保科彈正が、

家臣の井澤某に命じて、大蛇を退治して埋めたところと伝えられています。天正一〇年は保科氏が藤澤氏を滅ぼした年でありますし、近くにある長慶塚は藤澤氏が三好長慶を埋んで作ったといわれています。いずれにしても藤澤氏に関わる塚が近くにあることになります。歴史的な関連があるのかも知れません。

また、この辺りは、現在も蛇が多く観察されます。蛇の棲息に適した自然環境的条件があるのかも知れません。

(五) 立石

大泉の中央である字市場に立石があります。「たていし」と呼ばれています。道路拡張や消防分団の屯所の移動等に伴い何回か移転されました。古来よりこの四つ辻の南側付近にありました。今は、旧春日街道の西側に東面して立つています。表面は良く読めない様な状態になっていますが、近年、「奉供養青面金剛」(宝永八辛卯年(一七一〇)二月大泉村中」と書かれていることが判明しました。傍らに道祖神もあります。この辺りは昔宿駅がありました。火の見櫓のある広場は



市場立石

慶安二年(一六四九)、北殿との合宿となつた伊那街道に転じる前の屋号角屋のあつた所です。

五 道路

大泉は、天竜川西の段丘上のはぼ中央、大泉川扇状地の扇中央部に位置するので、幾つかの道路が交差する交通の要衝でした。木下方面、羽広・木曾方面、沢尻・小出方面、大泉新田・吹上方面、北殿方面、南殿方面等々への道は大泉経由で通じています。



道標



市場道祖神

(一) 道標

1 道標一

かない道と唐松公園の西方約一五〇㍍の交差点塩ノ井・北殿方面と吹上・中曾根方面を結ぶ道路と木下と羽広方面を結ぶ道路の交差点にあります。「昭和一二年建立」と書かれています。

2 道標二

北殿と吹上を結ぶ道路と大芝・荒井坂方面を結ぶ道路の分岐点にあります。「昭和一二年建立」と書かれています。

(二) 春日街道

春日街道は、小笠原秀政の命により、奉行春日淡路守により開鑿されました。慶長六年（一六〇一）着手、慶長一三年（一六〇八）頃の竣工です。一説にこの春日街道は、重要な古代官道であった「東山道」を改修したものであるといいます。伊那市山本以北の東山道のルートは三説ほどあります、が、春日街道が高いといわれています。



信州伊奈郡協坂絵図(部分)

春日街道は、小笠原秀政の命により、奉行春日淡路守により開鑿されました。慶長六年（一六〇一）着手、慶長一三年（一六〇八）頃の竣工です。一説にこの春日街道は、重要な古代官道であった「東山道」を改修したものであるといいます。伊那市山本以北の東山道のルートは三説ほどあります、が、春日街道が高いといわれています。

形は、春日街道の宿がここに置かれたときに八間の町割等、計画的に家屋を配置したものが原型となっています。

近年高度経済成長に伴い自家用自動車での移動が中心になりました。国道一五三号線の自動車の往来が激しくなり、旧春日街道の拡幅舗装整備の需要が高まりました。大泉区内の春日街道は道路沿いの住宅も密であり拡幅は容易ではないことから、昭和四七年（一九七二）区内の東側に春日街道バイパスが開鑿されました。

以降、久保・北原方面への住居家屋の新築が著しくさらに北方向へも集落が長くなりつつあります。

(三) かない道



大泉の北東方面から南西方面に斜めに通じる道路。北東方

面は屋号紙屋の北東、西天童用 水路の東側は西天耕地整理のためわかりませんが、方向的に考えて久保の箕輪坂を通じるのではないかと思われます。南西方 面は大泉川の渡河位置は分かるのですが、大芝の開墾や西部開発の耕地整理により大泉川南の段丘上が不明です。しかし、方角と古來の集落等を検討すれば

羽広方面に向かっていることがわかります。羽広には「かなば（かないば）」と呼ばれる場所（みはらしファーム付近）があり、伊那市平澤で出た砂鉄（鉄は鐵ともいう）を農具に鋳造したといいます（一説に仲仙寺の鐘を鋳て失敗したといいます）。この道はそこに通じる道であり、さらには代官所のあつた木下と木曾福島を結ぶ木曾道であつたと考えられます（古来道は通じている先の名前を街道につけました）。「かなば道」である「かない道」は「鎌鋸道」ではないかと思われます。

六 碑

(一) 庚申塚など

1 市場の碑

前述の大泉市場の四つ辻にある立石は庚申塚の碑です。

この他に屋号神屋（現在立石のある隣り）の西南に道祖神

廻国巡礼塔

白衣觀世音碑

大日本神社伝閣□碑
があります。



甲子塔一里塚跡

2 唐松公園の一里塚周辺の碑など

○奉供養庚申塔 正徳二(一七一二)年壬辰^{ねんじん}二月吉日
願主 大泉中
(上に日月、下に三猿の像があります。)

○庚申 寛政十二年(一八〇〇)

○庚申 安政七年(一八六〇)

○庚申 大正九年三月(一九二〇)

○庚申 昭和五五年三月(一九八〇)

○庚申 (年号なし)

※唐松公園の一里塚周辺にはこの他次の碑があります。

○一里塚址碑・一里塚説明の碑

○甲子 大正十三年(一九二四)

○甲子 大正十三年

(一九二四)二月 大泉中

○念佛塔 寛延三年

○念佛供養 寛延三年

(一七五〇) 辰十二月

○寒念佛 宝曆十年

(一七六〇) 辰三月

○道祖神(次項に再掲)

○馬頭□□ 明治□□午三月

○馬頭觀世音

○馬頭観音像 □化十六年二月

○地神 年月不記

○清水重賢翁碑

清水翁は 屋号

中西の人で農業

をしながら学問を

しました。近郷か

ら教えを請い学び

に来る人が多かつ

たといいます。明治三八年（一九〇五）門弟によりこの碑が

（二）道祖神

1. 大泉中央の字市場の立石
2. 大泉中央の字市場屋号碑

原 周□妻

屋の宅地西南

（古老の話では榎屋の西北
より移動しているといいま
す。）

□□十二已七月

願主辰吉



田代道祖神



清水重賢翁碑

建てられました。

T. T. T. T.

たといいます。明治三八年（一九〇五）門弟によりこの碑が

の傍

1. 田代の大新横井戸のところに石碑の水神が祀つてあります。
その横に「奥山半僧大権現」の碑、馬頭観世音の碑、巳□
2. (コンクリートに埋もれて判読不明)の碑があります。

2. 屋号毛利の前に、道路に面して合掌の二臂と後ろに四臂
(商売繁盛をかなえるという不空羈索観音か)の石仏及び
風化が著しく不明の石仏の計二体があります。
3. 大泉第二公民館の東側に自然石に文字を彫った石碑が三
基あります。廻国供養塔と思われるものが二基あります。
一基は風化が著しく読みません。

4. かない道の中村わかれ（字中村方面への用水の分岐
点）付近など村内のあちらこちらに馬頭観世音の碑が多数
あります。

3. 現在は老人集会所の敷地内南西の隅・・・・・「南箕輪の
史跡」には「大和泉神社西南の辻にある」と記されています。
古老の話では大和泉神社北西の角の旧春日街道を挟んで
西の辺りにあったと言います。いずれにせよ、ガード
レールの設置或いは大泉老人集会施設の新築などによつて
移されたものかと考えられます。

施主 原信一

4. 唐松公園の一里塚付近にあります。

安政七庚申年（一八六〇）願主 未年男

（三）その他碑

1. 田代の大新横井戸のところに石碑の水神が祀つてあります。
その横に「奥山半僧大権現」の碑、馬頭観世音の碑、巳□

2. (コンクリートに埋もれて判読不明)の碑があります。

3. 大泉第二公民館の東側に自然石に文字を彫った石碑が三
基あります。廻国供養塔と思われるものが二基あります。
一基は風化が著しく読みません。

4. かない道の中村わかれ（字中村方面への用水の分岐
点）付近など村内のあちらこちらに馬頭観世音の碑が多数
あります。

(四) 開墾の碑

大泉の北西、西天竜用水路より約一〇〇メートル西の林檎畑にあります。

西天竜用水路開鑿により広大な土地が水田として生まれ変わりました。しかし、畠の必要性、水の供給等を考慮して西天竜用水路の更に西の山林をも開拓開墾しました。これはその記念碑です。

碑面　開墾之碑　耕地課長　穗坂申彦
側面　左　昭和十年十一月　石工出羽澤為十郎
右　大泉耕地整理地区

七 井堰・横井戸

(一) 下井



下井

現在の吹上天橋西約二十㍍に頭首工があり、大泉川から取水している用水路です。大泉新

田の東で上井と合流しています。大泉で開鑿した水路の中では最も

(二) 上井

古い水路で、戦国時代には存在していたといわれています。現在はコンクリートU字溝によつて水量が減らない工夫がされています。

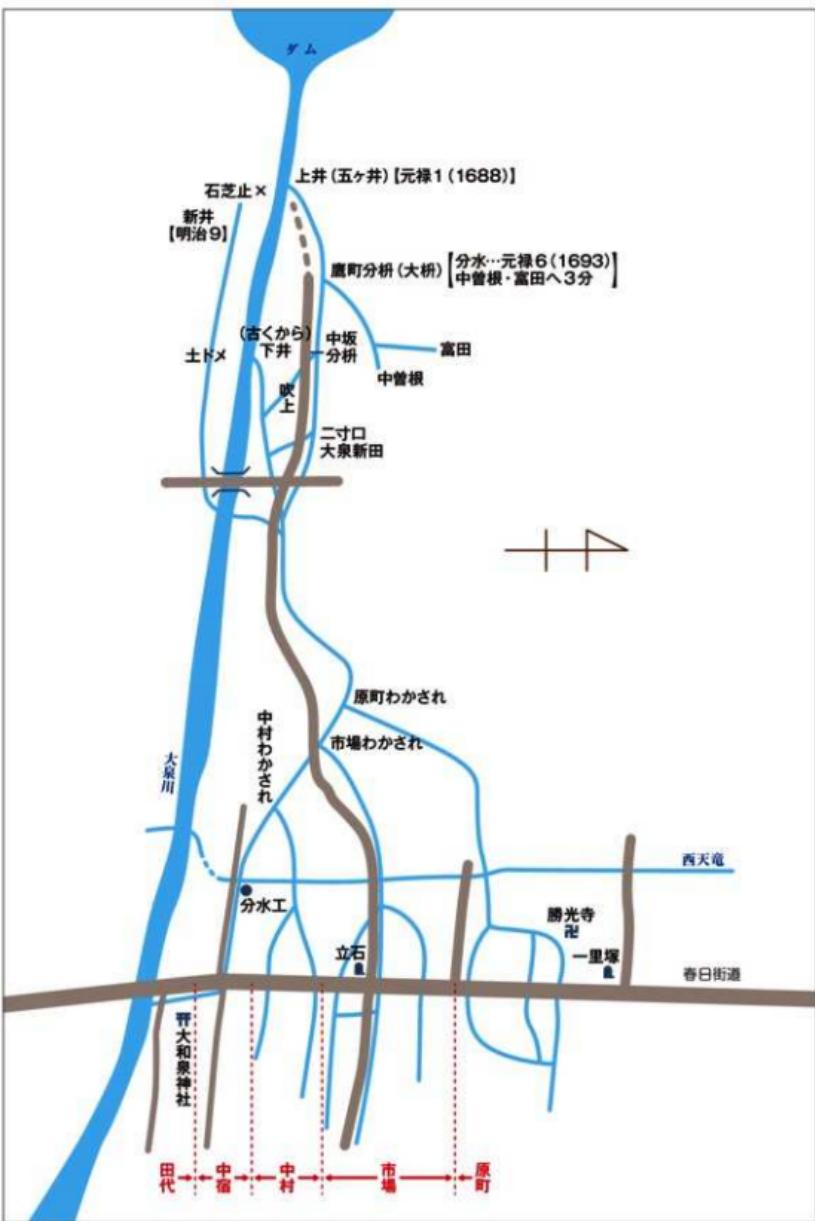
大泉所山ダムの下から取水して吹上・大泉新田を通り大泉に達する井堰で五箇井（大泉・富田・中曾根・吹上・大泉新田）とも呼ばれています。西天竜用水路が完備した現在も上手田（大泉の集落の西側の耕作地）はこの水路の水が主となっています。

大泉村では、元禄元辰年（一六八八）、時の領主板倉頼母守に願い出て、井の許可を取ることができました。しかし、大泉村の人力だけでは水を引くことが困難であるので領内他の四箇村から人足を出してもらつて掘った井です。

途中、元禄三年（一六九〇）、富田と中曾根からこの井筋の水を分水して欲しいと申し込みがありました。大泉村にとつては貴重な水ですので、拒否したのですが、領主からの命があり、やむなく三分の水を富田・中曾根に分け与えることと



中坂分枢



大泉の用水

なりました。鷹町分権（大木ともいう）がそれです。その時は吹上・大泉新田は井端で生活用水を汲み取ることしか許されていませんでしたが、後に訴訟などを頻繁に起こし、中坂分権（吹上）や二寸口（大泉新田）などの分水口が設けられるようになりました。

昔の記録には、ほとんど毎年のように井筋の決壊や修理が記されています。先人が力を出し合って守ってきた井です。

（三）新井

上井・下井の水を以てしても、大泉の水の需要を充分に満たすことはできませんでした。そこで、明治になつて、大泉所谷の南側（ひかけ）の水を大泉まで引くことを願い出しました。下流の地域の反対を解決し、明治八年この水路が完成し新井と名づけられました。

大泉川の四ノ沢、三ノ沢、二ノ沢、一ノ沢の水、いわゆるひかけの水を岩石だらけの急斜面に井堰を築いて引いてくることは困難な大事業でありました。水量の多い四ノ沢からは上下二箇所から取水しています。



新井跡

際して、この井敷のベ三二九二坪（一〇アール）を特売してもらい取得しました。これが平地分でいわゆる「二間幅」といわれている土地です。更に、その奥の山の部分は大正五年大泉所の分割の時に、井堰保全地として上下二〇間（三六尺）幅、のべ一八町七反九畝五歩（一八七九アール）を特売してもらっています。

大泉所で取水された新井は、二間幅を下り、大泉川を極で渡り生活用水として活用されました。後、井の一部分は大泉川を渡さず大芝林を東へ流し荒井坂まで通じていたといいます。荒井坂は、新井坂であつたと思われます。大泉川を渡す樋は大水の度に流れてその都度修理を要しました。

西天竜用水路が開鑿され、新井は井堰としての役目を終えました。しかし、昭和二年、入植当時の大芝の人々の生活・農業用水としてこの水は活用されました。また、昭和三年、その地下に上水道管が埋設されました。この水道管により大泉ばかりでなく南箕輪村は平成四年（一九九二）一〇月に水道用水企業団の上水道ができるまでの長い間、豊かな生活用水を得ることができました。現在、大芝湖の水はこの水を使っています。

（四）横井戸

明治一六年の大芝原分割にてあります。

大泉は、大泉川の扇状地のほぼ中央部分にあるため、川の水は伏流水となつてしまつたため水を手に入れるのに様々な工夫

夫・努力をしてきました。

横井戸は

その一つで、伏流

している地下水を

段丘のような高低

差のある地形を

使って掘り出した

ものです。明治以

降の工作物ですが、

横穴などは崩落に

よりもはや不明と

なっているものも

あり、詳細はわか

りませんが次の場

所の横井戸は現在確認できています。

1 大新横井戸

大和泉神社の西・字田代にありました。耕作用水の溜め池としてかつてあつたという田代池の水源です。水神が祀つてあります。現在は湧水していません。

2 西村横井戸

大芝・吹上への追分になつてゐる場所の東側、県道吹上線の南側、道下に湧水のように円筒コンクリート管から



西村横井戸



大新横井戸の水神

3 カネ申(東垣外)の横井戸跡

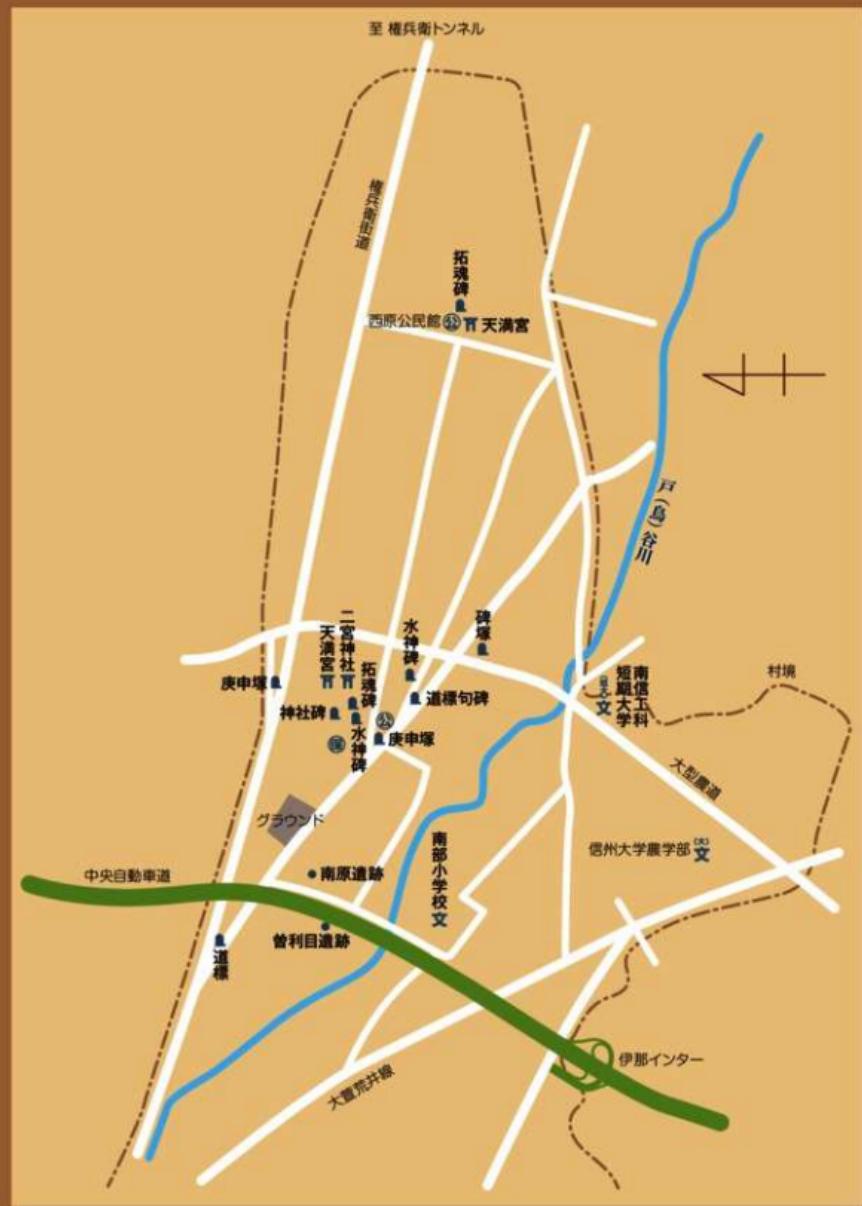
村道五号線の南側・四阿の設置場所(南箕輪小中学校の西方約1キロメートル・字東垣外)石碑があり、いわれ等が書かれています。現在湧水はありません。

4 ムクリ横井戸

大泉集落の西北、南箕輪村一八〇〇番地、字ムクリにあります。コンクリート製の階段付きの水栓があります。雨が続くと少量の水が流れています。

流れ出ています。石碑の水神が祀つてあります。

第十 南原



一 南原の由来

当地域一帯は、昔「中野原」と呼ばれていました。入会林野（「全村・由来」の項の「注」を参照）で、今の南箕輪村の人々・伊那市の西箕輪・御園・山寺・伊那部・小沢・孤島の人々が共同で利用していた原野でした。明治以後分割され、所有者が決まりました。

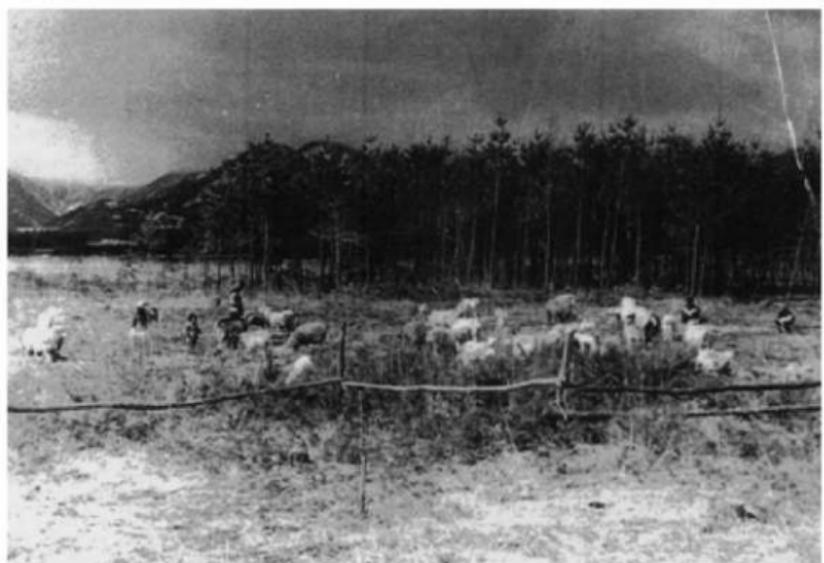
昭和二〇年（一九四五）太平洋戦争が終わると、外地から帰還者・職を失った人々・住む所を失った人々の生活場所を探すこと、食糧不足の解消が急務となりました。そこで開墾・干拓により入植開墾事業が始められました。昭和二〇年一月、国は「緊急開拓事業実施要綱」を策定しました。北原・大芝原・中野原は、その適地として知事指定の対象になりました。そして、入植開墾事業が始められました。

中野原には、昭和二一年春から入植が始まりました。地元帰農組合（沢尻の人達）、岡谷帰農組合（岡谷へ疎開して來ていた人々等）、開拓増産隊（長野県により募集された人達）、西原帰農組合（西箕輪村の人達）の人々が入植し開墾が進められました。昭和二二年には地元帰農組合、岡谷帰農組合、開拓増産隊が合体して南原開拓帰農組合が結成されました。総会で組合の名称が問題になつた時、南箕輪村の南端だ

から「南原」と名付けました。
中野原の開拓はこれ以後、「南原開拓農組合」と「西原開拓農組合」の二組織で進められました。昭和二二年一つの区となることになり、「南原区」と名乗り両組織が属することになりました。

組合の名称は、昭和二三年には「開拓農事実行組合」となり、昭和二四年には「開拓農業協同組合」と変わっていきました。そして、昭和四九年（一九七四）には開拓事業も一応終わったということで、「開拓農業組合」が解散されました。この頃には、地区内の道路・水道・電気・公共施設等の整備がほぼ整っていました。

この地を開拓し現在に至るまでには、大変な苦労がありました。まず、土地の解放で、村有地・区有地・企業などの私有地が混在していて、話し合いが困難を極めました。次に水の無い大地にどうやって水を得るか、そのためのさまざまな苦労がありました。一戸当たり平均一町九反歩の土地は得たが、木の根を掘り起こし、厚い苔を除き耕した土地は瘦せ土で、土作りから始めなければなりませんでした。また、集まってきた人々が心を合わせるための苦労もありました。入植以後、中央道・大型農道が開き、権兵衛トンネルが開き、交通の便が良くなり住宅、商・工・運輸の事業所が増え続けています。また、近くに信州大学や南部小学校、南信工



昭和29年、開拓7周年の時の神社南の場所です。土作りのためのめん羊の放牧風景。

科短期大学校もてきて、発展を続けています。七〇戸の人植者で始まった南原区は、平成三〇年一月には五三三世帯・四二二人になりました。

二 神社

(一) 二宮神社
南原コミュニティセンター南隣二宮にあります。

祭神 主神 二宮尊徳

他に秋葉権現、大山祇神、大国主神 ほか

由緒

神社前の「報徳 二宮神社」碑の碑文を記します。

「そもそも この神社は終戦直後、食糧増産県営緊急開拓団として入植した、南原開拓組合の人々が心の拠り所として創建した。神社設立にあたり、沢尻恩徳寺の有人和尚に依頼し、高遠樹林寺に保存されていた旧高遠藩上級藩士の神棚を譲り受けて祀った。祭神には二宮尊徳翁を祀るのが相応しからんと衆議一決し、昭和二十三年五月組合の共有地に祠を建立して二宮神社と号した。其の後二十数年を経過し、地域内を中心自動車道が通過して、南原周辺は急速に宅地化が進み人口も急増して來た。こうした社会環境の変化に伴つて、社

殿新築を要望する氣運が高まり、崇敬厚い区民の淨財を得て、昭和五十六年四月十八日建坪三十五平方メートルの社殿の新築が完

成した。旧祠は、そのまま隣接地に遷座し天

満神宮として奉安し

た。この神殿造営を機

に、小田原報徳二宮神

社末社として草山朝子

宮司により認証された。

……以下略……」

左端の社殿が最初の二宮神社で、現在は天満宮となっています。

真ん中が現在の二宮神社で右側に二宮金次郎像が立っています。

(二) 天満宮 石碑

西原公民館敷地内にあります。

碑面 天満宮

昭和五三年
十二月吉日



西原天満宮石碑



「報徳二宮神社」碑と二宮神社

三 遺跡

(一) 南原遺跡

三本木原八六

六九一～八六

七二番地が発掘

調査のされた範

囲で、この遺跡

は戸（鳥）谷川

右岸の河岸段丘

にあり、現在は

畑地と宅地と

なつていて、中

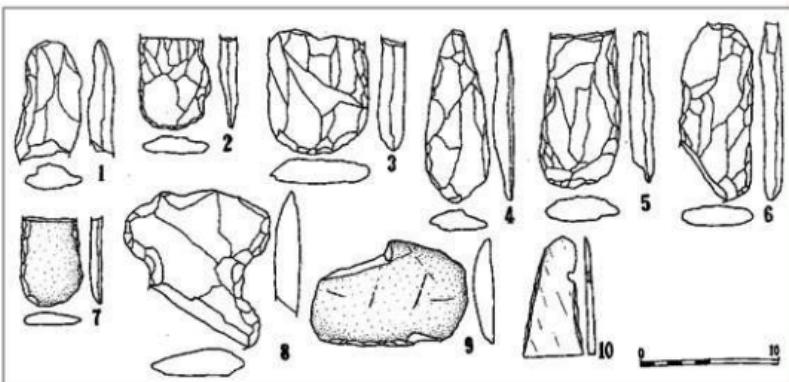
央道がこの遺跡

を南北に横断し

ています。

昭和四七年
(一九七二)、中

央自動車道の建設工事実施にともない、道路用



南原遺跡出土石器実測図 (1:4)

地の範囲で緊急発掘調査が行われました。

調査の結果、遺構は見つからず、また出土した遺物も少なく、縄文時代中期の土器片が十数点と打製石斧七点・石匙（さく）一点・横刃形石器一点・用途不明の石器一点の出土にとどまっています。

このことから遺跡の性格としては遺物の散布地になるといえます。

（二）曾利目遺跡

この遺跡は南原遺跡の北側に隣接している場所で戸（鳥）谷川と小さな沢にはさまれた、小さな舌状台地にあります。南原遺跡と同様に中央道建設工事にともない発掘調査が実施されました。構はみられず、出土した遺物も縄文時代中期の土器片が十数点と打製石斧七点・石匙一点・横刃形石器一点・用途不明の石器一点の出土にとどまっています。



曾利目遺跡全体風景 北より

が一点のみでした。

この遺跡も遺物の散布地になるといえます。

（三）その他の遺跡

南原区内には中央道建設工事にともない調査がされた南原遺跡・曾利目遺跡のほかにも戸（鳥）谷川右岸沿いにある九尊洞遺跡、戸（鳥）谷川と村道八号線の間に広がる畑地と住宅地となっている付近にある孤窪遺跡があります。これらの遺跡は本格的な発掘調査がされていないため詳細は不明ですが、これらの遺跡からは縄文時代中期の土器片・古墳時代の鐵鍬・平安時代の灰釉陶器片が地表で採集されていること、また南原区の南に隣接する伊那市地籍内の小沢川左岸河岸段丘上には大遺跡である月見松遺跡があることからこれら未調査の遺跡のある場所またはその周辺には複数の時代の集落跡が埋蔵されていることが考えられます。

四 碑

（一）南原「拓魂」の碑

南原コミュニティセンターの南にあります。

題字は長野県知事。「拓魂」は事業を記念するのみでなく、この魂を永く子孫に伝え、村造りの原点とした悲願をこめ

た言葉です。

碑面 拓魂

長野県知事西沢権一郎書

碑陰

樹幹聳ゆる
大平地林にし
て流水更に無
き標高七八〇
メートルの地に地元
有志開拓増産



南原「拓魂」碑（公民館南）

碑面 拓魂

長野県知事西沢権一郎書

碑面 拓魂

長野県知事西沢権一郎書

朝に夕に星
を頂き鍬をと
り原野を拓き
今日の繁栄の
基をなした物
故者を含む左
の人々及び家
族の汗と涙の辛苦を讃え永遠の平和と弥栄を祈念して此の碑
を建つ



西原「拓魂」の碑

(二) 西原「拓魂」の碑

昭和四七年建立
石工 岡谷市長地 森田石材

題字は長野県知事。〔拓魂〕の趣意は南原と同じ。

碑面 水神
碑面 「沿革」

1 南原公民館南にあります。

南原は開拓地にして昭和二十一年入植、水の無い地域のた

(三) 水神碑

入植年月 昭和二十一年十一月 入植戸数 一
八十余町歩 四十六戸
開拓総面積 八十余町歩
電気導入 昭和二十四年二月
水道完備 昭和三十一年一月
開拓者氏名 五四名

一 入植 昭和二十一年 入植戸数 二十四戸
一 電灯完備 昭和二十七年九月
一 水道施設 昭和三十一年三月
一 水道完備 昭和四十七年四月
三五名の氏名 昭和五三年一二月建立

公民館から西へ二〇〇㍍ほど行つた池上家の庭にあります。

2 池上家 水神碑

平成五年七月吉日 南箕輪村南原水道組合

給水人口

六百五十人

解散時 施設利用口数

五十三戸

組合員数

百二十八戸

水神の碑を建立し之を祀る。
戸へ給水する。昭和三十九年國の施策に依り開拓地畑灌漑事業として、南箕輪村九六三三ノ九地点に深さ五百㍍余の井戸をボーリングして水中ポンプにより南箕輪村九六一一ノ二地点迄揚水し給水する。人口の急増に依り将来を展望する上にたつて平成四年十月広域水道供用開始と同時に村営水道に移管、其の機能一切を停止し南原水道組合を解散する。ここに



南原(公民館南)水道記念碑

め共同井戸を
数ヶ所掘り生

活用水とする。

昭和三十一年
四十六戸で水

道組合を設立、
共同井戸二ヶ

所より電動ボ

ンブにより各

碑面 水神
副碑 「沿革」
利用戸数
南原開拓地第一号井跡
昭和二十二年
拾参戸
深サ
増産隊掘之
昭和六十二年
拾五間

十二月吉日建之

(四) 道標

1 権兵衛街道から南原集落へ入る分岐点

碑面(西向)

右 上戸・中条

左 与地・権平・

平沢

(横に「奉贊觀音□□

□」の碑があります)



南原道標石 権兵衛街道との分かれ



池上家水神碑

碑面
右 上戸
左 中条

碑陰
原中や
雲にもつかず
啼く雲雀

(文久三年(一八六三)道
標兼芭蕉の俳句碑を鈴木
眞道が建立した)

(五) その他

1 庚申塚

大型農道東一〇〇トメぐら
いの権兵衛街道沿い

(1) 庚申 万延元年
(二八六〇)

(2) 庚申 寛政二二年
(一七八四)

(3) 庚申 元文五年
(一七四〇)

天十月三日



是從東高遠領の標柱の近くにある
南原の「庚申塚」



南原道標「右上戸・左中条」公民館西

2 碑塚
大型農道の信号機南の交
差点西側

庚申

弘法大師 碑
南無阿弥陀仏 碑

三界万靈塔 碑
馬頭観音 碑
金毘羅大權現 碑

天神 碑
庚申塚

3 (7) (6) (5) (4) (3) (2) (1)
庚申 善
公民館東 庚申塚

(2) 甲子 昭和五九年
庚申 (一九八〇)

甲子 (一九八四)



南原公民館東「庚申塚」



大型農道沿い「碑塚」

五 公共施設

(一) 南部小学校（学校の位置は沢尻地区です）

明治一一年（一八七八）村内各地区にあつた学校の統合が始まった時、この地域の学校であつた沢尻学校（久保分校）は西伊那郡学校へ合併することになりました。それ以来、この地域の児童・生徒は行政区の違う伊那市へ教育委託されました。その後この地域一帯が開発され、住宅が増え、平成元年には委託児童・生徒が二〇〇人を越えました。それ以前から委託児童・生徒については村の課題として問題になつていたことでもあり、平成四年新しい学校を建設し委託児童・生徒の解消することになりました。一〇余年の教育委託解消が実現することになりました。

村の南部に位置することから「南部小学校」と命名し、平成八



南部小学校遠景

(二) 長野県南信工科短期大学校

大型農道の南原入り口西側にあります。

平成二八年、産業技術が急速に進歩する中で、それに対応できる人材育成をするため、県では二番目（一番目は上田市）の工科短大をここに設け開校しました。

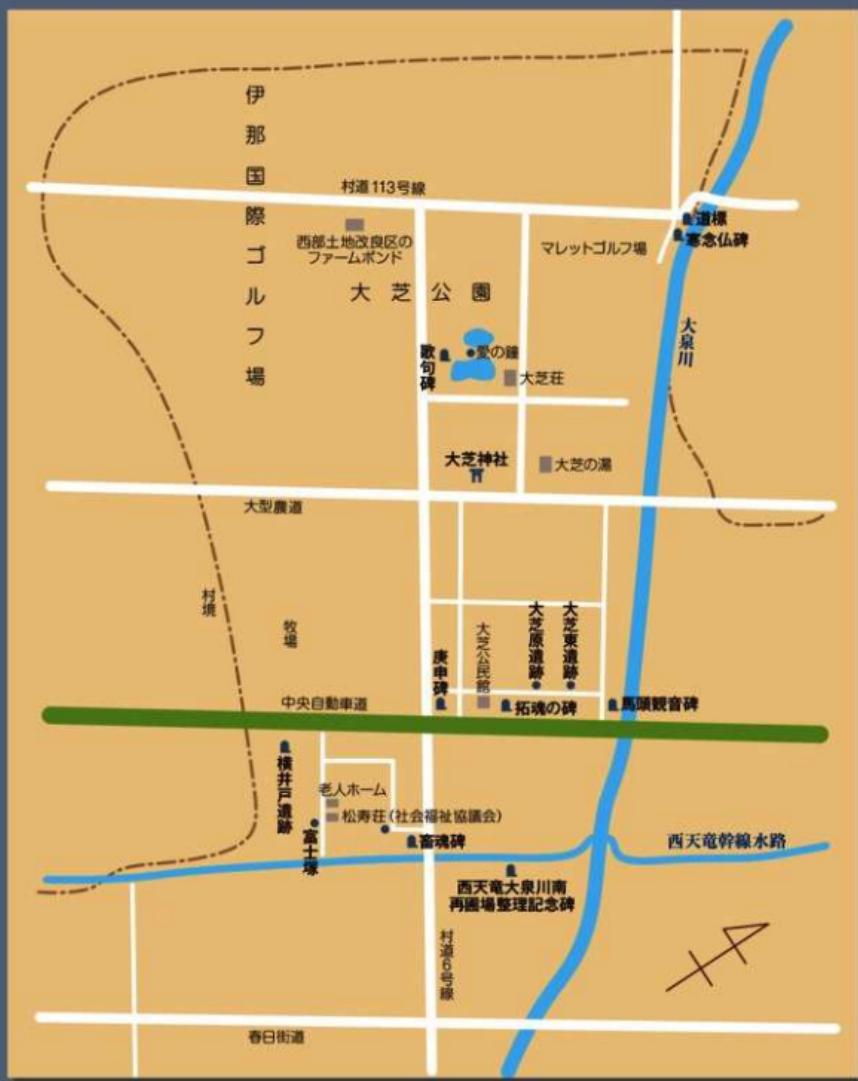
ここには昭和五三年（一九七八）設立の「伊那技術専門校」（県立）があり、一年で修了する職業訓練を行っていました。平成二八年「南信工科短期大学校」として発展しました。

南信工科短大には「機械・生産技術科」・「電気・制御技術科」の二コースがあつて、高等学校卒業者と在職者・離転職者を対象としています。



「長野県南信工科短期大学校」のキャンパス

第十一 大 芝



一 大芝の由来

大芝区の辺りは江戸時代には「大芝原」と呼んで、広大な入会林野でした。(入会林野については「全村由来の項の注を参照) 宝暦七年(一七五七)の古文書に、一八一石の所の年貢として久保村・大泉村・北殿村・南殿村・田畠村・神子柴村・大泉新田村・大賀村・羽庭村の九ヶ村から米一斗八升を納めていることが書かれています。

明治八年(一八七五)には、大芝原三五〇haが民有地として認められています。明治一五年から分割が始まり、一六年には南箕輪村分として二三五haが認められました。その後各地区への分割が計画されました。村財政基盤の一つとするべく大正三年(一九一四)村有化が決まりました。当時の記録によると、台帳面積二一九ha余、実測一三五ha余となっています。

明治二七年南箕輪学校が焼失し、校長の福沢桃十氏の提案で大芝への植林(学校林)が始まりました。林野消失などの理由で反対運動もありましたが、村として植林に取り組むことになり、その後も植林が続けられ見事な平地林となっていました。そして、大正一二年から生長した樹木の伐採・売却が始まり、昭和三八年(一九六三)頃まで村財政の大きな

収入源となりました。

昭和二一年、就職先の無い食糧難時代の青年対策として大芝原開拓が計画され入植が始まりました。そして、翌昭和二年には二九戸の入植者となり、大芝原開拓農事実行組合が設立されて大芝区が誕生しました。村内出身者は九人でした。また、開拓面積は四八haでした。この地は広大な西山を背負っていますが水が伏流してしまい水利の便が悪い所なので、開拓事業を進める上で水をどうやって得るかが重要課題でした。入植と同時に炊事・洗濯・入浴のための水に苦労しました。初め雨水・大泉川の水・西天竜幹線水路の水などを利用してしのいでいましたが、大泉新田地籍に横井戸を掘る導水工事や大泉所四ノ沢から導水工事により改善を図りました。しかし、管理上の問題等あり不自由な生活をしていましたが、昭和四年(一九六六)村営水道が整備され、水に不自由しない生活が出来るようになりました。また、原野の開墾も大変なことでした。木や藪の根を掘り抜き、厚い苔を取り除いて、出て来た耕土は作物を作るには不向きな土で土作りから始めなければなりませんでした。

穀物・野菜作りがすぐには無理ということで果樹・酪農から始まつた大芝地区的農業も、日本の農業情勢の変遷の波の中で果樹は消え、酪農家も減り、農家も少なくなつて来ています。

近年村道六号線の整備・大型農道の開通などがあり、また公共施設の設置・観光施設の整備が行われ、大芝地区も大きく変貌しつつあります。かつて中村元恒（高遠藩の儒官・医官で、「踏原捨葉」の編者）に「箕輪十勝」の中で「千里の原頭は常に雲を帶びてゐる…放馬が疾驅してゐる…」と詠われ、二九戸の人達によってその一部が開拓された頃の風景は大きく変わりました。平成三〇年の大芝区には、一八九世帯、三五人が暮らしています。

なお、大芝公園の歴史を付記すると

明治二八年（一八九五） 植林始まる

明治四四年（一九一二） 植林面積一〇〇haを超える

昭和二〇年代（一九四六）から三〇年代にかけて植林した木を伐採・売却により村財政を助ける

昭和四三年 「大芝開発調査特別委員会」設置

昭和四七年 スポーツ公園設置決定

昭和四八年 ゴルフ場賃貸与仮契約成立四二・九

昭和五三年 「都市公園づくり」始まる五一・六

平成九年 温泉湧出 一三年「大芝の湯」施設できる

平成一二年 「こども未来センター」設置の話ができる

平成一三年 「味工房」改装

平成三〇年 「道の駅」設置



現在の大芝区を南西からドローンで撮影した
大芝集落の現況：左に見えるのが大型農道、右に見えるのが中央道

二 神社

(一) 大芝神社

祭神

天照大神

伊弉册命

大山祇命

豊受姫神
建御名方富命

由緒

昭和二六年（一九五一年）開拓地

内に神社創建の気運が熟し、一二月に組合総会において創建することが決まり、翌年一月に神社名を大芝神社と定め、官司鳥山氏外三名を創立委員として、昭和二七年四月一五日南真輪村有林二〇坪の境内に建立さ



大芝神社

れました。昭和三年に五アールの敷地を村長の斡旋により村議会の了承を得て現在地に定め、ここに移転し祭典が挙行されました。昭和四年二月に正式に敷地を譲り受け、同年一〇月三日に鳥居が建てられました。当初、祭日は一月二日でしたが、昭和四九年に新社殿が完成してからは例祭日は一月三日となりました。

(二) 天満宮

大芝神社境内に石祠にて祀られています。建立は昭和一八年二月二二日です。

祭神 菅原道真

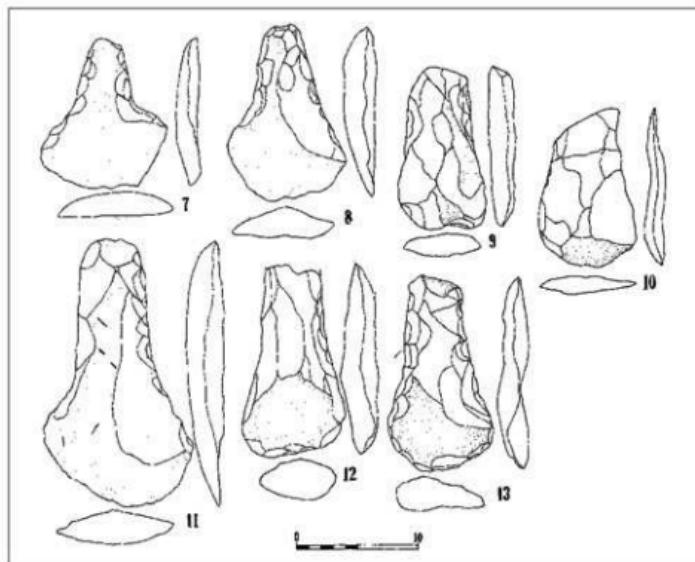
三 遺跡

(一) 大芝原遺跡

村道六号線と中央道が交差する北側一帯です。昭和四七年（一九七二年）、中央自動車道建設に際して緊急発掘がなされた遺跡です。

検出された遺構・遺物は少なく、遺構は土壌が三基、遺物は縄文時代中期・後期の土器片九点と土製品で耳飾りの破片一点、打製石斧一三点、弥生時代後期の土器片一点が出土しています。

中央道から東へ一〇〇メートルほど離れた畠地から弥生時代後期の土器片や磨製石鎌の優品が地表で採集されていることから、この遺跡の中心はこの辺であることが推察されます。



大芝原遺跡出土石器実測図

(二) 大芝東遺跡

大泉川の右岸、河岸段丘南向き斜面に位置し、大泉川に沿って東西に帯状に続いていると思われる遺跡です。昭和四七年中央自動車道建設に伴い緊急発掘調査が行われました。調査の結果、縄文時代中期初頭の住居址一基と平安時代の住居址一基、時代時期不明の土壙一七基及び六本の溝状遺構が検出されました。この他に遺構外で縄文時代早期～前期、後期～晚期の土器片も出土しました。縄文時代中期初頭の住居址は小規模なもので出土した遺物も少なく、炉に設置された土器と打製石斧が二点のみでした。平安時代の住居址からはある程度まとまった遺物が検出され、土師器の壺が二点・灰釉陶器の碗が四点（うち一点は墨書あり）・長胴甕の破片一点・鉄製釘一点・鎌一点が出土しています。

その後昭和四九年に、この遺跡地内で圃場整備が実施されることになり、緊急発掘調査が行われました。この調査では縄文時代中期の住居址一基と塹・土壙・配石址・柱穴址・溝状遺構が検出され、縄文土器や平安中期の土器・陶器が出土しています。



大芝東遺跡出土鎌

発掘調査の範囲外である中央道西側畠地の一帯から、灰釉陶器の破片や縄文時代の土器片が地表で多く採集されていることから、遺跡の中心は中央道の西側であることが推測されます。

(三) 横井戸跡

養護老人ホーム西南、中央道から東五〇トロくらゐの林の中にあります。

1 碑

碑面 (要約)

農民として食糧増産に励みたいが、この土地には水が無い。



横井戸碑

そこで地下に水を探そうと横井戸を掘つた。延長五百間掘つて水を得ることができた。溜め池も二か所に造ることができた。そして、この水で七反歩の水田を灌漑することができる。うれしいことである。

2 遺構として、水路跡、溜め池跡が見られる。
(四) 富士塚「田畑」の項参照。

四 碑

(一) 開拓記念碑

大芝公民館の建物北隣にあります。

碑面 「拓魂」 長野県知事 西沢権一郎 書

碑陰 大芝開拓碑

斯の開拓地は以前村有林として松檜等の大樹が茂る村の宝庫であった。

昭和二〇年大東亜戦争直後

の食糧難時代に農家の

二・三男対策と食糧増産

のため村有林解放運動を起こしが村内一部に強

力な反対がでた。当時清

水国人氏が会長の農民会

が母体となつて開拓組合

を結成し強力な解放運動



拓魂碑

碑陰 大正十一年三月十日
起工主 小林録三郎

の結果功を奏し、國の緊急開拓認定と相俟つて開拓されることがとなつた。

時に昭和二年五月五日先遣隊・増産隊・引揚者等の入植者により組合を組織し此の地を開拓した。

開拓建設は水の確保がその成否の鍵であつた。昭和二三年三月大泉新田地籍の横井戸工事に始まり大泉所四ノ沢水源の導水を完成、その間実に十有余の才月を費やす。開拓二〇有余年事成り一般農政移行に伴い組合解散に当たり主なる事業の概略と組合員の名を刻み此の碑を建立して永く後世に遺すものなり。

主なる事業の概略

総面積	五八町三反	耕地面積	四八町六反
入植年度	昭和二一年	入植戸数	二九戸
大泉新田地籍横井戸工事着工	昭和二三年		
電灯工事	昭和二四年		
神社建立	昭和二七年		
成功検査	昭和三〇年		
公民館建設	昭和三三年		

大泉所四ノ沢水源導水工事完了	昭和三三年
村営水道導入	昭和四一年
組合員名	二九名(名は略)
昭和四七年三月二二日	大芝原開拓農業協同組合

(二) 西天竜大泉川南再圃場整備完成記念碑

村道六号線が西天竜幹線水路と交わった所から北へ一〇〇メートル行つた東側にあります。

碑面 西天竜大泉川南再圃場整備完成記念
南箕輪村長 唐木 一直 謹書

碑陰 沿革(要約を記す)

この地域は昭和初期の開田工事には大泉川の河原地帯である二里沢は対象にならず開田されなかつた。平成八年、権兵衛トンネルの

廃土を埋め土にして構造改田出来ることになり、平成二年から一四年にかけて工事がおこなわれ、整備された水田になりました。感謝です。

関係戸数 一七九戸
改田面積 三九ヶ所
経費 七億四千万円



西天竜大泉川南再圃場整備完成記念碑

(三) 句・歌碑

大芝公園の二つの大芝湖の中間南にあります。

1 碑面

「黒百合の
山祠をよぎり

星ともる」源義

碑陰

昭和六十二年十月

「河」伊那支部有志

2 碑面

「翁草

となりは汝の
座を定む」照子

3 碑面

碑陰 平成二年七月「河」伊那支部一同



3の句碑



1・2の句碑

碑陰 一九九七年二月四日 青山棟三郎歌碑建立会

1・2の句碑については、田畠「青山棟三郎歌碑」の項参照。
青山棟三郎についても、田畠「青山棟三郎歌碑」の項参照。

(四) 寒念佛 碑

大芝マレットゴルフ場

西北端の大泉新田から来る道路の交差点北東にあります。

「寒念佛」の文字しか読めませんので、詳細不明です。

(五) 道標

四の碑とほぼ同じ所にあります。

四面に、「右 羽廣道」、「中 学校上戸中條与地」、「左 大萱 経 伊那町」、「御祭典記念 大正四年 大泉新田」と刻まれています。大正四年は一九一五年です。



寒念佛 碑

(六) 馬頭観世音 碑
大芝公民館西の道路を北へ進み、道路に突き当たった先の林の中、大泉川の崖上にあります。詳細は不明です。

三基あつて、明治三四年（一九〇一）・大正九年（一九二〇）・（もう一年は不明）と書かれてあります。供養塔と思われます。

(七) 庚申碑
大芝公民館南の道路端に建っています。

碑面 庚申

昭和五五年
(一九八〇年)

(八) 畜魂 碑

村道六号線と西天竜幹線水路が交差した二〇ヶ所西、南側にJA上伊那の



畜魂 碑



馬頭観世音 碑

敷地内にある「伊那高原ミルクステーション」脇に建っています。

碑面 畜魂碑 全国農業協同組合連合会

会長理事 大坪藤市 書
碑陰 昭和五七年 之建

五 公共施設

(一) 社会福祉関係

1 南箕輪村社会福祉協議会（松寿荘） 業務は昭和六年（一九三一）に始まりましたが、大芝へ施設ができたのは、平成五年でした。

村道六号線と西天竜幹線水路が交差した二〇ヶ所西を南に曲がった所にあります。

デイサービス・訪問サービス・相談等々の事業を行っています。

近くに障害者生きがいセンターの施設（ひまわりの家）もあります。

2 1 と同じ場所に上伊那社会福祉協議会運営の養護老人ホームの南箕輪老人ホーム、特別養護老人ホームのコンソール大芝があります。

(二) 大芝公園施設

大型農道西には、たくさんの観光施設・研修施設・スポーツ施設があります。

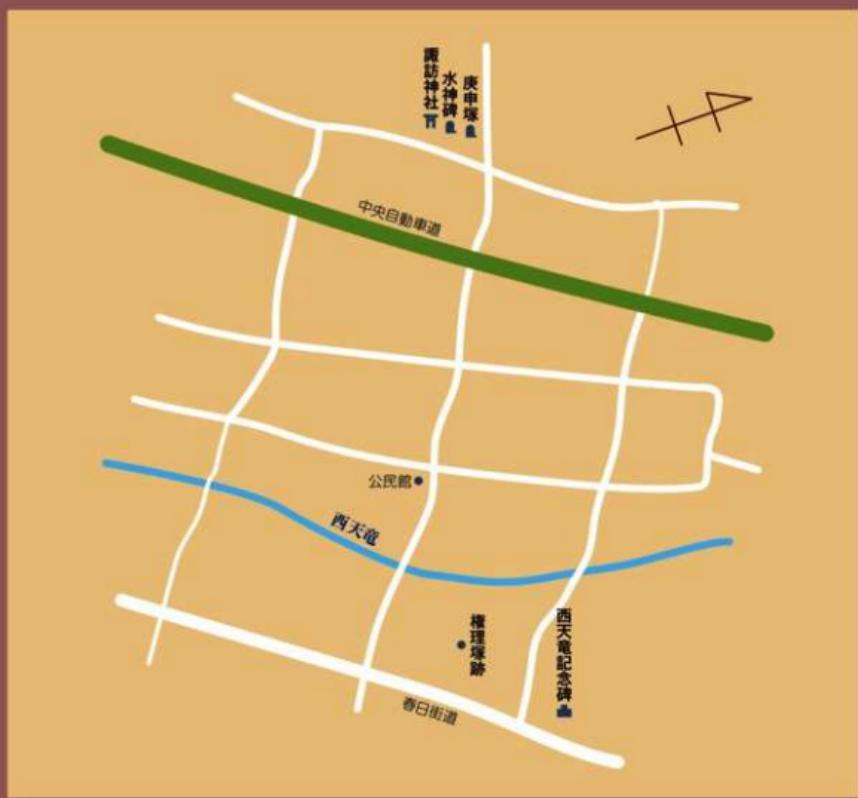
これらは、植林した木材の需要が減ってきた昭和四〇年代後半（一九七〇年頃から）から、平地林の活用を考えた結果造られてきたものです。（詳細は略）

また、田畠地区で揚水された西部地区畑灌漑用のファームボンド（貯水池）も設けられています。



愛の鐘

第十二 北原



一 北原の由来

太平洋戦争が終わりに近づいた頃、農耕隊（主に朝鮮の人々による農地を広げるための隊員）によつて木を切り倒してあつた原野へ、戦後の食糧難を乗り越えるために各地（久保・岡谷など）から集まつた入植者（希望者）十戸の人々によつて北原開拓団を結成しました。そこへ二戸が加わつて北原区が誕生しました。昭和二年（一九四六）のことでした。北原地籍だったのでその名を採つて「北原区」と名づけました。

北原はその昔、一八〇町歩（一八、〇〇〇アール）もある一いか村の入会林でしたが、明治四年（一八七一）に各村々へ分け（一番早い分割）られました。大正四年（一九一五）に南箕輪村へ統合されて村有地となりました。この村有地一町九反（一九〇アール）が開拓されて「北原区」になつたのです。

一時は「日本一小さい区」と言われ、戸数もなかなか増えなかつたのですが、道路が良くなつた平成六年頃から家が建ち始め、今（平成三十年一月）では一三六世帯・二七三人の区となり、アパート・会社・福祉施設も出来てきました。北原区の開拓は、大芝区や南原区の開拓とは異なり、それ

ぞの家が土地を買つて開墾したので、耕地面積は同じではありません。開拓した人々は、家の無い人が多かつたので、部屋を借りて住んだり・小屋に寝泊まりして開拓に励んだ人もいたといいますが、幸いなことに地下水は比較的高く家ごとに井戸を掘ることができました。

道路や水の便が良くなり、戸数も増えましたが、社会情勢の変化によつて最初の入植者は半数になつてしまつています。

二 諏訪神社

北原区の中央の通りを西に進み、中央道をくぐり抜けた林の中（水神碑の北隣）にあります。

祭神 八坂刀売命

昭和四〇年（一九六五）二月、区民の総意で諏訪大社（下社）よりご神体をお迎えして建立しました。毎年五月の第三日曜日を祭礼の日と定め、区民一同が境内に集まり、花見を兼ねた祭典を行つて



神社

います。区も小さいが社祠も小さいので、将来北原区が発展した時にはもつと神社にふさわしい社殿に造り替えたいとうのが区民の願いです。

三 権理塚

元は、北原区北方の春日街道沿いにある西天竜記念碑・鍾水・豊物碑の南一〇〇メートル程のところにあった（田圃三枚分ほど）の広さ）といいますが、昭和の初めに行われた西天竜の開田の時に他へ移されたようです。ここからは、五輪塔をはじめ塚の一部と思われるものが発掘されたといいます。『長野県町村誌』には「石碑・五輪塔にて三体あり……」と書かれていて、永井家の屋敷内にその一基の一部分が残されています。また、大泉の勝光寺の北側にある五輪塔（一基）もその一つであると言われています。

権理塚についてはいろいろの言い伝えがあり、一説には、

加集李之助（代官）が伊予の国（愛媛県）から連れて来た若衆の中に「権理」という人がいて、その墓を生前に建てて供養したというので「権理塚」の名がつけられたと言い、また一説には、箕輪城が武田氏に攻められて落城した際の落人達を葬ったものであると言います。また「権理塚」と呼ばれて来

てはいますが、「五輪塚」のなまつたものとも言われています。

北原の小字「五厘塚」は、戦前は大泉の区有地の畠であつて、個人に貸してあつたので、大泉区と関係があつたと思われますがはつきりしたことは分かりません。

四 庚申塚

昭和五五年（一九八〇）に初めて建てられました。



庚申塚

五 用水

(一) 竪て井戸

開拓地の多くはどこも同じですが、開拓の苦労もさることながら飲み水や・使い水に不便します。幸いなことに北原区では地下水が高かつた（地下七（八）尺）ために、比較的容易に井戸を掘ることができて、多くの家に井戸があつたといい

(二) 水道創設

北原区では、井戸は掘られたものの、衛生的な飲み水には不自由していて水道の設置は区民の長い間の夢でした。その願いがかなつたのは昭和三十三年（一九五八）のことでした。村の助成を受け、北原区の大奥地箱に二基の井を掘り、その水を合わせて電気揚水し、水道施設として完成させました。現在では、村営水道が敷かれ、古い水道は使われてはいませんが、そこには「以和清水」という水道の記念碑が立てられています。



「以和清水」の記念碑

碑面には

創設 昭和三十三年九月

〔以和清水〕

昭和三九年秋建立

清水国人村長此の地に水道を創設
区民の福祉を図る

茲に碑を建てその功德不朽に伝ふ

北原以和清水水道組合

碑陰には当時の一二人の組合員氏名が書かれています。

(三) 農業用水

昭和四八年（一九七

三）より、「国営伊那

西部農業水利開発事

業」の一環として、西

部土地改良区が行つた

送水管敷設事業により、北原区の畑作地帯にも雑用水分給栓が設置（完成一六年四月）されて、給水栓（地上・地下）から作物に灌水できるようになりました。



六 公民館

昭和二八年頃、西箕輪小学校北分校

（吹上）の古材を使って公民館が建てられました。区民の数からすれば大きな建物でした。その後五〇年を経て各

区に近代的な公民館が建てられようになり、北原区でも平成一三（二〇一一年）に、新公民館を建設しました。



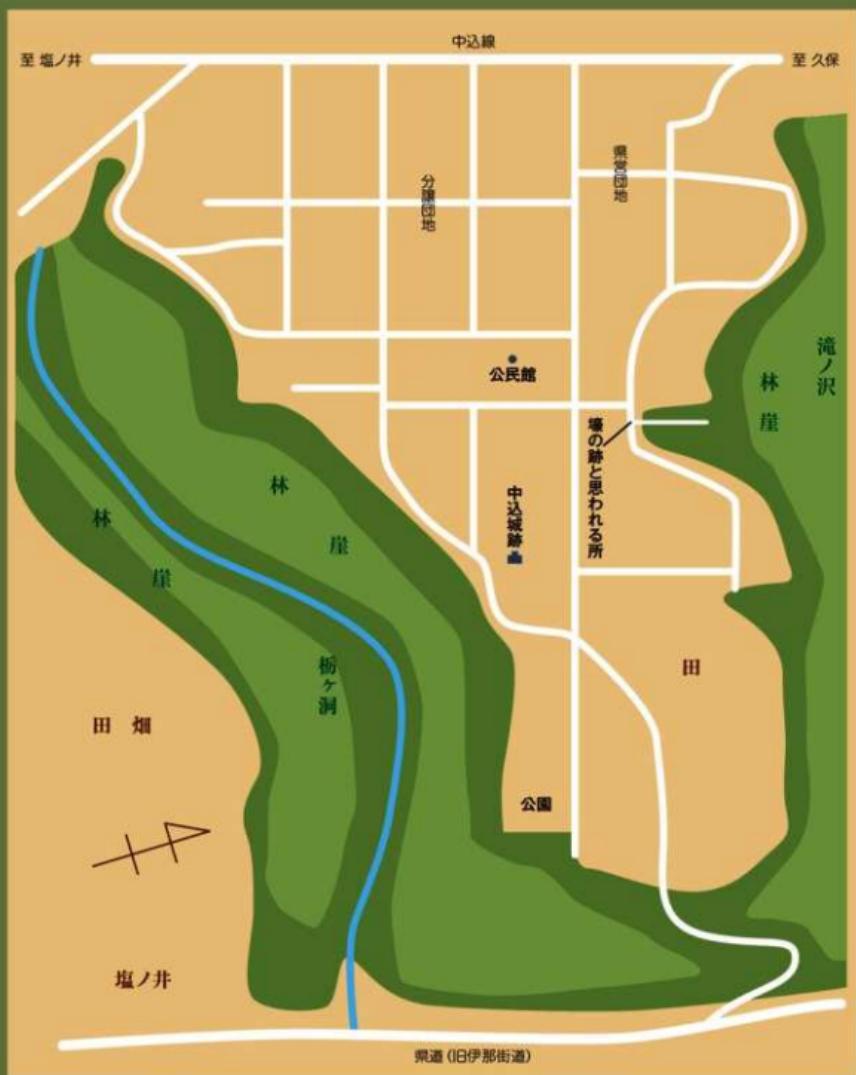
新公民館



旧公民館

給水栓

第十三 中込



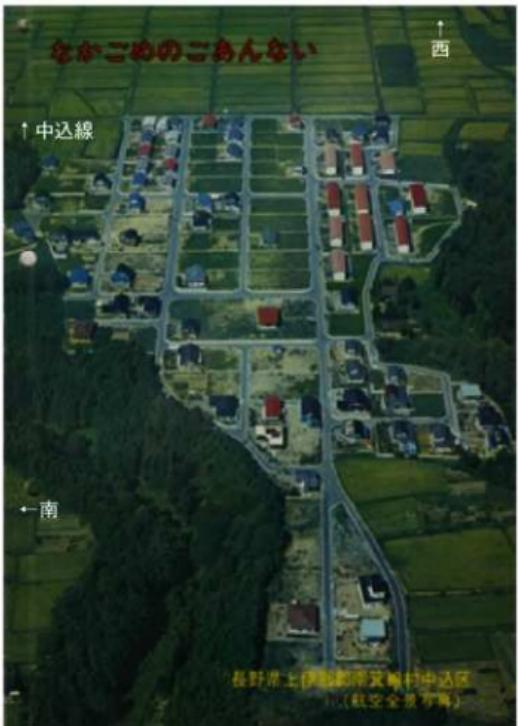


● 区章の意味

「和」を表わす円型(楕円)と
その中に「中込」の文字をデザ
インレー見して「中込区」とわ
かる様にまとめたものである。

昭和50年9月21日制定

作者 清水文男



昭和50年(1975)団地造成が終わり家が建ち始めた頃の
中込の様子。「昭和50年11月発行の冊子の表紙」より



現在の中込区

一 中込の由来

中込の地字の由来は

①天文一四年（一五四五）、武田信玄が福与城を攻めた時、福与城の出城の一つとして中込城があつたという言い伝えがある。

②明治一一年（一八七八）に南箕輪村から長野県へ報告した文書の中に、「久保耕地（当時は塩ノ井も含まれていた）の畑に属する地字…中込…」と出てくる。

これらのことから、数百年前からこの地を「中込」と呼んできているのだと思われます。そして、なかごめとは滝ノ沢と柄ヶ洞に挟まれて出来た地形からつけられた地字だと思われます。

現在の中込区のある所は、古くは山林だった所で、主に塩ノ井地区の人達が管理・使用していた所だったようです。その山林をだんだん開墾して畑にしていったようで、それは昭和二〇年代（一九四五）まで続いていました。昭和三〇年代に入り、西天竜用水の水を分けてもらい、畑から水田に変わっていました。ですから、団地造成の時は水田が中心の地帯でした。

中込区は、昭和四五年（一九七〇）からの長野県企業局の

団地造成事業によって造られました。計画は、県営住宅七戸、分譲住宅一三四戸、計二〇五戸でした。昭和五〇年（一九七五）八月三日、戸数一〇二戸で南箕輪村の一二番目の区として誕生しました。団地のみで独立した区を形成したのは県下最初のことでした。昭和五〇年一月に発行された『中込区創立・中込公民館落成記念誌』を見ますと、区民の意気込みが感じられます。そして、区の名称も「なかごみ」ではなく、「なかごめ」に決められました。丁度、戦後三〇年、村制一〇〇年の時でした。

現在（平成三〇年）、世帯数一九二、人口四七二人です。入居した人々の世帯交替も進んでいるようです。

二 中込城跡

中込城跡は、滝ノ沢と柄ヶ洞に挟まれた天竜川第二段丘の舌状丘陵の先端にあります。明治一一年（一八七八）の村から県への報告書には、「東西約四二間（約七六㍍）、南北約三五間（約六三㍍）、面積一四〇〇坪（約四八〇〇平方㍍）」とあり、これは南箕輪村にある古城跡としては最大規模のもので。また、「塙・開みの壁・門の戸・出入り口などの跡がはつきり残っているが、誰の居城であつたかについては伝承

が残つておらず、今は林となつている」と書いてあります。

また、「南信濃伊那史料」という書には「三

段の壕があつた」と書いてあ

りますし、篠田

徳登氏が描いた

図の中に、壕跡

二本と土壠二つ

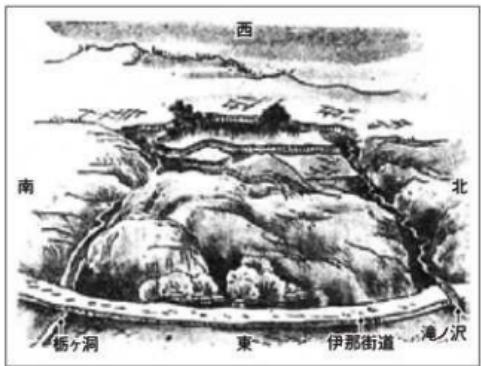
が描かれています。

団地造成で地形が大きく変わつてしましましたが、壕跡かと思われる所が一か所見られます。丘陵先端部に造られた公園へ行きますと、深い崖に囲まれた堅城の雰囲気が味わえます。

「柄ヶ洞」の地字は、中込城と関係があるものと思われます。



壕跡と思われる所



明治11年、村から県へ報告された中込城址
(『長野県町村誌』より)



現在の公民館



昭和50年頃の公民館

新しい区の諸活動の拠点として、昭和四九年（一九七四）に建設されました。グランド付の施設で、昭和五〇年には区総会・新年会・盆踊り大会・子供クリスマス会などの会場となり、区民の融和推進の場所となりました。

しかし、住民も増え活動や利用が活発になつてくると手狭になり、平成四年現在の建物に改築されました。

第十四 資 料



嘉永年間の木曾助郷関係図(田畠 門屋文書)

一 『長野県町村誌』について

明治七年（一八七四）、時の政府は廢藩置県にともない新たにできた各府県に国史編輯局を設置させ、郷土誌（史）作成の事業を興しました。長野県でも国史編輯局を設置し、およそ十年をかけて、各町村から地誌の提供を求めました。南箕輪村でも明治二年二月（一二年六月に追伸）に県へ提出しました。

長野県では各町村から提出されたものをまとめ、昭和一年（一九三六）に『長野県町村誌』として出版しました。この冊子の中にたびたび出て来る『長野県町村誌』とはこれのことです。

明治の初め頃の南箕輪村の様子や、伝えられている歴史がよくわかります。

妻（山梨県）の武田氏が信濃に勢力を伸ばし始めました。天文一三年（一五四四）、一四年と続けて侵入してきました。天正五年（一五七七）四月、武田信玄が杖突峠から高遠を通り侵入して来た時、箕輪郷の武士たちをまとめていました。天文二四年（一五八五）四月、武田信玄が杖突峠から高遠を通り侵入して来た時、頼親は伊那の諸士およそ一五〇〇人を結集して防戦しました。しかし、ついに力尽き、弟を人質に出し、和睦しました。その時の戦いに、南箕輪村の大泉上総・倉田将監などの小豪族たちも、頼親と一緒に奮戦しました。

その後頼親は、また武田氏に逆らつたため追われ、越後（新潟県）から京へ上り、時の権力者三好長慶に厚遇されました。しかし、三好氏もやがて滅び、再び放浪の身となりました。天正一〇年（一五六二）武田氏が織田氏に滅ぼされました。天正一〇年（一五六二）武田氏が織田氏に滅ぼされ、続いて織田信長が死ぬと、伊那の地はまた領地の奪い合いになりました。しかし、三好氏もやがて滅び、再び放浪の身となりました。頼親も旧領回復の好機と田中城を築き、活動を始めました。そこへ保科氏が下伊那の諸士とともに急襲して来て、奮戦しましたがついに敗れ落城してしまいました。頼親は、自決したとも逃げ延びたとも伝わっています。南殿には頼親にまつわる伝説が残されています。（長慶塚跡）

久保の東方天竜川の西岸にあります。箕輪町の地籍ですが、南箕輪村の歴史とかかわりのある城址です。遺構はありませんが、碑が建てられています。

一 田中城址

神子柴の西天竜幹線水路の西側中原の所に、上農寮の記念碑と、村上明彦先生の胸像レリーフがあります。上伊那農業高等学校は、農業振興を目指した上伊那の人達の願いによって、明治二八年（一八九五）に開校しました。最初は竜東（中央区）に学校がありましたが、昭和五年（一九七五）に、教育の場を南箕輪村に移しました。

三 上農寮跡と村上明彦先生と

信州大学農学部



田城址碑（塩ノ井東の縦半駐車場南）

古記録によりますと、田中城は東西三町（約三二四㌶）、南北三町、東は天竜川、南・西・北は沼田に囲まれた平城だつたようです。

修理がされて陣屋（遠方の地を統治するための出張所）となりました。しかし、慶長七年に天竜川の大洪水で壊れ、陣屋は木下の高台へ移されました。

昭和の初め、農村が行き詰った中で、上伊那農業学校では昭和一〇年（一九三五）塾風教育を創設し、農業・農村の核になるような若者を育てようとした。その塾風教育の拠点が上農寮で、その指導の中心になつた先生が村上明彦先生でした。碑には、「：高原を拓いて学舎を創り：われらに土の心を培い、農に生きる喜びを育てた：」と書かれています。

昭和一六年（一九四一）、太平洋戦争に突入する中、塾風教育は注目を集め、大陸進出の国策にも歓迎されました。昭和一九年（一九四四）、林業科が設置される中で、中等学校が五年制から四年制に変更される話が出てきました。五年生を対象に塾風教育を推進していた、上伊那農業学校の関係者たちは教育の危機を感じ、「上伊那農業学校を農林専門学校に昇格せよ」と運動を始めました。そして、昭和二〇年（一九四五）、長野県立農林専門学校の設立が認められました。



寮から学校へ向かう生徒
(写真集『ああ上農』より転載)

昭和二四年（一九四九）、学制改革が行われ、信州大学が設置されると、専門学校部分は信州大学の農学部になり、上伊那農業学校は上伊那農業高等学校になりました。



田畠の山の神社（田畠神社境内社）

山は人間生活にとって大切なことで、昔から人々は山の恵みをもらつて生活していました。だから、人々は山を敬い大切にしてきました。また、土砂すべなども起こし、恐れられてもいました。

山の神として一般的には大山祇神が祭られています。またこの神とは別に、民間に信じられているのは、それぞれの地区に近い山にて、春には里に下つて田の神となり、秋の収穫が終わるとともに

山に帰り山の神となる神です。また、木地屋（山

四 碑や社寺等を見学するための参考

(一) 山の神

山は人間生活にとって大切なことで、昔から人々は山の恵みをもらつて生活していました。だから、人々は山を敬い大切にしてきました。また、土砂すべなどを起こし、恐れられてもいました。

山の神として一般的には大山祇神が祭られています。またこの神とは別に、民間に信じられているのは、それぞれの地区に近い山にて、春には里に下つて田の神となり、秋の収穫が終わるとともに

(二) 水神

水は人間にとっても、農作物の生長にとっても、なくてはならないものですから、昔からかかつては、山の神の祭日（旧暦一〇月一〇日）には各家で餅を搗き、藁のツト（包み）にこの餅を入れ神前に供え、以前に供えられている餅と交換して持ち帰り、護符としてあります。



大泉西村横井戸（大泉川端）の
水神碑

だから、この水を支配する水神様は大切に祭られてきました。水源地や川端、池や井戸端などに多く祭られています。

安産祈願や疫病鎮めに、水神を祭る風習も残っています。祇園、津島社に代表される天王祭は、よく知られています。

(三) 庚申信仰

庚申信仰は、中国の道教の庚申待(六〇日に一度ずつ来る庚申の夜は、三戸虫が体内から抜け出して天帝に人間の罪状を告げに行き、天帝は罪状に応じて寿命を縮める、だからそれを防ぐために、一晩中起きていて三戸の虫が抜け出せないようにするが良い)の信仰を取り入れた信仰です。

日本では、平安時代に貴族の間に広まり始め、室町時代頃から庶民の間にも広まつていきました。そして、江戸時代になると供養塔を建てる風習が盛んになつていきました。

庚申信仰では、最初本尊が決まつておらず、初期には阿弥陀如来・大日如来・地藏菩薩等が主仏とされて庚申塔に彫られることが多かつたようです。江戸時代の元禄(一六八八)一七〇四頃から次第に青面金剛を庚申の本尊と考えるようになっていきました。青面金剛は、顔の色が青く六本の腕を持つていて、怒りの相をした姿に表現されていることが多い、そこから病魔を払い除く大きな力を持つてると信じられるようになつていきました。また、福の神、農耕の神、厄よけの神など現世利益に役立つ仏として広く信仰を集めています。

庚申塔に、日月・猿・鶴が彫り込まれているのがあります

が、日月は日待・月待の信仰と結びついたものと考えられ、猿は猿を使いとする山王権現が庚申の主神とされた時期があつたことと、庚申の申を猿と結びつけたものであると考えられます。鶴については、庚申待が鶴の鳴くまでということで結びついたものであると言われています。

庚申信仰では講(信仰仲間のグループ)が多くつくられました。そして、庚申の夜に頭屋の家に集まって、共に飲食をし、語り合ながら夜明けを待つことが広く行われています。また、講仲間で助け合つたり、楽しみ合つたりもしていました。そして、講仲間で六〇年に一度ずつ記念碑を建てることも古くから行われ、各地区に建てられた庚申塔がいくつも残っています。この頃では昭和五五年(一九八〇)に村内の各地区で建てられています。



田畠大泉川旧道橋端の
青面金剛像

右上に日、左上に月、足両脇に鶴、足の下に三匹の猿(見ざる・言わざる・聞かざる)が彫られています。

(四) 日待・月待信仰

日・月は偉大なもの・神秘なものとして、古代から人々の信仰を集めてきました。日の出や月の出に礼拝することも、古代から行われていました。

村内にはたくさんの月待塔があります。月待信仰が盛んだったことを表しています。一五日の月は、仏教では弥陀の化現（姿を変えて現れたもの）とされ、それに願いをかけ、夜を通して精進しながら日の出を待つのが初期の月待信仰の姿であつたと思われます。

ところが仏教が広まり、教典の中に月は勢至菩薩の化現であり、勢至菩薩の有縁日は二三日と書かれてあるものがあり、月の礼拝は二三日夜に行うのが本筋であるという考え方方が室町時代から、人々に広がり盛んになつていきました。二三夜塔が多いのはそのためです。



塩ノ井 庚申塚にある二十三夜塔

何人かで講をつくり、決めた日の夜集まって、勤行や飲食をしながら月の出を待ち、月が出たら願い事をします。多くは女性

(五) 道祖神

道祖神は塞の神、幸の神、歳の神、道陸神などと呼ばれ、悪い病気などが村へ入つて来るのを防いだり、旅人を守る神として、村の境や辻に祭られました。また、縁結びの神、子授けの神、イボ・痘瘡・おこり（発作）などの難病を治す神であり、厄年（やくねん）や厄落（やくおち）の神としても信仰されて来ました。

村中で石像を建てるのが普通ですが、個人で建てたのもあります。また、猿田彦を道祖神として祀る所もあります。

道祖神の祭りは、どんど焼き、三九郎、さぎちようなどその土地によつていろいろ

に言いますが、子供達が中心になつて一月一四日

か一六日に、正月の門松やしめ飾りを集めて積み上げ、火をつけて燃やしました。この火で餅を焼いて食べれば虫歯にならない、風邪を引かない、書き初めが燃えて高く上



北殿千桐屋北の駅へ行く道路にある
道祖神、道陸神

の信仰行事でした。塔を建てるのは、信仰の篤さを表すためなのです。

(五) 道祖神

道祖神は塞の神、幸の神、歳の神、道陸神などと呼ばれ、

どと縁起をかつぎました。

また、厄年の人には、年の数だけ銭や大根を切ったのを、ふだん使っていた茶碗にいれて、これを打ちつけ、後ろを返り見ることなく家に帰る風習がありました。

(六) 観音信仰—馬頭観音碑も含めて

観音は、觀世音菩薩の略称です。教典によると、苦難に遭つて救いを求める者や願い事のある者が一心に念すると、その者を救うに最もよい姿に身を変えて現れ、救つてくれたり、福德を授けてくれる仏です。教典には、「さまざまの苦難や人間の願いのうち、三三の場合をあげ、これらを救済したり福德を授ける」と説かれています。それで三三観音信仰が広まつたようです。日本では、七世紀頃から観音信仰が民衆に広まつていきました。○○観音と呼ばれる観音様が各地に見られます。

村内には馬頭観音の像や文字碑が、各地にたくさん並んでいます。馬頭観音は馬大士とも馬頭明王ともいいます。頭に馬を戴くのは、転輪聖王の宝馬が世界を縦横無尽に駆け巡つて、一切の魔障を打ち破つて、本願を果たす偉大な力を現すことを象徴するためです。また、馬が草を食べるよう、人間に襲い来る重い障害を食い尽くす力の象徴であります。そして、馬頭観音は、特に畜生道の苦しみを救う観音様とされています。

そういう仏が、いつの間にか馬の守護仏と考えられるようになつて、愛馬の死を弔うために、像(碑)を建て、供養するようになつていきました。村内にある馬頭観音像や碑のほとんどは供養塔です。このことは、この村では農業や運搬に多くの馬を飼つていたことを物語るものであり、飼つていた馬をいつくしんでいた証拠になるものです。

(七) 地蔵信仰



馬頭観音供養塔

田畠西天入口にある石仏群の一つ。頭に二つの馬の顔があるのは二匹の馬の供養を意味している。

村内には、あちこちに石仏地蔵尊が見られます。地蔵信仰は、平安後期から貴族の間で盛んになり、やがて民衆の中に深く浸透していきました。地蔵菩薩は、釈迦入滅後弥勒菩薩が世に出るまでの間、無仏の世界を大慈悲をもつて六道の衆生の苦しみを除いてくれる菩薩として信仰されています。とくに、現実界と冥界との境に立つて、地獄の苦しみの中にいるものを救うとされ、深い信仰を受けています。弱者を救済してくれる地蔵尊は、子

どもを護り救う
とされ、子安地

藏の信仰は広ま
りました。こと

に、夭折した子
どもが賽の河原

で青鬼・赤鬼に
いじめられた時、地蔵菩薩の袖にすがつて助けを求める話な

どから、子どもが変死すると、地蔵尊の石像を建ててその子
の冥福を祈ることが広く行われてきました。



北殿 お四国様入口の
子安地蔵

(八) 薬師信仰
神子柴に薬師堂がありますが、村内各地にも薬師堂跡とい
われる場所が残っています。薬師信仰は村内にも広くあつた
のです。

お薬師様は、薬師瑠璃光如来のことと、大医王仏とも医王
善逝とも呼ばれます。人々を病氣から救い、心の闇を取り除
く仏と信じられてきました。
日本への仏教伝来とともに篤い信仰を受け続けてきました。
北殿の新四国靈場にも数多く並んでいます。

(九) 十二神将

神子柴の薬師堂に、十二神将の本像があります。
十二神将は、薬師如来の十二の大願に応じて現れた分身で

あると言われます。（お経に出で来ます）

昼夜一二の時を守護する神とされ、頭に十二支を拂する神
将となつて、それぞれの年回りに応じての守護神ともいわれ
るようになりました。

(十) 十王信仰

十王は、冥土の閻魔府において人々の生前の罪業を裁く王で、
人が死ぬと一〇人の王によつて次々と裁かれるのです。閻魔
大王はその一人です。

生前に十王に供養しておくと、罪を軽くしてもらえるとい
う信仰が古くからありました。

村内にも十王像はいくつかあり、お堂の跡も残っています。

(十一) 甲子信仰

村内にも甲子塔がところ
どころに見られます。

祭神は大黒天で、七福神
の一つで、これを祀ると金
が溜まると信じられてきま
した。講をつくつて皆で薬
しんだり、無尽講のような
ことをしたりしていた人達
もいました。



田畠 旧伊那街道端にある甲子碑

(国) 山岳信仰

山には靈力があり、その力を受けたいという信仰です。その靈力を得るために、登山したり、祭りをしたり、また碑を建て信仰心を表したりしました。

富士山、御嶽山、月山、大峰山等々たくさんの山を対象の信仰碑が、村内にもいくつか残されています。役行者像も、山岳信仰の一つだと思われます。各地に残る富士塚や浅間塚も富士山信仰を表すものです。

(国) 筆塚

本来は、勉学のために使われた筆の功を謝するため、古くなつた筆を埋めて築いた塚のことを言うのですが、やがて、寺子屋の師匠の功績をたたえるために、筆子(教子)が碑を建立するようになり、それを筆塚と呼ぶようになりました。

村内にも師匠の功績を讃えた筆塚がいくつか建てられています。(各地区にあるものを参照)

1 (国) 社寺建築用語



殿村八幡宮

石の間でつないだ造り(図1)

2 入母屋造・上部は切妻のよう二方へ勾配があり、下部は寄棟造のよう四方へ勾配がある造り(図2)

3 流造・切妻造平入り屋根に反りをつけ、その前流れを長くして向拝とした造り(図3)

4 本殿・神靈を奉安する社殿

5 拝殿・礼拝を行うための神社の前殿

6 向拝(こはい、こうはい)・社殿の正面の上に張り出した底の部分

7 屋根の向き・妻入り・三角形をなす面が正面になる平入り・屋根と平行な面が正面となる

8 切妻屋根・図参照(図4)

9 唐破風(からはふ)・千鳥破風・切妻屋根の端の山形した所の装飾を破風という(図5)

10 千木(ちぎ)・鰯木・社殿の屋根の最上部へとりつけられた装饰

(図6)

11 格子戸(こうじど)・細い角材を間をすかして縦横に組んで造った戸

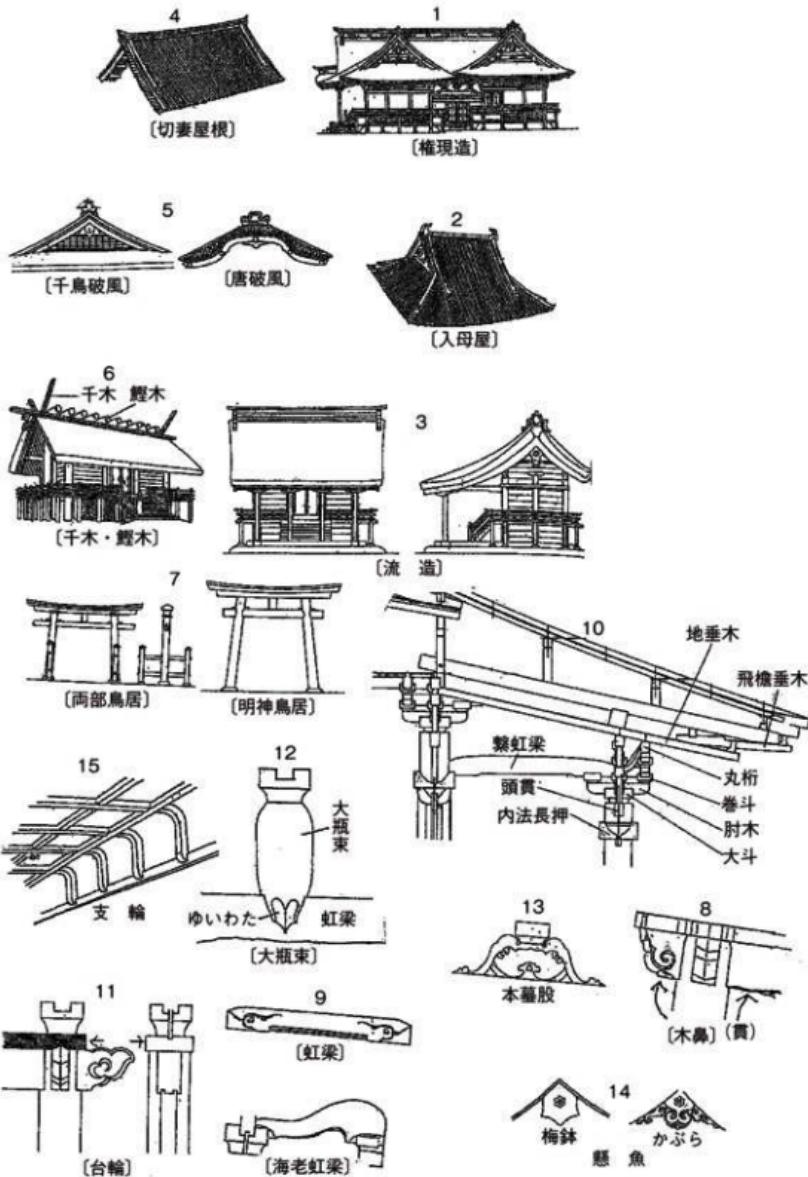
12 明神鳥居(みょうじんとりい)・両部鳥居・図参照(図7)

13 柿葺(かきよし)・コケラ(松または柏を薄くはいだ板)で葺くこと

14 浜縁(はまえん)・向拝の階段の下の床

15 見世棚造(みせたうぞう)・神社の正面の階段の代わりに供物などを置く板や棚をつけたもの

- 18 17 16 勾欄・廊下、橋などの端が反り曲がった欄干 (らんかん)
- 19 脇宝珠・欄干の柱の頭につける宝珠の飾り (ほかじ)
- 20 脇障子・神社などの側面の縁に立てて前後を仕切る板戸 (わきしやじ)
- 21 20 木鼻・貫の端が柱から突き出した部分 (きばな) (図8)
- 22 21 虹梁・虹のよう上方にやや反りを持たせて造つた化粧柱 (こうりょうじゆ) (けいざう)
- 23 23 棟木・屋根の最も高い部分の部材 (位置や構造によつて大棟木、隅棟木、箱棟木など) (ひなぎ)
- 24 24 衍・垂木を受ける材 (柱と柱の間に渡す) (けい)
- 25 25 長押・柱と柱をつなぐ水平材 (場所によつていろいろな言い方がある) (なげし)
- 26 26 斗・柱などの上に設けた方形の受け木。組み物を構成し、を支える横木 (こよの木) (けい)
- 27 27 肘木・斗と組み合わせて組み物を形成し、上からの重さを支える横木 (けい)
- 28 29 台輪・柱の頂部をつなぐ厚い板 (ひびき) (けい)
- 30 30 大瓶束・虹梁の上に立てる瓶子形の束柱 (ひんしきじゆ) (けい)
- 31 31 懸魚・破風の下、またその左右につける装飾 (えの毛) (けい)
- 32 32 軒支輪・軒裏の天井の斜めに立ち上がる部分に湾曲した材 (けい)
- 33 33 堅木を並べたもの (めん)



五 南箕輪遺跡一覽表

(平成12年3月現在)

番号	種別	名 称	所在地	時 代	立 地	遺 構・遺 物	備 考
1	包蔵地	淨水場付近遺跡	大泉	縄・古	台地	縄文中期土器、打石斧 他	
2	"	権現堂遺跡	"	縄	段丘	"	
3	"	白木屋北遺跡	"	縄・古	平地	縄文中期土器、打石斧、土師器	
4	"	秋河原遺跡	"	縄	段丘	縄文中期土器	
5	"	北高根A・B遺跡	大芝原	縄・弥・中	"	住居址12、石器、土器、古鏡	昭和47年調査
6	"	南高根遺跡	"	縄・半	"	石器、土偶、刀子、住居址 他	"
7	"	大泉遺跡	大泉	弥・古・平	台地	土器	
8	"	大芝東遺跡	大芝	縄・弥・平	段丘	住居址2、石器、鐵鏟 他	昭和47年調査
9	"	大芝原遺跡	"	縄・弥	"	土器、土器、石器	"
10	"	大芝南遺跡	"	先・縄・弥・中	台地	石刀、石斧、磨石器、古鏡	
11	"	富士塚	"	近	平地	古鏡	
12	"	二里沢遺跡	"	縄	"	中期土器	
13	"	クソン洞A遺跡	南原	縄	段丘	中期土器、石器	
14	"	クソン洞B遺跡	"	縄・半	台地	土器、陶器	
15	"	孤久保遺跡	"	縄・古	"	石器、鐵鏟	
16	"	信大農園遺跡	"	縄	"	中期土器	昭和47年調査
17	"	曾利日遺跡	"	縄	段丘	"	"
18	"	三本木原遺跡	"	縄	"	加曾利E式	"
19	"	南原遺跡	"	縄	扇状地	前・中・晚期土器、横刃型石器	
20	"	沢尻北遺跡	沢尻	縄	台地	加曾利E式、打石斧	
21	"	沢尻遺跡	"	縄	"	中期土器	
22	"	大畠遺跡	"	縄	"	"	
23	"	春日道上遺跡	"	弥	段丘	後期土器	
24	古 墓	丸山古墳	久保	古	"	子持勾玉、直刀	文久年間に消滅
25	包蔵地	上ノ平遺跡	"	縄・弥・奈・半	"	土器、石器、土偶、陶器、鉄製品	平成7年調査
26	"	久保下遺跡	"	古	平地	田角、田下駄、鈴	
27	"	南垣外遺跡	"	縄・弥	台地	縄文中期土器、凹石、脊生土器	
28	"	天王原遺跡	"	半	"	土師器	
29	"	向垣外遺跡	塙ノ井	縄・弥・古・半	"	土器、石器	
30	"	山の神遺跡	"	縄・弥	"	加曾利E式、土偶、脊生後期土器	
31	"	内城遺跡	北殿	縄・古	平地	磨石斧、子持勾玉	
32	"	天伯遺跡	塙ノ井	縄・弥・半	台地	住居跡多数、土器、石器多數	昭和42年調査
33	"	上人塚遺跡	"	縄・半	"	中期土器、打石斧、須恵器	
34	"	垣外遺跡	"	縄	"	鶴坂式	
35	"	柴宮遺跡	北殿	縄	"	中期土器、打石斧	
36	"	塙ノ井遺跡	塙ノ井	弥	平地	後期土器	平成6年調査
37	"	東垣外遺跡	北殿	弥・古	台地	土器	
38	"	西垣外遺跡	"	縄・弥・半	平地	縄文石斧、石劍、弥生・平安の土器	
39	"	秋葉神社付近遺跡	"	縄・弥	台地	縄文石劍、弥生土器	
40	"	西富士塚遺跡	"	"	"	"	
41	"	宮の上遺跡	南殿	縄・半	"	縄文石器、須恵器、灰釉陶器	平成元年調査
42	"	羽場遺跡	田畠	縄	"	中期土器、打石斧	
43	"	田畠遺跡	"	縄	"	加曾利E式、打石斧	
44	"	神子柴遺跡	神子柴	旧・縄・半	"	臼石器各種、火葬墓、灰釉陶器	昭和33年調査
45	"	高根遺跡	大泉	縄・半	"	墳穴址3、土器、陶器	昭和47年調査
46	"	箕輪遺跡	久保	弥・吉・奈・中~	平地	水田構造、木杭、木製品、陶磁器	昭和57~平成6年
47	"	北垣根遺跡	北殿	弥・古・半	台地	弥生土器、須恵器、土師器	平成2年調査
48	散布地	南部小学校遺跡	沢尻	縄・半	"	中期土器、土師器	平成5年調査
49	包蔵地	久保上ノ平遺跡	久保	縄・弥・奈・半	"	中期土器、住居跡多數、特殊構造、 跳溝墓等	平成7年調査

『南箕輪村誌』から

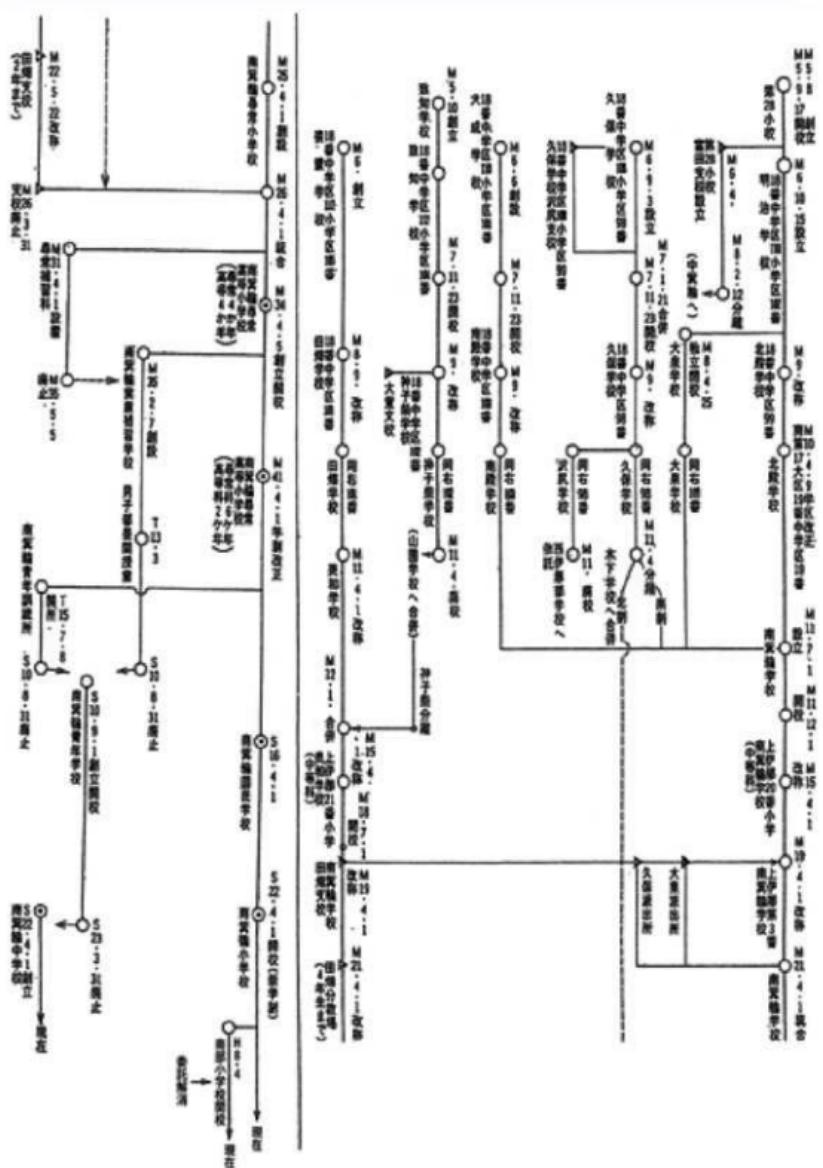
縄文時代 今から1万年~2300年前(本村で多く出土する中期は今から5000年~2300年くらい前)

弥生時代 今から2300年~1600年くらい前

古墳時代 今から1600年~1300年くらい前

奈良時代 今から1300年~1200年くらい前

六 南箕輪小学校沿革概表 (「村誌」より)



七 南箕輪村にあつた横井戸一覧表

(平成24年10月作成(松澤))

番号	地区	名称 または 所在	起工 あるいは 竣工	遺構・遺物・現状 等	村誌 所載	その他
1	久保	天王上		縦穴1、出口の石垣、水少々		
2		春日道下		高さ1.5m、幅1.2m、水無		
3		喜多屋下	昭和4年	高さ1.5m、幅60cm		
4	北殿	向垣外	嘉永年間	水神祠、縦穴、掘削水路、活用中	○	古文書あり
5		龜徳水	明治31年	長さ170間、幅1尺3寸、水神碑、石組み、活用中、2町歩用水	○	「あらかじめ足りてうれしやこの清水」
6		齊		2町3畝の用水、活用中(生活)	○	
7		出頭		4町3反の用水、水あり	○	
8		八幡社中	明治4年		○	
9		宮ノ上山林	明治31年		○	
10		桜ヶ丘	明治30年	2町歩の用水、水無し、出口	○	
11	南殿	八幡入	明治26年	横穴300間、4町1反、記念碑、活用中	○	
12		上河原	大正4年	記念碑、活用中		
13	田畠	堤山上	明治10年	掘削(横穴・掘削とも)150間、水神社有、2町3反の用水・生活用水、石組	○	
14		堤山下	明治15年	1町1反歩の用水、水有	○	
15		吉原	明治31年	横穴・高さ5尺5寸、幅3尺、遺構無し	○	
16	神子柴	ウラダテ	明治32年	8反の田用水、水路・水有り	○	
17		鳥居原	明治33年	飲用、横穴跡、幅2尺、水無	○	1ha
18		芋ノ田	明治38年	出口の石組、水神碑・記念碑、水有		
19	沢尻	南原林	明治14年	水路、水少々	○	
20		和手垣外				未調査
21	大泉	大新	明治3年	出口穴、水神碑、8反用水、水無	○	溜め池があった
22		西村	明治26年	横穴350間(石積140間・高さ3尺)、1町8反用水、水神碑、活用中	○	
23		ムクリ	明治33年	遺構保存、268間掘る、水わずか	○	3ha
24		酒井	大正14年	水路有、水わずか	○	
25		東垣外	明治16年	横穴151間、掘削100間、遺構無し、記念碑有	○	3ha

あとがき

この本の元になった『南箕輪の史跡』は、『南箕輪村誌』より前に出されたこともあって、欠けている面や・誤りが指摘されていました。また、漢文や難しい言葉が使われていて読みにくい面もありました。そこで編纂委員会では「中学生にも読めるような本にしたい」と願って検討を重ねてきました。

わたしたちは、若い皆さんにも親しんで貰えるようにと内容を広げ、史跡を今の社会へ結びつけ、出来るだけ分かりやすいことばを使って説明するように心がけるとともに、西暦やルビを加え・カラー写真や参考資料も採り入れました。

南箕輪村は、人口が増え・村の姿も大きく変わって来ています。そんな中で幾つもの貴重な遺跡の発掘もあって、村の歴史に興味を持つ人々も増えています。この本が出版された機会に、郷土の歴史に親しんでいただく人が増えれば幸いです。また、改めて史跡を尋ねてみると風化・人為的放置により消えてしまうことが心配される所もあり保存を呼びかけたいと思います。

本書は、正確に書くために資料を調べ直し・現地を再調査し・写真を撮り直しましたが、まだ不十分な面があります。それは今後の研究を待ちたいと思います。終わりに調査や資料・写真提供にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

『南箕輪の史跡の話』執筆者（編纂委員）

『南箕輪の史跡』執筆者（アイウエオ順）

全 村	松澤英太郎（委員長）	有賀 士郎	有賀 篤夫	伊東 宏
久 保	白鳥喜一郎	宇治 由一	春日 正	加藤千代人
塙ノ井	征矢 鑑	唐沢 正国	北原 哲郎	倉田 高明
北 殿	小澤 敏美	清水 一清	清水 博之助	清水 守人
南 殿	山崎 光広（松澤英太郎）	立石 征矢	高木 清幸	杉沢 崇
田 畑	松澤英太郎	威 憲	中沢 和夫	武田 三郎
神子柴	原 旭一（副委員長）	原 正寿	日戸 武彦	馬場 利光
沢 戻	清水 治	藤森 信	耳塚 正秋	堀 嶽
大 泉	原 孝寿	松澤英太郎		
南 原	南原 友松 瑞豊（松澤英太郎）	原 正寿		
大 芝	大芝 友松 瑞豊（松澤英太郎）	藤森 信		
北 原	中原 旭一	耳塚 正秋		
中 込	松澤英太郎			
資 料	松澤英太郎			
写 真	スタジオ結他			

南箕輪の史跡の話

平成三年三月 印刷
平成三年三月 発行

編纂 南箕輪の史跡の話 編纂委員会

发行人 南箕輪教育委員会

印 刷

株式会社プリンティニアナカヤマ
南箕輪村神子柴七七三一一一



茅ヶ崎市立
茅ヶ崎村教育委員会